日本建築協会 発行

復刻版

建築と社会

第78巻

第26集第１号～第26集第７号（昭和18年１月～７月）

不二出版

復刻にあたって

一、原本の誌名は次のように変遷している。
　『関西建築協会雑誌』（大正６年９月～７年12月）
　『日本建築協会雑誌』（大正８年１月～８年12月）
　『建築と社会』（大正９年１月以降）

一、表紙を若干縮小して収録した場合がある。また、原本が断裁されているため、不完全なものがある。

一、断裁による不完全な文字は組み直したものがある。

一、表紙の刷色は一色に統一したため原本とは異なる。

一、口絵はカラーの頁も全て黒一色で印刷した。

一、「会報」の通頁には乱れがあるが、原本のままとした。

一、各集ごとの「総目録」は、発見できたものに限り、該当集の第一号の前に収録した。

一、裏表紙は、『第一集第一号』に限り収録した。

一、目次の発行日は、奥付に記されたものを採用した。

一、前付広告の一部及び後付広告は収録しなかった。「広告見出」「広告目次」および「掲載広告一覧」（復刻に際し新たに組み、付け加えた）を参照して頂きたい。
　また、広告頁には独自の頁が付けられているため、本復刻版の広告頁の頁は一貫していない。

一、本復刻版は日本建築協会所蔵の原本を使用した。

（不二出版）

【第78巻目次】

第26集第１号　昭和18(1943)年１月１日発行
第26集第２号　昭和18(1943)年２月１日発行
第26集第３号　昭和18(1943)年３月15日発行
第26集第４号　昭和18(1943)年４月15日発行
第26集第５号　昭和18(1943)年５月20日発行
第26集第６号　昭和18(1943)年６月20日発行
第26集第７号　昭和18(1943)年７月15日発行

大正6年9月14日　第3種郵便物認可　・昭和18年4月10日印刷納本・昭和18年4月15日發行（毎月1回1日發行）

建築と社會

第26輯　第4號
昭和18年4月1日

4

社團法人 日本建築協會

株式會社 竹中工務店
株式會社 滿洲竹中工務店

本店 大阪市北區中之島朝日ビル
電話北濱一九一番
新京特別市順天區吉林大路三四號
電話(二)四三四二番

營業所 東京、横濱、名古屋、京都、神戸、福岡、京城、新京、吉林、奉天、安東、大連、北京、天津、濟南、青島、上海、南京、漢口

特許專賣
ロータス
セメント防水劑



ロータス防水工法責任施行
圖城化學工業株式會社 大阪營業所
大阪市西區京町堀一丁目 (電)土佐堀(44)825 3825
東京營業所 東京市渋谷區金王町五 (電)青山 3810
広島營業所 広島市數寄屋町一八 (電)中(2)1344
滿州国總代理店 株式会社 大信洋行建材部

淺
會株社式
淺沼組

營業所 東京・名古屋・廣島・京城・奈良

大阪市天王寺區石ケ辻町
電話南(75)七七三〇(二)
八七八七(三)
九七八五(三)

電燈、電力各工事請負
照明器具製作販賣
電氣機器加工修理

共立電氣商會
市川正三郎
大阪市南區問屋町12番地
電話南(75)5788番

建築と社會

第26輯　第4號　　昭和18年4月發行

四月號

目　次

木造建築の耐腐朽性……十代田三郎…(1)
昔の人の建築保持……城戸久…(4)
共同住宅の管理に就て……酒井清一…(8)
北加賀屋住宅を訪ねて……編輯幹事會…(11)
家庭の待避所と工場の待避所に就て……岡田達彌…(27)
史蹟養壽庵址 元伏屋邸……池谷久吉・宮崎秀正…(44)
建築と造園 (2)……白川泰…(53)
南方建築展覽會記……(66)

☆紫　烟　室☆

自然と鍛錬……辰巳孝雄…(62)

☆寫　眞　欄☆

甲子園竹友寮……
同　平面圖……(41)

☆ス　ケ　ツ　チ☆

乘鞍の民家……廣瀨初夫…(42)
會　報……(68)

三星印

三星印岩綿製品
防音・保温・耐火裝置
三星岩綿(バザール)ブロック構成の防音裝置は爆音に耐へる吸音率を有す

設計　大阪市北区中之島五ノ三〇　大阪田島應用化工株式會社　電話土佐堀(44)1323.5682.6221.7294
施工　東京市神田區岩本町三番地　三星産業株式會社　電話浪花㈹0072番

會　　告

決戰態勢の緊迫に伴ひ、あらゆる刊行物が用紙制限を餘儀なくされました。しかし考へてみるに、大東亞戰爭といふ有史以來の大戰爭に國運を賭して敢闘しつゝある現下の我國に於いて、ともかくも恙なく發行を續け得ることそれ自體がすでに深き感謝に値する事實であります。

本協會發行の**市街地建築物法令、昭和18年度改訂版**は4月上旬發行の豫定でありましたが時局下續々と法令の改正、新法令公布等のため發行が遲延いたして居りましたが、幸ひ關係官廳諸技師の御援助によりまして、內容、外觀相俟つて、從來に比して一段と決戰的色彩を濃厚に、その精髓を收錄6月上旬發行の運びに至りましたことをいさゝか欣びとするところであります。幸ひ御研究を賜はらんことを！

昭和18年4月　　**社團法人　日本建築協會**

昭和18年度〝市街地建築物法令〟發行豫告

本書は現行の**市街地建築物法**を初め**市街地建築物法施行令・同法施行規則・同法施行細則**（大阪府、兵庫縣、京都府、警視廳〔東京府〕神奈川縣、愛知縣、福岡縣）・**同法關係法令**その他最近公布された**防空空地・工作物築造統制規則・土木建築戰時規格**を全部網羅編纂しました。本書はその性質上校閲に最も力を費し、關係官廳諸技師の援助を受けて出來得る限り正確を期したのであります。

建築家、建築業者、建築學生、其他苟しくも建築に關係ある者の必要缺くべからざる定本として敢て本書を薦むる次第であります。

昭和18年改訂　第13版
本綴　B列6號
定價65錢　送料6錢（豫定）

日本建築協會發行
大阪市・中之島・朝日ビル　振替口座大阪39975

木造建築の耐腐朽性

十代田三郎

日支事變以來建築用鐵材の使用制限に依り、其代用として木材の需要が激增し、一方木材の輸入禁止となつて木材の供給が益々困難となつて來たが、殊に大東亞戰の勃發と共に軍需並に軍需工場用として、木材の需要は極度に增加し、且つ最近木造船の建造に大量の木材を要求さるゝに至つたので、木材は益々貴重なものとなつて來た。

從て木材使用率の大半を占むる木造建築の耐久性の問題は極めて重要視さるに至つた。

木造建築の耐久性に關する主なる因子は火災と虫菌害である。火災も被害極めて大で、戰時下に於て、特に留意すべき事柄であるが、勃發的のものであり、且つ人の注意を攪起し易いが、虫菌害は漸進的で等閑視され易い。丁度火災をコレラに喩へれば、腐朽は正に結核で、コレラ程突發的でなく、一時に多くの犧牲は目立たないが、不知不識の間に蝕まれて行く損失は極めて大きく、且つ一朝風震時に倒れる危險率も決して小さくない。依て此所には主として菌害即ち腐朽に對する木造建築の耐久性に就て述べる事とする。

木造建築の耐久年限は其構造宜しきを得れば優に1千年を越え得る事は法隆寺其他古社寺の實例が示して居るが、又逆に其構造宜しきを得ざれば早きは2、3年にして既に腐朽する事最近しばしば見聞する所である。

木材は腐朽に依り重量を減ずると共に强度を減少するが、腐朽現象が未だ肉眼にて識別し得ざる程度に於て、既に20～30%を減少して居る場合が少くない。肉眼にて識別し得られる程度に腐朽したものは其强度は〇に近い。

即ち木造建築が腐朽すれば、設計の當初豫定された强度を減少するから、腐朽は資材の損失許りでなく、風震害等の一朝有事の際倒壞の原因となる危險がある。殊に最近鐵材の代用として木材の短小材を以て大張間の建築が盛んに建設され、又アンテナタワーの短少木材を以て組立てられるに至つたが、大材を用ひた構造物は多少にしても、其影響は比較的少ないが、短小材は僅か一部が腐朽しても其影響は大きい。

我國は雨量の多い爲に腐朽し易い事は云ふ迄も無いが、特に梅雨期から夏期にかけて、濕度の大なる事も我國の氣候の特徵で、腐朽菌の繁殖を旺盛ならしめる原因となつて居る。從つて我國に腐朽の被害の大なる事は自然の結果である。

我國古來の木造建築は長年月の間に自然腐朽を防ぎ得るやうな構造に陶汰されて居るが、木造建築中構造上最も重要な柱根が最も腐朽し易い事は他の構造部に先立て根繼が行はれる事に依て明かである。

殊に關東大震災後準耐火構造の一つとして採用された木骨鐵網モルタル建築及び之に類似の木骨塗壁建築が雨後の筍の如く簇出したが、外觀のみ鐵筋コンクリート建築を模倣して、而かも骨組が有機質の木骨である爲め、我國の氣候風土に適せず、塗壁より吸收した水分、濕氣が壁內に停滯し其環境は木骨の腐朽に最も好條件を與へる爲め、早きは2、3年にして既に木骨が腐朽し初めて居る。

此木骨の腐朽程度が外部から監視し得ざる爲め一朝有事の際頻る危險で、建物が倒れて後初めて其柱根が腐朽し盡して無くなつて居つた例を往年の北伊豆の震害地、京阪地方の風害地に於ても觀察された。平時に於ても外壁の修理又は模樣替又は移築等の際、木骨の腐朽したのを初めて知つて之で良く建物が倒れずに居つたと驚くやうな例を應々見聞する所である。

然るに最近又都市防空上、木造建築の防火構造として木骨鐵網モルタル塗建築が市街地建築物

法施行規則中にも加入されて居り、防空上は勿論都市の防火對策上其普及を圖る事は目下の急務であるが、其設計施工宜しきを得ざる時は、木骨の腐朽し易い事は既往の例に依ても明かで、將來思はざる災害を招く場合が憂慮される。

木造建築の防火處理は目前の急務であるが同時に將來をも考慮して木骨の防腐に就ても對策を望むものである。

然らば此木造建築の防腐法は非常に難事かと云ふに木材の防火處理に比すれば極めて容易で、構造上の簡單な注意と僅かな費用に依る木材防腐處理法に依て防止する事が出來る。其構造宜しきを得ざれば時として數年にして既に建築に致命傷を與へる事があるが、其構造宜しきを得れば其耐久年數殆んど半永久的である。此耐久年限に大差を生ずる原因は一に防腐構造の如何に存する。

木造建築の腐朽防止法の根本は腐朽菌の發育に必要なる環境條件の何れかを妨げる事と建築木材の耐腐朽性を考慮して適材適所に使用することである。

木材の腐朽菌の繁殖に必要なる環境條件は（1）木材中に營養分の豊富なる事、（2）好適なる濕度（3）好適なる木材の含水量及濕氣、（4）充分なる空氣とである。此4條件中の何れを缺除しても腐朽菌は發育得ない。

木材腐朽防止法の要諦は此繁殖條件の何れか一つ又は二つ以上を缺除せしむるか、或は其好適範圍を可及的脫せしめる事である。

第1　營養（A）木材の營養分に就ては腐朽菌の生育に不適當なる成分を有する木材即ち耐腐朽性大なる木材を選定する事。

（B）　腐朽菌の發育に好適なる營養分を有する木材即ち耐腐耐腐朽性小なる木材を腐朽菌の好まざる藥液又は腐朽菌を死滅せしめる藥劑即ち殺菌性のある防劑を以て處理する事である。

第2　濕度　腐朽菌に好適なる濕度を持續する事が其繁殖を助長する。此好適濕度は一般に20乃至40° C であるが、之より高濕に依て腐朽菌の繁殖を阻止する事は工場に於ける用材の殺菌、菌害部の驅除に用ひる特殊の場合を除いて常時構造物の實際に於ては 困難である。 從て 建築物としては濕量期腐朽し易き構造部周圍の濕度を出來る限り低濕に導くか、又は換氣に依り濕度に變化を與へて腐朽菌の繁殖を抑制する事。

第3　水分濕氣　一般に木材の含水率が木材の重量の 20 o/w 以上であると腐朽菌が繁殖し易いから、木部の含水率を 20 o/w 以下に保つやう工夫して腐朽菌の繁殖を妨げる。然し一旦20 o/w以下に乾燥した木材も濕氣が80%以上の換氣無き場所に用ひられた場合、木材の含水率が 20 o/w 以上に達し得るから、木部周圍の換氣を充分にして濕度を低減し、又は濕度に變化を與へて木部の乾燥を圖る事。

第4　空氣　腐朽菌は下等寄生植物であるから矢張り其生育には空氣を必要とする。從て空氣を少なくする事も殺菌法の一つである。建築木材部の周圍を低壓にする事は實際問題として不可能であるが、木材の含水率が木材重量の 100o/w 以上になると、次第に空氣量が減じて腐朽菌の繁殖に適しなくなる。基礎杭の如き特殊構造部は地下水中に埋沒して腐朽を防止する事が出來る。

（本稿に於ては此1項のみに就て記述し第2項から第4項に就ては後日機會に述べることとする。）

上記第1（A）の選材に依る腐朽防止法の資料として建築用木材の耐腐朽性に就て腐朽菌中最も腐朽力の大なる「ワタグサレタケ」に對する筆者の實驗結果に依れば、主要木材10種類の耐腐朽度は次の如くである。此耐腐朽度とは3ケ月間の人工腐朽に依る壓縮强度殘存率の數値の 1/10 の小數點以下を4捨5入した數値で、大なるもの程耐腐朽性大で小なる程腐朽し易い。

樹種	ヒバ	ヒノキ	アカマツ	クリ	ベイツガ	カラマツ	ベイマツ	ツガ	エゾマツ	スギ
耐腐朽度	10	9	7	7	6	4	3	3	3	2

上記の耐腐朽度を參照して腐朽し易い個所に耐腐朽度大なる木材を選定すべくである。尤も「ヒバ」、「ヒノキ」と雖も邊材は腐朽し易いから完全を期する場合は防腐劑の助けを借りなければならない。

殊に鐵網モルタル塗建築の木骨や全く雨露に曝される「アンテナタワー」や其他の短小木材の合成架構に於ては今後第1の（B）の防腐劑處理を必

要とする。防腐劑の種類は極めて多いが、其具備すべき條件を擧ぐれば

1. 防腐性又は殺菌性強き事
2. 揮發性、溶解性少なく化學的、物理的に安全なること。
3. 木材中に浸透し易きこと。
4. 木材の强度を減少せざること。
5. 接解する金屬を腐蝕せず、加工用具を害せざること。
6. 惡息を發せず人畜に有害ならざること。
7. 木材の色澤を害せず且つ「ペンキ」其他の塗料を施すに支障なきこと。
8. 發火點高きこと。
9. 吸濕性ならざること。
10. 安價にして供給豊富なること。

以上の條件を全部具備するやうな防腐劑は無いが、現在一般化されて居るもので最も有利なものは「クレオソート」油である。鐵網モルタル壁體の木骨には最も最適である。色が茶褐色の爲め純日本式の木材を露出する家屋に不向きの場合は淡黄色の「マレニツト」や無色の「クームヒン」等が用ひられるが、之等は稍水溶性である。只注意すべきは市販品として不良品の多い事で、其使用に當ては先づ其良否の判斷を誤らなぬやうすべきである。藥劑そのもの又は防腐處理木材の防腐効果の試驗を行つて使用するか、「クレオソート」油「マレニツト」、「バミリツト」等は藥劑の日本標準規格が既に定まつて居るから、其規格に合格したものを使用すべきである。

次に防腐劑處理法であるが、之には普通(1)塗刷法と(2)浸漬法と(3)加壓注入法とあるが、(1)塗刷法は最も簡易な方法であるが、之れに對する注意事項は少くとも2回以上塗ることで、1回塗後充分の乾燥を待つて次回塗をすること。塗刷法の代りにスプレーを以て行ふのも一法である。塗刷の場合特に注意すべき事は土臺、桁等の末端及び繼手の小口に必ず防腐劑を塗る事で、寧ろ木材の表面より小口の方が大切である。殊に柱根は最も腐朽し易いから、柱の木拵へさしてから其底面に防腐劑を塗劑するか、又は第2法に依り柱根を防腐劑に一晝夜以上浸漬する事が有利である。斯くして建築物の腐朽し易い要所を防腐處理することに依て遙かに耐久無理を延長することが出來る。

木造建築は他の大部分が腐朽して居らぬ中に土臺とか柱根とか、桁の端とかの一部の腐朽の爲め建築全體の壽命を縮める場合が多い。

次に第3の加壓注入法であるが、前記した如く鐵網モルタル壁體の木骨とか直接雨露に曝される短小材の架構等は一部分の腐朽のため思はざる災害を惹起することがあるから、此が壓注入法に依るべきである。塗刷では木材の表面だけの防備であるから、防腐劑の効力は長年月に耐え得ない、殊に鐵網モルタル壁體の如く後で塗り替への出來るぬやうな個所は特に加壓注入法に依て邊材部の中まで深く注入せしめる必要がある。加壓注入法にも種々あるが、要するに工場で壓力罐に(木拵へした)木材を入れ、密閉の上一旦減壓して木材中の水分空氣を排出せしめた後、防腐劑を加壓注入するもので、一見處理費が嵩むやうではあるが多く見て木材價格の5割位のもので、其年限は優に數倍の耐久年限となるから、塗費價値は十二分である。現今のやうに木材拂底の場合は寧ろ經濟觀念を超越して木材を保護すべき時である。殊に塗刷用として防腐劑の市販品は拂底して居るが、注入工場には相等配給されるやうに聞いて居る。

最近木材保存會に於て建築及び土木用材の防腐處規格案が作製されたので、遠からず企畫院より日本標準規格として發表される事と思ふが、其適用實施に當ては大いに御協力を願ひ、木材保護の徹底を希ふものである。(18—3—5)

(筆者は　工學博士早大教授)

昔の人の建築保持

城戸久

はしがき

時局下新しい建築の新築は勿論、增築なども容易でない際、既設の建築物を出來る限り保久維持することは目下のところ重要な問題であるは言ふまでもない。わが國の過去の建築に於ては木造に限られてゐたのであるから、今日の新材料新構造法に依るものなどとはその壽命は比較にも及ばない。にも拘らず相當の長年月に耐へてよく今日にまで及んでゐるものは少しとしないのである。これはこの間にあつて昔の人の建築保持に對する絕えざる熱心な努力があつた賜でなければならないと思はれる。しかし別に目新しい變つた保持策があつたとは考へられず、只、不斷の心懸けの如何に依るに過ぎないのであるが、事實、昔の人が建築保持にどれほどの努力と注意を拂つてゐたかを知ることも、時局下この問題がとり擧げられてゐる際、決して無益ではあるまい。そこで些少の史料に依つて、その2～3を覗つて見ようと思ふが、怱忙の際とてまとまりない散錄に過ぎないことを豫めお許しを得たく思ふ。

江戸城の門番

何處の官衙、會社に於ても門衛乃至は守衛が居て、定められた服務規程を遵守してゐる。昔の場合と雖も同樣であるが、例へば享保6年閏7月の江戸城內曲輪御門御定書なる今で言ふ門衛の服務規程に依つて見ると、その內に次の條項のあるのが注意される。即ち

一、御門並御番所、其外破損無之樣に心を附可申候、尤破損有之は其趣御留守居中之早速可被申達事

一、御門、御番所等之屋根草を取、土居之草折々刈候樣に可被申付候

但　渡矢倉屋根、塀屋根に草有之は御目付中之可被達候、且又水やり惡敷所は、水不溜樣に可被申付事

一、御門並御番所柱根、土臺之土不掛樣に仕、御門廻り請取之場所は不及申、勝手廻り迄常々無油斷掃除可被申付事

附　水打候節、柱根並土臺之水掛さる樣に可被申付事

とある。これに依ると當時の門番は單なる門衛でなく、建築物の破損個所を發見した時は、それを報告する義務があつたことが解り、殊に掃除に際しては柱根や土臺に土をかけないやう、又、水を打たないやうにと定められてゐたことが知られる。これ等は建築物を長く保持しやうとする目的からであることは言ふまでもなからう。門衛の服務規定として建築保持に關する條項のあるところは恐らく今日ではあるまい。又建築保持に重きをおいて、これ程注意深く、些細に掃除のことまでに觸れて明示したものゝ如きは尙更に絕對に見當らないと言ふも過言ではなからう。

松平伊豆の建築保持

江戸時代の城廓建築は白漆喰塗を常套としたから、普通では風雨に依つて破損することは避け得ない。從つてその耐久性を保たしめることに種々苦心を拂つたことは言ふまでもないが、その內信綱記の中に傳へられてゐる記述に次の如きものがある。

（前略）鈴木修理木原內匠に被申は御天守の白壁度々風雨に落修覆難致然聞いかほと土落候とも見えさるやうに下塗より白土にてぬり候におひては右の破損つくろはすして不可見之然るに是をぬり候て寒暑にあひても不損ぬり土の法やこれ有やと御たつね有ければしかと致たる證據なくぬり土の法計也　其時伊豆守被申は火事無之

とも御天守の御破損大かた當年時分に可當と存廿年先より此心ありてねり土の法を吟味せしめ五色拵廿年先より今日迄寢間の前にさらし置候内此ねり土の法不損能被存候ての然ほとのねり土のかた五つ奉行衆の前に被出則此法を以御天守を塗候へば其後御天守の破損無之と也

さて、松平伊豆の考案した煉り土の法とは如何なるものであつたかは今知る由もないが、兎に角これに依つて松平伊豆が白漆喰塗の損破し易いことに留意し、修理の際に應ずるため、20年の長い間その對策を研究してゐたことが知られる。このことは單に壁に關する傳へではあるが、これより押して松平伊豆が建築の保持に如何に不斷の注意を拂つてゐたかを示す一例であると考へられる。當時に於ては松平伊豆の如く要職にある人までがかうした問題に眞劍に苦心してゐたことを窺ひ得るのである。

樂書は死罪

名勝舊蹟の古建築に樂書や貼札のあることは屢々見られるばかりか、新築早々の建築が樂書で汚されてゐることも少くない。これが嵩じるとひいては建築物を毀損することになり、建築保持上の大害であるは言ふまでもない。昔と雖もこれには困惑したと見え、その根絶策が講じられてゐる。それは樂書は死罪と言ふことである。即ち江戸城二之丸御番の定たる元和8年憲教類典に依ると

一、樂書之事、おとなは死罪、小人は流罪、本人しれずば其座敷之當番過料銀拾枚、但番衆多少によるべし。

とある。この嚴なることは只に建築保持上の問題ばかりでなく、他の理由に依るところのものも多いと思はれるが、これでも樂書も樂どころではなく、命懸である。

名古屋城天守の掛札

建築物は修理に依つてその生命を保持するものであるから、何時如何なる場所を如何やうに修理したかを銘記しておくことは少くもそれ以後の修理に對して多大の參考になること言ふまでもない。殊にかうした建築の履歷とも言ふべきものが完全につくられてゐて、外觀に現はれない部分と雖も修理すべき個所や時期を豫定することが出來るならば、その建築を保持してゆく上にまことに都合がよい。この例は名古屋城天守に見られるので、寛文9年から元文5年に至る13回の大小の修理は、その修理個所、修理狀況、關係人名を細大漏らさず銘札に記して、天守の內部に掛札としてあつたのである。この掛札は恐らく明治初年取拂はれたと推察せられ、その後散失して現在見られないのは遺憾であるが、江戸時代の末にそれを筆寫しておいた記錄が遺つてゐる。それに依つてこの修理記錄が如何に詳細であるかが解る。一例を享保19年の修理にとつて見ると、掛札には次の如く記載されてある。

享保十九甲寅八月下旬取懸り同十二月中旬仕舞

御城代　成瀨　大內藏
同　大道寺　玄蕃
成瀨大內藏同心
御天守奉行　渡邊彌右衞門
大道寺玄蕃同心
同　稻留　安兵衞
（以下人名を本稿で省略す）

御天守御修覆之覺

一、初重目胴壁窓戸所々白土繕
一、二重目胴壁窓戸上裏共所々白土繕谷五ケ所漆喰仕直し
一、三重目屋禰東南之角梁朽はき繕同角木二間半切繼卷鐵二ケ所たる木四本取替出し桁壹間宛折廻にて二間切繼萱葺二間半取替裏子五尺繕切裏子朽はき繕裏板土居葺卷木舞まき板取付上け裏下地間ぬり直し同胴壁窓戸上ケ裏とも所々白土繕谷三ケ所平共漆喰仕直し
一、四重目胴壁窓戸繕谷六ケ所北附屋禰惣平共漆喰仕直し上ケ裏白土繕
一、五重目胴壁窓上ケ裏繕銅屋根鋲釘足メ直し鯱兩方共鳥よけ打箱棟あさ里板朽はき繕鋲釘打直し

十二月　御作事奉行　市川　平七郎
同　廣澤三左衞門
御大工頭　齋谷　小兵衞

その他以下手代、大工、左官の名を擧げてゐる。以上のやうな小破損は今日の建築では放置し

ておくか、修理をするにしても仕様書も作られず無雑作に行つて失まうであらう。ましては銘札に記して、その記錄を遺しておくなどのことは絶體にあるまい。かうした絶間のない建築保持に對する注意と努力に依つて木造乍らよく300年を保存されて來たのである。少くもこれから永く遺こしておかねばならぬ記念的建築物に對しては、このやうな心懸があつて欲しいと思ふ。われわれが明治、大正の頃に建つた記念的建築物を調査する必要があつて調べて見ても、修理記錄はおろか、建築當時の設計書その他一切が全く失はれてゐるのに屢々遭うにおいて一層その感が强い。

役宅の修理心得

破損を大破損にならない內に早く修理しておくことが、永く保持してゆく上にもつとも重要なことであるのは明かである。しかしそれを實行するのは普通では容易でなく、やゝともすると小破損は放置され易い。かうしたことは昔も今も變りはない。しかし江戸時代に於てはこの點に特に留意して武家役宅へは屢々修理に對する注意の觸書が廻つてゐることは、この際深く銘記すべきであらう。これに依つて建築保持に關する當時の人の熱意を窺ふことが出來るのである。例へば癸卯雜記の寛政3年火消役宅への觸書に次の如くある。

火消役御役宅之儀、小破之分者致自分繕、大破にも及候はゞ御修復願候樣、明和七寅年相達候處、右之通り不行屆向も有之趣相聞、自然と及大破、度々御修復願出候樣に有之候、御役宅之儀に候得者、自分家作よりも猶更心付、平日小破之內取繕等いたし、風雨之節も手當等いたし心付候はゞ諸事行屆可申事に候、畢竟破損懸りのもの無之故、行屆兼候儀にも可有之哉、依之以來組與力同心共之內にて、一兩人宛も破損方懸り申付、住居向並長屋末々迄も常々相廻り聊の小破にても早速取繕申付、成丈け不及大破樣に可被致手當候、尤右懸り之ものも未熟に候得ば、所に寄引替之儀可申談候、右之趣被得其意精々可被申付候、破損懸り與力同心共人數之儀者申合可被相伺候、御作事方小普請方よりも、月々見廻之者爲差遣候、猶又御修復之儀は、持樣宜樣に迫々入念可申付旨、御作事奉行、小普請奉行へも申渡候、且各御役宅自分建繼等之儀も有之由、建繼取崩共御作事方、小普請方へ申談候樣可被致候

文中「御役宅之儀に候得者、自分家作よりも猶更心付」とあつて、不心得者に注意をうながし、破損は小破の內に自分で修理すべきことを命じてゐるのが知られる。又、特に破損を見廻つては修理をする役の者を常置したことが注意されるのである。解りきつたことではあるが、時局下このやうに小破損は自己修理をなし、又修理專門の技術家があつて、常に見廻はることは、官舍や社宅などでは特に必要ではあるまいか。

屋敷にて花火注意

火災豫防は建築保持上言ふまでもなく、絶體的に必要であるが、江戸は屢々大火に惱まされてゐるので、火災豫防に關する禁令は甚だ多いが、その內少し變つたものを拾つて見ると、公儀御觸書元文3年7月に

常之花火たりといふ共、家込之家敷にては仕間敷儀に候處、近來は牛込邊其外屋敷々々にて、花火りうせい等、立候樣に風聞候、堅可爲無用候、向後右之通之儀有之候者、急度御吟味可有之候、右之通可被相觸候

と言ふ花火の取締がある。今では花火は完全に取締られてゐるから、かうした心配はほとんどないが、それでも夏向には玩具用に拘らず相當大きい花火が町中で上げられることが多い。

火除地建築に付取締

大火豫防の上に空地を明けおくことは最も必要であるが、江戸時代このことは既に實行に移されてゐる。即ち、公儀御觸書天明7年に

町地面之內、明地並河岸、又は川內埋立場所、是迄拜領地、或拜借地等に相願、致家作候付、出火有之候節、火消等五切消留候儀も難相成、自然と大火に相成、諸人及難儀候、一體明地之儀は、火除之爲、先年代地被下、被召上候場所多有之、縱令上地に無之場所も、町屋近邊明地は、都而火除之爲、家作除地に有之儀候得共、向後右體之場所、拜領町屋敷、拜借地等に願申間敷候

とあつて、積極的に空地を設けて建築を禁じてゐるのが知られる。このことは建築保持の問題と直接の關係はないが、今日防空上の見地から空地問題が特にとりあげられてゐることにかんがへて、當時火災豫防に就て如何に腐心をし、又如何に積極的にその方策が講じられてゐたかを知る上に敢へて附け加へておきたく思ふ。建築敷地の板塀取拂や看板の取解しも必要乍ら、更に進んで今日こそ昔にかへつて空地の設定が緊急ではなからうか。

あ と が き

なほ史料を博く捜せば昔の建築保持を知る上に一層適當なものも數多く見當らうが、かうして僅か記し擧げて見ただけでも、今日ではおろそかになり勝な當時の人の不斷の心懸けの程を充分に認めることが出來やう。建築物を保久維持しやうとすることに對して、目新しい對策があるかも知れぬが、筆者はそのことを知らない。よしんばさうした方策があるとしても、昔の人が留意して來た上記のことは現在と雖も亦この問題に對しておろそかにしてはならない事柄であると信じて疑はない。

（昭.18.2.24稿）

（筆者は　名古屋高等工業學校建築學科教授）

鑿泉及喞筒設備
給水衛生工事
煖房冷房換氣工事
汚水槽及改良便所

藤田商會

大阪市西區京町堀上通三ノ九
電話土佐堀㊹2336



旭幕暗株式會社大阪出張所
地番二四目丁三通上江堀南區西市阪大　電話(64)川櫻番一九六
地番三目丁一橋京區橋京市京東　電話(56)橋京番九八〇七
社本

共同住宅の管理に就て

酒井清一

共同住宅の管理といふ問題については、色々な面より考察されねばならないが、本稿においては主として經濟的な管理の問題について述べて見たいと思ふ、といつても私は一技術者に過ぎない。決してその方面に明るいわけではないが、唯かつて數種の共同住宅の設計に關係する內自然この問題に接觸するところもあり、間々見聞もした結果必要に迫られて一つの表を作成し得たので、ここにその表を掲げて解說し文責をまぬがれたいと思うのである。その前に一應おことわりして置きたい事はこの表は二三年前作成したので、社會的事情の變動のはげしい今日になつて果して尙その價値が分當であるかどうか、私しとしてはその邊甚だ心もとないのであるが、併し共同住宅が一つの不動產投資物として利潤の對象として考へることは益々ゆるされなくなる事情にあるとしても、勞務者用共同住宅の運營管理上に於いて、矢張り一應はその經濟的管理上の問題は考慮されなければならないと思う。かゝる意味でこの小稿が何等かの參考になればと念願するのみである。

					備考
①固定資本	建築費	建築延面積	・・・・坪		登錄稅、不動產取得稅、建築稅ヲ固定資本ニ加算スル場合モアル
		建築費坪當單價	・・・・圓		
		建築費計		・・・・圓	
	設備造作費			・・・・圓	
	固定資本合計			○○○○圓	
②收入	室代	室數	・・・・室		* 營利經營ノ場合居住者食費ノ10.1ト推定ス
		室代（一室當）	・・・・圓		
		室代計		・・・・圓	
	*雜收入	食堂賄ヨリ上ル收益		・・・・圓	
	收入合計（月當）			○○○○圓	
③經常支出	經常費	償却費イ、	・・・・圓		* 公課ハ主トシテ家屋稅、地租稅及附加稅ヲ計上ス
		公課ロ、	・・・・圓		
		保險ハ、	・・・・圓		
		修繕費ニ、	・・・・圓		
		經常費計		・・・・圓	
	地代			・・・・圓	* 借地ノ場合ハ經常支出ニ計上自己所有ノ場合ハ自己ノ利得トナル
	管理費	人件費（給料・食費）		・・・・圓	
	消耗費	電氣ホ、	・・・・圓		* 貸家經營ノ場合ハ管理費消耗費ハ計上シナイ
		ガスヘ、	・・・・圓		
		水道ト、	・・・・圓		
		燃料チ、	・・・・圓		
		電話リ、	・・・・圓		
		雜費ヌ、	・・・・圓		
		消耗費計		・・・・圓	
	經常支出合計（日當）			○○○○圓	
④利益	②收入ヨリ③經常支出ヲ差引キタル殘額（月當）			○○○○圓	
⑤%	④利益 × 12 / ①固定資本（年）			○.○○○%	

前掲の表は、いわば一種の採算表とも謂ふべきもので何の奇もなく、唯計算すれば複雑なのを表に整理して一覽の便を計つたに過ぎないのであるこの表の欄内に逐次記入して行けば投下資金に對する利潤の%⑤、若しくは逆に%⑤に或る定數を與へて逆算し居住者一人當りの負擔金又は室代の決定をなし得る。唯ここに問題は表の①～③の各項について計算の基準を如何にすべきかといふことであるが、以下それについて說明を加へやう。

①固定資本

設計も見積も完了し、又は建物が出來上つてゐる場合は各欄にそれぞれ記入せずとも、建築費、設備造作、土地費の計のみ記入して、固定資本の會計を計上し得るが、計畫の初頭に當つて大體の見當をつけたいといふやうな場合建築延面積の決定は、敷地面積が限定されてゐる場合は法規による限度0.6以内に取り敷地面積に制限のない場合は收容人員1人當りの面積をその計畫の程度によつて決定し收容人員の數を乘じて建築延面積を決定する。

尙各場合の限度は下記の如く決定するが適當と思われる。即ち、

敷地面積より見當をつける場合の限度

0.5～0.4

收容人員1人當面積

イ　最少限に取る場合（養生工員寄宿舍等）

2坪～3.5坪

ロ　稍餘裕を見た場合（職員寄宿舍等）

4坪～5.5坪

建築費は坪當單價を見當つけて面積を乘じて計上す、設備造作費といふのは建築主體工事以外のもので衞生、電氣、壘、家具裝飾工事等である。これは大體の見當は主體工事の0.1～0.2を取る。

②收　入

室數の算定　これも設計の出來てゐる場合は問題なく算定し得られるが、前項の場合の如く敷地のみが與へられたる場合、又は延建築面積のみが與へられた場合、その室數の大體の見當は次式によつて得られる。

$$N=\frac{G\times R\times 2\times K}{A}$$

N＝室數　　G＝敷地面積

R＝敷地面積と建築面積との割合　0.3～0.5

2倍するのは、總二階建として延面積が出る

K＝延建築面積と單位室面積合計との割合

0.5 前後

A＝單位室面積　普通共同住宅又は職員寄宿舍……3坪～5坪

養生工員寄宿舍…6坪～9坪

室代の算定、建築費、設備造作費、土地費、室數がわかれば、昭和14年10月18日勅令、統制令による地代及家賃適正標準率（別表）によつて算定し得る。即ち

$$\frac{\left.\begin{array}{l}\text{建築費}\times\text{乘率}(0.0146)\\ \text{設備造作費}\times\text{乘率}(0.0214)\\ \text{土地費}\times\text{乘率}(0.042)\end{array}\right\}+\div\text{室數}}{12}$$

併し建築費の騰貴したる今日では上記の如く適正乘率によつて室代を算出しても、尙取締の上で、室代の最高價額ともいふべきものに制約されて、削減のやむなきに到る場合も可なり多いやうである。從つて勢ひ③の管理費、消耗費、②の設備造作費等の輕減を計らねばならなくなる、といふ事は設備が益々不備になることであるのは亦止むを得ない。

地代及家賃適正標準率及適用地域

地代　（年）0.092　トス

構造別		建築費			附屬設備及造作		
		甲地	乙地	丙地	甲地	乙地	丙地
普通建物	木造	0.0114	0.0105	0.0089	0.0155	0.0141	0.0120
	コンクリート煉瓦、石、土藏造	——	0.0085	0.0069	0.0132	0.0118	0.0096
	鐵骨、鐵筋	——	0.0074	0.0058	0.0127	0.0113	0.0088
下宿屋共同住宅ビルディング	木造	0.0146	0.0136	——	0.0214	0.0199	——
	コンクリート煉瓦、石、土藏造	0.0109	0.0096	——	0.0165	0.0145	——
	鐵骨、鐵筋	0.0096	0.0089	——	0.0135	0.0120	——

適用地域ハ各地方別＝甲乙丙地＝種別サル

（昭和十四年十月十八日勅令第七百四號統制令）

③經常支出

共同住宅管理上の經濟的な問題としては、主としてこの項目に關する事柄であらうと思われる。經常支出とは大體上表の③項記載のイ～オの經費であるが之を經常費、地代、管理費、消耗費、に大別し各符號を遂つて說明しやう。

イ、償却費　建物には一定の耐用年限があり、年限に應じてその價値は一定の減價率をもつて減少する、耐用年限については種々の說があるが普通木造家屋は20～35年位とされる。償却年限はこの耐用年限內に決めなければならない。最近の建物は建築費の昇騰と資材難によつて構造は粗惡なものが多い、從つてその耐用年限も上記の最低年限に決めていいのではないかと思われる。

償却費の決め方にも色々あるやうであるが、最も簡單な方法としては償却年限を10～15年位ひとし、固定資本を月割計算して算定する、嚴密な理論的な方法としては、固定資本に對する利廻、一定年限後の騰貴率等を含めた次式によつて算定する方法もある。

$$A=\frac{(1+R)c\,19-1}{9^n-1}$$

A＝年賦償却金　　9＝1＋P（利廻）

$\frac{A}{12}$＝月賦償却金　C＝固定資本

R＝一定年限後の騰貴率

n＝耐用年限

ロ、公課　ハ、保險　公課、保險費についてはその地方、地域、構造等によつて、事情も異なるので嚴密な基準は樹て得られないことと思うのであるが大體木造家屋とし、大阪近郊として、固定資本との割合を示すと月當り0.0015位ひに取れば大差ない之は公課と保險費を合したものである。營利的な經營管理の場合は、空室及滯納を見込んで保險の意味は少し異るが、その率を加へて上記の月當割合は0.0023位ひが適當であらう。

ニ、修繕費　普通固定資本に對して月當り0.0025位ひを適當とする。最近の粗惡な建築ではこの割合はもう少し多くなるのではないかと思う

ホ、人件費	月當1人	食事支給	65.00
ヘ、電燈費	〃 1室	6疊程度	.80
ト、瓦斯	〃 〃	〃	.40
チ、水道	〃 〃	〃	.30
リ、燃料	〃 〃	（隔日入浴）	1.00
ヌ、電話	〃 1個	（通話料各自負擔）	20,00
ル、雜費	〃	（町內費、衞生費、消耗品）	

ホ～ル迄の各項については物價昇騰の今日果してこの基準に誤りがないか如何かは疑問であるが實際の場合大體の見當はつく筈である。

これで上表の各項計算の基準といふべき事について說明したのであるが、尙上表は共同住宅の場合のみに限らず一般貸家の勞務者住宅經營管理の場合にも適用し得るものである。その場合には②項の室數は戶數とし、室代は家賃になる。別表の適正乘率も普通建物の欄の數値によつて算定する③項に於いては管理費、消耗費は計上せずに遂次計上記入して行けばいいのである。

（筆者は　伊藤正文建築事務所勤務）

北加賀屋住宅を訪ねて



出　席　者

——住宅居住者　男子——

芝田　迪兵氏　（甲型居住　町會長）
澁谷　周次氏　（甲型居住　副會長）
野口　弘羽氏　（乙型居住　會計幹事）
大山　正德氏　（甲型居住　敎化部長）
奥田　信久氏　（住宅事務所長）

——住宅居住者　女子——

前田夫人　（甲型居住　婦人部長）
大山夫人　（甲型居住　副部長）
橋本夫人　（甲型居住　組　長）
飯田夫人　（丙型居住　組　長）
奥田夫人　（住宅事務所）

——市　役　所——

岡本　精氏　（大阪市市民局厚生課住宅係長）

——編輯幹事會幹事——

星　廣文・小川　正・吉田信武
增井敏克・中野順次郎・錦田直一
小林　清・大下順三郎（司會者）

日　時　昭和18年2月25日（木）午後7時半より
場　所　大阪市西成區　大阪市營北加賀屋住宅事務所

奥田――大變遲くなりまして皆さん濟みません です。實は今晩大變お忙しい中を、建築協會の方々ならびに府市住宅營團の方々がおいで下さいまして、當市營住宅にお住ゐの方々と親しく膝を交へて懇談したい。かういふ目的でお集りを願つたやうな次第であります、それでどうかざつくばらんにての會の目的を達するやうに御遠慮ない意見を述べて頂きたいと思ひます。開會に先立ちまして國民儀禮をさして頂きたいと思ひます、どうか御起立を願ひます（國民儀禮）それでは一つ懇談會の司會を住宅營團の大下さんにお願ひいたしまして、會の進行をはかりたいと思ひます。

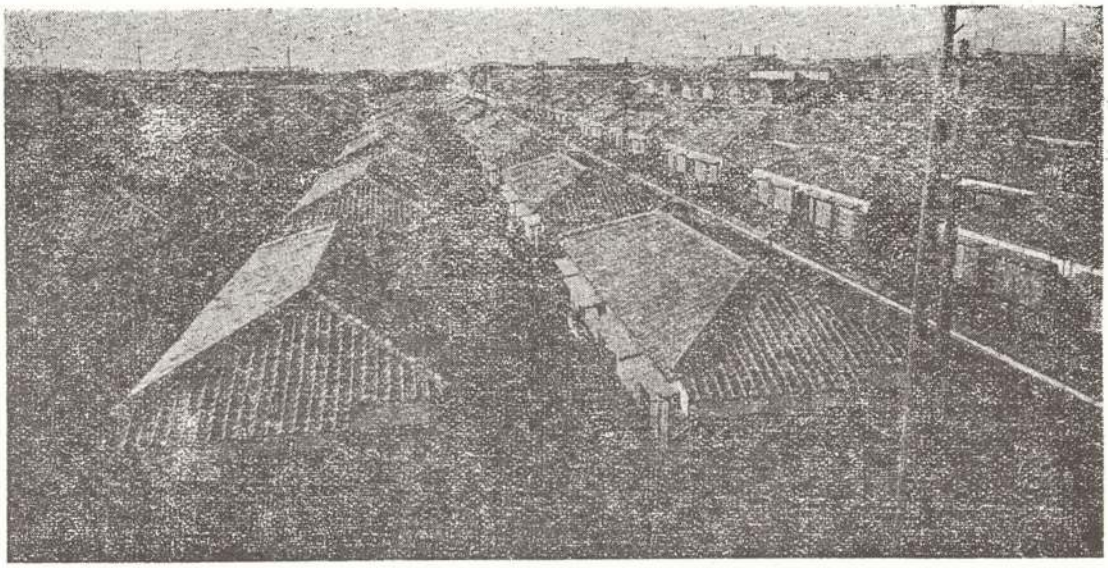
大下――甚だ僭越しかも不得手ではございますが司會をさして頂きます。

御紹介を頂きましたやうにわれわれ日本建築協會といふ建築技術者の團體で會誌の編輯を擔當してをる者たちが、本日この市營住宅を拜見さして頂きまして、時局下最も國家として重要性を持つてをる生產擴充方面に從事されてをられます方々の住宅、この大東亞戰爭を勝抜くためあらゆる方面の原動力となる皆さん方の住宅を將來如何にして改善し、また延いては一般國民住居の問題もどういふ點を改良すべきであるかといふやうなことをわれわれが研究さして頂きましてそして皆さん方實際お住みになつてゐる方の腹藏のないお話を伺ひまして、私たち建築技術者の參考にさして頂きますればまことに幸ひと存じまして、時局柄非常に御忙しい中を、また特にお寒い夕を態々お越しを願ひまして、まことに恐縮、且感謝に堪えないところでありまして、一同を代表いたしまして厚く御禮を申上げます。お伺ひいたしますこともどうもわれわれ技術者といたしまして多少專門的なことをお尋ねすることになるかも知れませんが、目的は大體住居を中心としたことを申上げることになりますので、事柄の節々にあるひは不躾なことや失禮なことを申上げることもあらうかと思ひますが、それらの點につきましては惡しからず御許しを願ひたい、また御諒解を得ておきたいと存じます。

つきましては住居の問題のみでいろいろお話を願ふ譯でありますが、その根本は、皆さん方がこの住宅地に御轉居になりまして、この住居が非常に住みよいとか、あるひはかういふ點があつて欲しいといふことに歸着する譯でありますが、それらの點はどうであらうかといふやうなことをお尋ね申上げ、それについていろいろ御氣付のことをお答へ願へれば結構であると思ひます。

そこで話の順序といたしまして具體的にお尋ね申上げますことは、まづ大阪市營住宅といふものは、從來のいはゆる大阪府近の町に建つてをります長屋建の住宅とは大部趣きが違つてをるのでありまして、譬へて申しますと非常に敷地が廣いのであります。また建物自體にいたしましても、從來の建物は主として間口が狹くて奥行きが深い、從つて日の當らない部屋が幾つも出來るといふやうなことであつたのでありますが、この住宅は周圍も非常に廣く、また間取りも東西に長く正面を大きく取つてありますから、これらの點につきましても從來のものと申しますと多少語弊がありますが、普通ありふれた貸家などと比較しまして、どういふ風な御氣持であるかといふやうなことにつきまして、芦田さん何か御氣付の點がありましたらお話を願ひたいと思ひます。

芦田――私はこちらへ參りましてからちようど一年餘になりますが、最初この住宅に入るやうに御世話を願ひましたのはやはり會社の方からであります。當初御紹介を受けました時には、まあ今まで私どもが考へてをりました一般の住宅に比べまして非常に明いるといふこと、それからちようど寒い時に參りましたものですから、非常に暖かさうだといふこと、かういふ感じがまづ第一にしました、それはちようど私がその前にをりましたところが住之江だつたものですから、非常に風當りが強く寒くてどうにもならないと考へてをつた時であります。從つてさういふ點に非常に興味を持つて見せて頂いた譯であります、と同時に早速借りたいといふやうな氣持になりましてこちらに參つたのでありますが、何よりも明るいといふこと、殊に子供などがをりますと非常に住みよい家だといふ感じを持ちました。それに私もこちらに參ります方が會社も近く便利な譯であります。その他にも色々と事情はありましたが、家賃は比較的一般に比べてさう安くはない、しかしまあ周圍の空地面積が廣いといふことを考へに入れますと



乙　型　一　部　全　影

高くはないといふやうに考へられますし、また第一印象と申しますか、それが非常によかつた譯であります。入つて見ますと色々感ずる點も理想的な立場からはございますけれども、これはまた他の方からお話があると思ひますので、まあ第一印象といへばそんなものであります。

大下——今芦田さんから割合に家賃は安くないと思ふが敷地が廣いといふ點でバランスがとれるから結構だ、かういふお話がありましたが、これは私ども建築技術者、また國家的立場から考へましても非常によいことだと思ひますが、もし同じ家賃であつたら敷地は狹くても疊の一枚でも多く敷ける方の住居を好まれますが、また現在ここに建つてゐるやうなゆつくりした、廣々として周圍の空いた住居の方を好まれるか、一體どちらがよいでせうか、、前田さんどういふ風にお考へですか。

前田——私の思ひますのには、箪笥の置場所がもう少し欲しいのと、それからあの疊がちよつと狹いやうな氣がします。もう少し疊が廣ければこれだけの間取りで……家族6人でございますけれども……ゆつくりして行けると思ひます、さうすれば便所に行くにも便利がよし、また人がお見えになりましてもこれで狹いとは感じませんけれども、あれが昔の疊の廣さであつたら申分はないと思ひます。

小林——失禮ですが、前田さんはどの型のおうちにお住ひですか。

前田——甲型でございます。

大下——今前田さんの仰しやいましたやうにこの家は東京間の建物でありまして、一般に關西にあるものよりは小さいのであります。この間取りで疊8疊6疊4疊半、をとるのでありますが、これを關西流にとりますと、6疊、4疊半、3疊ぐらゐになるのであります。さういふやうになつても關西間の方がよろしいでせうか。

芦田——さういふ譯ではありませんでせうが。

前田——同じ8疊でしたらこれが關西式の8疊だつたらどうかと思ふのです。

大下——話は少し變りますが、この居間に關聯しまして、例へばこゝの甲、乙、丙の居間にはいはゆる緣側といふものがなくて濡緣だけになつてをりますが、あの8疊間に濡緣がなくてもそれだけ内緣があつた方がよいかと思はれますが、あゝいふ濡緣はなくつても疊の1疊でも廣い方がよいと思はれるでせうか、皆さんどうでせう。

野口——それは無論家族の人數にもよりませうが、もつとも入る時には自分の家族の人數と比較して入ることになると思ひますけれども、まあ1疊や1疊半狹くつても、緣側のついてゐた方が非常に感じがよいのぢやないかと考へます。

大下——それでは今のお話に關聯して、濡緣が

大分あるのでございますが、あの濡縁を假になくしまして、あれを肱掛窓のやうなものにして1尺2、3寸上つた窓にしたならばどうでせうか、雨が降る時など軒先が短いと濡縁のしぶきが疊に上るとか夏など夕立が來ますと疊にしぶきがとんでお困りではないかと私ども時々思ふのでありますがその方とやはり濡縁のある現在のまゝとどらがよいでせうか。

芦田——理想をいへば、濡縁があつて内縁がつた方が勿論いゝと思ひます。

野口——やはり内縁があつた方がよいやうに思ひますね。現在ある濡縁より幾分かの内縁があつた方がよいと思ひます。

小林——夕立などが來まして濡縁から疊へ吹き込んでお困りになつたことはありませんか。

芦田——事實あります。障子など下の方からこれくらゐずつと雨で色が變つてをります。

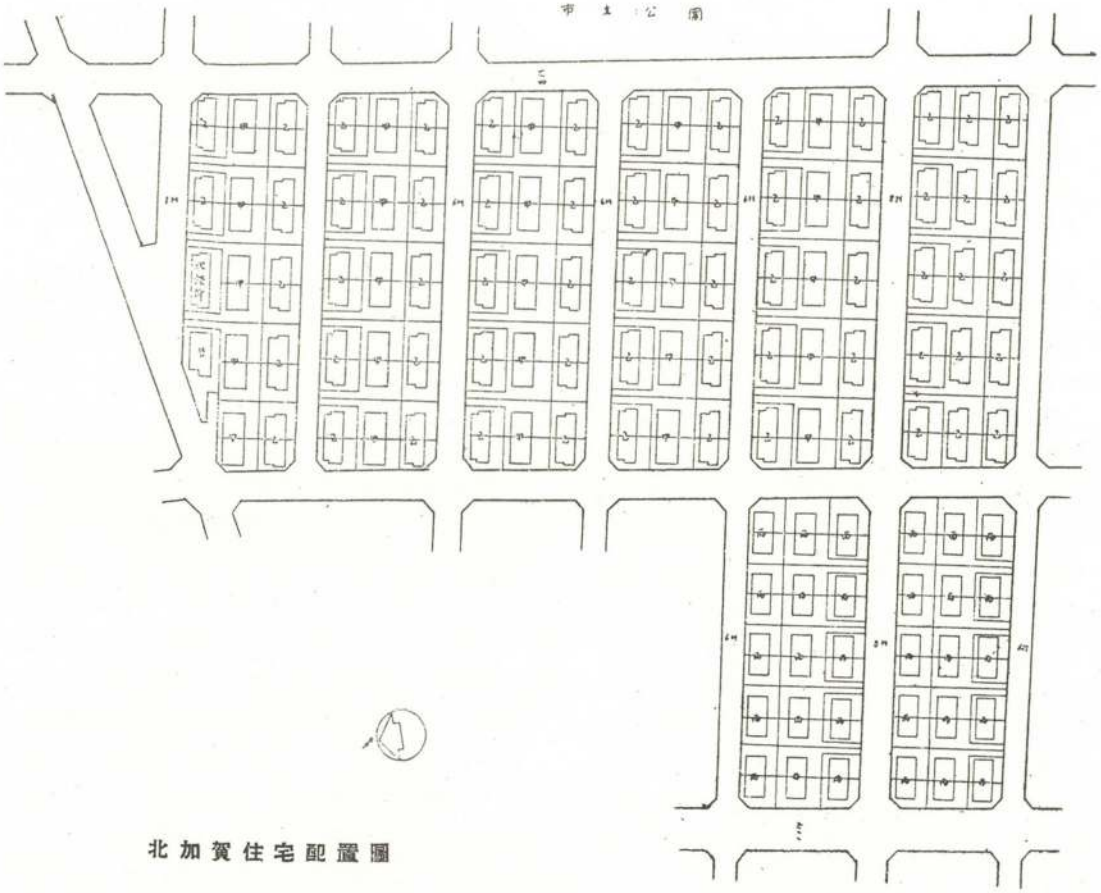
澁谷——うちなども、障子の腰の部分に色がずつとついてをります。

小林——結局あはてゝ閉めるといふことになりますね。

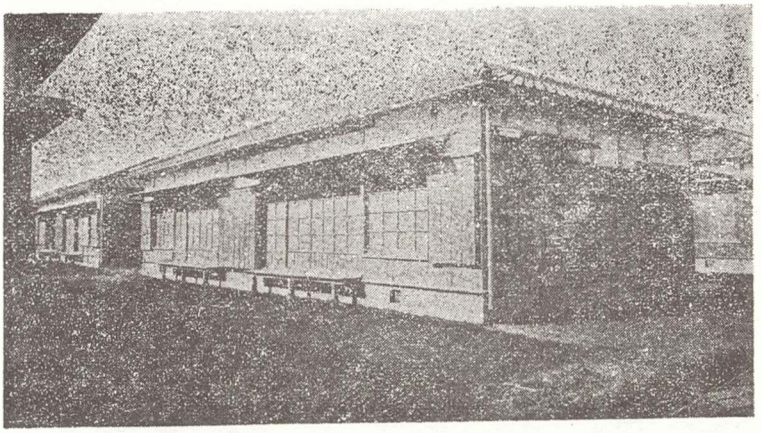
大下——さういふことを考へると結局肘掛窓の方がよいのぢやないかと思ひますが、又縁側を使ひますためには濡縁も必要ですか……

野口——なるほど、裏の縁の腰が高くなると夕立や何かの場合には都合がよいかも知れません。私の申しますのは、裏に大阪の濡縁と申しますか出てをりますが、あれを廊下式にするといふのです。内縁ですね、そして硝子障子をたてゝ頂くのです。

小川——今仰言る縁側といふのは、濡縁の長さだけ外の方に建具を入れるといふお話だらうと思ひますが、かう豫算が切詰められてをる場合にはさういふことは出來ないと思ひます。さういふ意味で表の8疊の間の奥の1疊だけが板の間になる、疊を敷けば平ですよ、こちらが縁側、こゝが



北加賀住宅配置圖



甲型竣工直前側面

板の間といふやうになつてをるものが出來たとしたらどうでせうか、さうしますと今の刎ね水があつても疊が痛まない、板の間ですからお子さんなどが勉强をなさるのに机などをおいて、南の板の方に寄せてやるといふことなども考へられますね。

芦田——現在よりはよいでせうね。

小川——たゞ部屋の中に疊のところと板の間と2つある譯です、さういふことが考へられます。

前田——8疊の間がお座敷ですからね、それに板の間がついたとしたらどんなものでせうか。

小川——これからの建物は、これがお座敷だといふので構へておく餘裕はなくなると思ひます。

芦田——實用向きですね、またそれだけ部屋が廣く見える譯ですね。

小川——さういふ譯ですね。

中野——それから濡縁と窓の問題ですが、子供を育てるには窓の方がいゝのではないですか。

大下——さうすると子供の子守といふ意味からいへば、窓の方が危險が少ないと思はれますね。

橋本——私のところにはをりませんが、赤ちやんがおいでになるところではさういふことになると思ひますね。

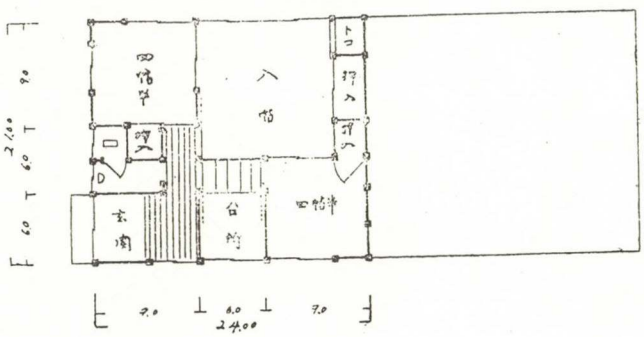
芦田——私のところでは便所が近いので、必ず行かせてをります、まあさういふ習慣は衞生的にも宜しくないものですからさういふ風にやらせてをりますけれども。

大下——それから同じ建物の面積でも、部屋の數は少くても大きい部屋がよいでせうか、また小さくても部屋の數ある方がよいでせうか、どうでございませう、例へば6疊、4疊半、3疊の部屋を8疊、4疊半にしてしまつた方が、よいかやはり6疊、4疊半、3疊の方がよいか、大きくて2間ある方がよいか、小さくても3間ある方がよいか、どうでせうか。

芦田——私の家族は6人ですが建坪が現在通りだといたしますと、あのくらゐの間取りが理想的ではないかと思ひます。欲をいへばもう1間欲しいくらゐです。それは箪笥とか物を置きますために實際の使用面積といふものが狹くなる、それでさういふものを置く部屋が一部屋あつたら十分使へると思ひます。

大下——私ども建築技術から申しますと、8疊も6疊も實際の使用極限を申しますと同じやうなもので、8疊の方は多少ゆつくりするといふだけでありますが、皆さん實際お住ひになつて6疊の方より8疊の方が特に住心地がよい、かういふことをお感じになりますか。

芦田——それは物を置かない時にはその割には



甲型

違はないものですが、何所かに物を置かなければならないといふので置きますと、實際の使用面積といふものが休んだり何かするために、あるリミツトがありますので8疊ですと相當寢られますけれども6疊に物を置いて寢るといふことになると非常に不自由を感ずるのです。

大下——それから押入の數が物置の關係で多少物足らぬやうに私ども感ずるのでありますが押入は大體今のまゝで御滿足でせうか、また物置がなくても不自由ではございませんか。



乙型正面及側面

榎本——押入はあれで十分だと思ひますけれども小さいものでも物置を作つて頂けたら結構だと思ひます。

芦田——さうですね、物置がないので盥を置きますのにも、炭も片附けますのにも困つてをります。

增井——欲しいと仰しやる物置といふものはどのくらゐのものですか。

榎本——1間を半分くらゐにしたやうなものが欲しうございますね、炭の一俵も入れられるやうなものがありますとね。

錦田——庭先でもよいのですね。

大山——えゝ、ちよいとしたものがあればよいと思ひます。

榎本——私たちにとつては何より必要なものと思ひますので。

奥田——この住宅では無斷で增築するといふやうなことは嚴禁してあるのであります、それで物置がないためにみんなお困りになりまして、裏の通路のところに物を置いておいでになります。

增井——物置といふものが足りませんね。

奥田——物置がありますと炭を入れておくとかいふことになりますけれども 。

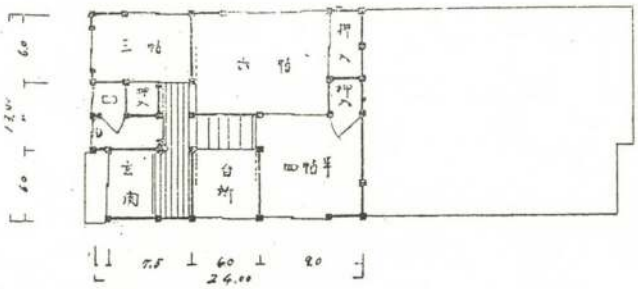
前田——ちよつと廣いところでござりますから物置か何か作りたいと思ふのですけれども、奥田さんが絶對にいかぬと仰しやるのでね、

大下——それに窓、その他が割合澤山ありますので、箪笥などをおいたりするところが少ない譯ですね

澁谷——最初入りました時には一體どこに何を置かうかと思ひました。

大下——かういふところの襖を1間にして、そこを物を置くところにしたらどうかと思ひますがやはり現在のやうに襖が2枚入つて、箪笥などをつき出しておいても差支へないと思はれますか。

芦田——現在は差支へないのではないですか私どものところでは襖を中心にして、8疊と4疊半



乙型

の襖ですが、あそこに兩方から物を置いてゐます實際からいひますと夏などは通風の關係であそこに物を置くのはいけませんけれども、ほかへ置きますと邪魔になります、勿論片面からおきましても何ら差支へないと思ひます。

小林——半間だけお使ひになる譯ですか。

芦田——さういふ譯です。

錦田——襖を入れるのは非常に融通性がある譯ですよ。

芦田——襖ですと融通性がきゝますが、壁ですとそれがきかない。

大下——それから床の間は半間で相當奥深になつてをりますが、あゝいふところについて深過ぎるとか、また佛間などにお困りの方はないでせうか。

芦田——佛間は困りますが、特に取る譯にもいかませんのでね。

大下——いはゆる佛さんを置くところですね。

小林——大抵どういふところにお置きですか。

芦田——普通は奥の間に置いてありますが、私のところではどうもあれだけを置きますと釣合がとれませんので、普通食事をする部屋に置いてあるのです。

小林——それは臺か何かの上ですか。

芦田——私のところでは適當な机を置いてその上においてゐるのです。

增井——芦田さんのお宅には床がついてをりますけれども、床はやはりあつた方がよいですか。

芦田——さうですね、あれくらゐの床ならどうかと思ひますが、ないといふものは寂しいものですからね、やはりあつた方がよいと思ひます。特に信仰を持つてをりますとね、私は佛教の方をやつてをりますが母が金光さんを信仰してをりますのでそこへお祭りしてをります。何もないといふことはちよつと寂しいのぢやないでせうか。

前田——さうですわね、やはり床は欲しいと思ひます。

小林——乙型には床の間はついてをりませんが釣床があります。あの釣床の下を床の間とせずに簞笥とか色々なものを置くところにしておいでになりますが、さういふところを見ますと折角釣床を作つても大して必要ではないのですか。

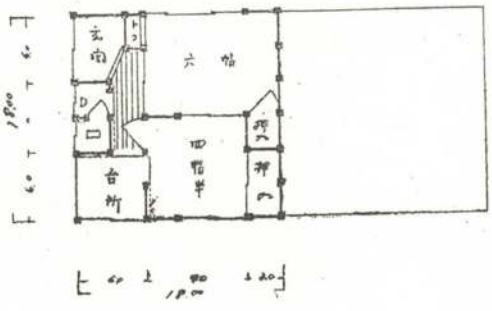
野口——私どものところでは釣床の下を物置にしてゐますが折角釣床でも作つて頂いてをるのでありますから、床の一つも置きたいと思ひますが甲の方には床が出來てをりますけれども、乙の方には出來てをりません、せめて型なりの床でも欲しいと思ひながら有利に使つてをります。まああれくらゐのものは欲しいですね

芦田——座敷には是非欲しいですね、中心が欲しいものですから。

野口——さうですね。

大下——甲型と乙型の一番重要な部屋とお隣りとの間は押入れになつてをりますけれども、丙型では一番重要な部屋がお隣と壁一重ですね、甲乙の方も奥の4疊半と4疊半はお隣りと壁一重になつてをりますが、これについて特にお困りになるとか何とかいふことはありませんか、例へば臺所と置換へ乙部屋の獨立性を持たせるとか、さういふことはお考へにならないでせうか。

野口——やはり壁一重といふことはちよつと何か話をしようと思ひましても困ることがあります。事實隣の人が普通の聲で話をしてゐるのがよく聽えます、これはどつちも同じでありまして家庭の秘密がございますので餘り大きい聲を出すとどうもこれがちよつとまづいやうに思ひます、現在建物の建て方が背中合せになつてをりますが、これをもう少し研究して頂けたらどうかと思ひま



丙型

す、現在6疊の座敷が壁一重です、押入のあるところはさうでもないですけれども、この壁一重のところが、いま仰しやつたやうに炊事場と背中合せになつたらと思ひます。

大下――實は背中合せに行きにくいところもありますし、已むを得ず壁を二重に作つたのでありますが、どうも壁一重といふことはわれわれ氣にかゝります、町家長屋にさういふものがよくあるのです。

小林――今の臺所のお使ひ具合はどうですか、これは御婦人方の御意見を伺ひたいのでありますけれども、甲型なり乙型なり拜見いたしますと半間の一間の揚げ板になつてをりますね、

前田――贅澤をいはなければあれでいけますです。

芦田――あそこに特に水屋か何か置く場所といふものがないのです、それで部屋の中に持つて來なければならないといふ不自然な點があるのです。

前田――それから玄關の奥行きはあんなに要らぬと思ひますね。

星――お子さんの机といふものが見當らなかつたのでありますけれども、お子さんの勉强は座つておやりですか、それとも腰かけておやりですか

奥田――こゝには勉强する子供さんが少ないのです。それはこゝに見えてをる野口さんが一番年寄り見たいなもので、私どもが二番目です。

星――お子さんの机が見當らないものですからね、それがあるとさつきの廊下の問題が切實に考へられて來ると思ひます。

大下――さうすると甲型ではと4疊半が二つありますが、その一つを板の間にしたらどうでせうか。

大山――やはり部屋は3間ないと困ると思ひます。私どもいたつてお客さんがある方でありまして、それに子供が仲間入り出來ませんし、臺所にすつ込んでもをれない、結局現在の間取りの方がよいと思ひます。

芦田――私はもう1間ほかに板の間があつてもよいと思ひますね。

大下――それは家が大きくなる前提になりますが、さうなるとやはり床の間が一つ欲しいといふことになりますね。

小川――玄關にゆとりがありますから、あすこを片附けたら有効に使へると思ひますね。

星――玄關だと子供が落着かないでせう。

小川――どこでも疊が一番いたんでをるやうでありますが、最近特に疊の質が低下して參りまして、一年も使はないうちにぼろぼろになります。それでわれわれ設計いたします時に疊がどうも面白くない、何とかこれをもつと丈夫なものでやりたいといふのでその代用品を考へた、それが板の間ですが、昔は板の間へ藁を敷いて御飯を食べてをりました、あゝいふやうなものに返つて行くのぢやないか、そういふ意味で板の間はどうかと思ふのであります、

前田――4疊半の板の間も結構だと思ひます、子供がをりますとどうも疊をいたませますのでね。

奥田――私は炊事場を一枚の通しにしまして、どういつたよいでせうか、4疊なり4疊半のところに、拵へたものをすぐ飯臺におけるといふやうにして頂いたら非常に便利だと思ひます、何時でも上つては一つ一つしなければならないのでございまして、炊事場を一つの壁にしますとそこにガスとかいつていろいろなものが置けると思ふのですが。

中野――4疊半といふものを仕切りの壁も何も全然ないやうにしたらどうかといふのですね。

奥田――その方が便利だと思ひますね、例へば物の上げ下しにしても、お茶碗一つ洗ふにもうんと能率が上つてよいと思ひます、炊事場から一遍上つてかういふ風に行かなければなりませんものですから。

芦田――それは4疊半の使用方法によつても違ひますね。

奥田――家族數によつてはやはり仕切りが欲しいのです、4疊半を寢室にすればどうしてもこれが必要といふことになります。

芦田――勞務者としてやはり、さういふことも考へて欲しいと思ひます。

小林――臺所で拵へて直ぐ茶の間に運べるといふのもその一つですが、これを全部板の間にして土間をなくしたらどうでせう、土間ですと上り下りする時に履物をはいたり又脫がなければなりま

せんが、こゝを板張りにしたらどうでせう。

大下――簀子板を置いてゞすね。

大山――水道とガス臺を玄關の方につけて横側にやつてあまつたらよいではないですかね、今のガスのところが反對の方に行きますね、さうすると物を上げられると思ひます。

奥田――つまり西にあるのを東側に持つて來る譯ですね。

大下――さうですね、その方が便利ですね。

大山――さうして壁を抜いてもらつたらよいでせう。

中野――それから間取りの關係でどの家も、便所へ行くのにどの部屋からでも直接行けて非常に便利だと思ひますが、たゞ夏など家の中に便所が含まれてゐるためによく臭ひがあつて困るといふやうなことがありますがどうでせうか。

奥田――それは便所の窓を開けて置きますと別に關係はないと思ひます。

小林――西側の方のお宅の方はどんなものでせうか。

飯田――丙型に住んでをりますと夏など臭ひのすることがありますが、冬はさほどでもございません、お便所をもうちよつと裏の方にやつて頂いたらよかつたと思ひますけれども。

大下――今までの建物は緣側の外に便所が飛びだしてをつたのですが、こゝは建物を眞四角にするため、中へ入つてをります。

奥田――お客さんなどの時には大變都合がいゝと思ひますが、いけないといふのは臭ふ時だけであとは大變便利だと思ひます。

增井――押入といふものがどなたも一間と半間がついてをりますが、それを二つに分けないで一つにしたのと、現在のまゝとどちらがよいでせうか。

野口――現在の間取りからいへば、今のやうな押入がよいと思ひますね。

增井――例へば1間半の押入を一つにすると甲型でしたら8疊だけに押入が出來るといふ譯ですさういふ風にすると今の8疊から4疊半全部が使へるといふのと、現在のまゝの二通りが出來る譯ですが。

野口――今のまゝの方がよいと思ひます。

增井――入れ物の經濟からいへば1間半のついた方が餘計入ると思ふのですけれども。

奥田――入れるもの種類が變つて參りますからね。

增井――眞中には大體布團類ですね

野口――主として布團類を入れてをります。

小林――どうもお臺所の附近にこだはりますがお洗濯はどこでなさつていらつしやいますか。

飯田――お炊事場ですけれども、冬は中ですが夏は自然外になります。

小林――一般に北側にお住ひの方ですね、あれは敷地が溝のところまで一ぱいだと思ひますが、すると道路に出ておやりになる譯ですか。

野口――あれがですよ、奥田さんにも私再三お願ひしてゐるのでして、どうも道路面に炊事場がついてをるといふことは冬場はまあ寒いから家の中へ入つてやつてをりますけれども、夏場は外に出ますからちよつと外觀からも不態裁ではないか、同時に人さまが見ても不快たらしく見えますので、あの外側の方に實費で塀を拵へるから拵へさして下さいといふことをお願ひしたこともあるのでありますが、あれをもう少し研究して頂いて外から汚れ物を洗つてをるところが餘り見えないやうにした方がよいのではないか、また私どももそれを希望してをるのです。

大下――丙型のお方でしたら臺所はちようど1坪ですが、ほかの甲、乙は1坪半であります。これは1坪でも十分やつて行けるのではないかと思ひますが、どんなものでせうか、ちようど1疊の間だけが板張りになつてをりますが、あれだけの大きさがなければ困るものでせうか。

吉田――丙の方はさうなつてをりますね。

飯田――私のところは十分だと思ひます。

大下――さうすると丙型に住んでをられる方は是非これだけは必要と思ひますが、甲、乙の1疊だけは何かほかへ利用した方がよいのではないかと思ひますね。

榎本――やはり1坪半あつた方がよいと思ひますね。

大山――今の板の間のところが揚げ板になつてをりまして、炭とかいろいろなものを入れさしてもらつてをりますので、非常に便利だと思つてを

ります。

芦田——私ども板の間のところにガスが置いてありまして、その反對の方に臺を置いて水屋をおいてゐるのですが。

小川——この臺所の揚げ板のところですね、あすこに水屋をおいて頂く、これは揚げ板が3尺分切れてをるからいけないのでして、揚げ板は2尺でも十分だと思ひます。上の方が3尺必ずしも開かなくても、下だけ廣ければ使へると思ひますので、これは揚げ板の切り方がまづいと思ひます。

大下——さうすると十分とれますからね。

小川——初めから3尺の板が切つてあるからいけないので、あれを少し手前で切つてあればよかつたのであります、さうすれば1間にぴちようど水屋が並べられると思ひますが、これは何かの手違ひだらうと思ひます。

芦田——要するに物置がないから有効に揚げ板のところが使はれる。

奥田——物置と一諸なんですね。

芦田——餘り大きなものは入りません、炭でも煉炭でも箱に入れて入れやうとすれば、これが狹ければ入りにくい譯です。

奥田——お玄關のところが戸袋になつてをりますと相當何か入りますけれども、べたつとなつてをりますから惜しいと思ひます。

大山——玄關のあたりに引違ひでもあれば大變結構だと思ひますね。

榎本——さうしますと私どものところは子供が多いのでありまして、大變何かと都合がよいやうに思ひます。

星——今の玄關でも決して廣いといふことはないでせう。

榎本——あのくらゐあつた方が結構だと思ひます。

增井——自轉車をお持ちの方はどうしてゐらつしやいますか。

橋未——私どもも持つてをりますが、玄關においてをります。

星——かういふところは大抵玄關が物置になるのですからね。

大下——自轉車の前輪を上においてをられる譯ですか。

澁谷——さうです、やはり前輪は板敷にかけないと置かれません。

小林——こゝではどのくらゐ自轉車をお使ひになつてをりますか。

奥田——大分よく使つてをられます、半數ぐらゐはありますか

小林——さうすると是非ともかういふことはこれから考慮しなければならぬことですね。

奥田——比較的工場は近いのですけれども自轉車で行けば15分のところも5分で行ける譯ですからね。

小林——ほかの住宅に比べて玄關は廣くとつてあるのですが、やはり自轉車をおくといふことになると窮屈になりますね。

芦田——物置といふのは簡單に出來るのではないでせうか、物を玄關においては邪魔になりますし、外におけば雨がかゝるといふのでどうにもならないのですが。

奥田——物置の問題ですが、これは規格を統一して、餘り不潔な材料を使はずに體裁よく出來れば市の方でも許可せぬことはない、かういふ例があるやうに聞いてをります。ところがこれを許しますと同じやうな材料を使へばよいが、古板を張つたり色々なものを使つて、結局不良住宅みたやうになるのです、絕對的にいかぬといふのではない、みんな揃つて大きさも大體決めて、材料も大體決めて來るといふことであれば許可せぬといふ方針ではないといふことであります。

岡本——實は今までそれで懲りたのですよ。

奥田——それをうかうか許しますと、石油箱の古いものか何かで變なものを作るのです。

奥田——とたんなどを置かれますと本當に感じが惡くなりますからね。

小川——さういふやうな意味でこの物置といふものを四軒ぐらゐで共用にするといふやうなもしかういふやうな提案がございました場合は、如何でございますか、眞中の空いてをる廣いところに市の方でちやんと共用の物置を作るといふやうなことになりましたら。

奥田——それはやはり各戸別にしまして、入れるなども別にしておかなければいけないと思ひますね。

奥田――また二軒ぐらゐの共用はよいかも知れませが、四軒といふのはどうですかね。

小川――あるひは隣組全部の大きいものを作つてもよいと思ひますね。

錦田――それは君、無理だよ、冬など炭を使ふだらう、するともう少しあつたはずだがなあといふことになるよ。

奥田――二軒の背中合せは成立しますが、それ以外はどうも成立ちませんですよ。

大下――共同の物置を作るとすると初めから土地を決めて一戸一戸に仕切りをつけておかなければなりませんね。

芦田――一戸一戸に小さくてもよいから自分の物置といふものが欲しいですね。

大下――理想はやはり各戸にといふことになりますね、それから共同置場として自轉車なんかの置場として一つ場所を決めてやられたらどうでせうか。

奥田――それはちよつと無理ですね、空地がございませんし、それにどうしても物置といふのは背中合せにして一つの物置を裏と表から共用で使ふ、西側は西を、東側は東を使ふといふやうにしなければいけないと思ひます。

大下――次に共用施設のことで少しお尋ねいたしたいのですが、最近かういふやうな集團的なところでは共同炊事をやつたらどうか、例へば御飯とか簡單はお菜物を共用に作る、かういふことについてこちらの御婦人の方々はどうでございませうか、今まで各戸で銘々お作りになつてゐたものをさういふやうな設備を整へて共同でおやりになるといふやうなことは……

榎本――私どもちようどやつて見たいと思つてをるところでございますが、如何なものでせう。

奥田――共同炊事場を作つて一諸にやつてはといふのですね。

前田――一月くらゐやつて見たいといふお話もあるのでございますけれども。

奥田――これについては芦田町會長さんに大いに御意見があるといふことであります。

芦田――それは御婦人の方が今までの觀念から申しますと、今までは自由に色々な品物が買つて來られたのでありまして、たまには自慢の料理を家族に食べさしてあげよう、たまどころか毎日でもこの腕を振つて御主人を慰めてやりたい。かういふ御氣持もおありでせうけれども、これからさきは配給ですから品物も一定して來ますし、調味も殆ど同じになつて來るのであります、さうすると結局專門家といひますか、さういふ配給所といふやうなものを作り、そこで最も適當した菜物を作り配給する、かういふことにすればよいのではないかと思ひます。それにさらに多少御婦人方の方でお魚でも何でも配給を受けられまして、何か一品つけて出すといふやうなことも出來る譯ですから、主として榮養食配給所、かういふものが必要になつて來るのではないかと思つてをります。すでに普通の社宅でさういふことをやつてをられるところもありまするし、かういふ時代になつて來ますといふと、なるべく家庭の手數を省いて行く、そして暇の出來た方はその間暇を利用して重工業方面に出て行くといふことも考へられますしとに角子供が多いと、炊事にも手がかゝる、それが少しでも省けるといふことになればそれも結構だと思ふのです、これは時局柄特に必要ではないかと思ひまして、私ども色々考へてをる次第であります。

大下――具體的な方法についてその設備などはどういふやうにしてやられたらよいでせうか。

芦田――これは一つの例ですが、最近この附近でさういふやうな榮養食の配給所を、自分が投資してやるから作らしてくれといふ向きがあつたのです、それは勿論こちらでも希望してゐることですし、また投資しようといふ人もこの附近のさういふ傾向を狙つて大いにやらして欲しいといふやうな希望もありまして、ちようど話が合ふものですから、これが大分進んでをつたのであります。府廳の方でもさういふことは許可して頂けるのではないかといふので話が進んでをつたのでありますが、今それがちよつと中止狀態になつてをるのでありますけれども、一般の家庭の方にはどういふ考へを持つてをられるか、私ども一人一人について伺ふ譯には參りませんので、まだ具體的には進んでをりませんが、時局柄私どもはさういふやうな考へを持つてをります。それに私の出てゐる會社が近くにありまして、最近青年學校も竣工し

ますし、さういふところの一部を利用さして頂いて、さういふことが出來ればとも考へてをる次第であります。

中野——さういふ場合を考へて敷地の利用法として菜園を作つてをられますが、どこでも菜とか大根とかほとんど同じやうなものを作つてをられます、あれは皆さん一緒に種でもお買ひになつてかういふものを作る、あるひはあゝいふものを作るといふことで研究なさつてをるのでありますか。

芦田——こゝでは纏つた場所といふものがないものですから、各家庭で空地を利用してやつてをる譯であります。附近に相當大きな場所でもあればさういふこともやつたらよからうと思ひますしまたみなも希望してをるだらうと思ひますけれども、本當にさういふ野菜をうんと作るといふやうなことは、大體土地でもよければやりよいと思ひますが、こゝは御承知の通り埋立地でありまして、多少よいところもありますが、大部分は野菜が大きくならないのです。

奥田——こゝは冬は全く駄目です、風が強い所以でせうね。

芦田——特に土を運んでをられるところもあります。

中野——大體子供の遊び場として庭は利用してをられるのですが、こゝは殆ど菜園にしてをられるやうであります。菜園にしないで砂など盛つて子供の遊び場としてをられるところがありますか。

奥田——さういふところは2.3戸で、大部分は菜園を作つてをります。

芦田——こゝは住宅地ですから道路が廣いし、それに公園もありますし、子供の遊び場は十分であります。私どもも殆ど夜は公園に遊びに行つてをるのです。

大下——南側の方に入口のあるのと北側の方にあるのと、どちらが住みよいでせうか。

野口——さうですね、反對側から入ります場合には悪いとは思ひませんけれども、便所がありますので便所を越して入るといふのが感じが悪いと思ひます、便所がなければ却つて南側の方がよいやうに思ひます。それはどういふ譯だと申しますと炊事場が道路に面してをる關係からでありまして、現在あの炊事場が道路面に面してをらなければ、却つて北側の方が私としてはよいと思ふのです。

奥田——私もお使ひに行きまするのにやはり北側から入つて行く方がよいやうに思ひます、南の方から入つて行くのはちよつと困る時などがありまして、やゝこしいのですが。

芦田——何だか裏から入つたやうな、玄關を押さなければならないやうな氣がしますね。

大下——かういふ風に同じやうなお室が並んでをりますと、よく間違へられるのではないかと考へますが、實際はどんなものでせうか。

奥田——よくありましてね。

奥田——最初は大分滑稽なことがあつたのです ある家の御主人がふらふら他所のうちに入つて來まして、あなたはおうちを間違へたのでせうといふので、びつくりした（笑聲）炊事場まで入つて漸く氣がついたといふのです。

野口——さういふことは澤山あります、私も間違へましたよ。

芦田——入口まで行くのは多いですね。

奥田——池浦さんでしたか、他所の玄關をお上りになつた、聞き慣れない聲がするのではてお客さんが來てゐるんだなあと思つてとつとゝ入つて行つたら、あなたはうちを間違へたのでせう（笑聲）それからもう一つは夜の11時ごろになつて、私のところに何號の家はどこですかと聽きに來られた、何號の家はこゝですよと敎へると、實はそれが僕のうちだけれどもどんなに探しても分らない、それで事務所に來て家の番號を聞いて見たといふのです（笑聲）自分の家ですよ、ですから住宅の人は自分の奥さんを間違へるといつてとても冷かしたものです。

奥田——こんなに分りにくいところはないといつて、炭屋さんやお米屋さんに隨分怒られましたそれでそんなに怒らなくても段々分るのですからさういはないで配給して下さいねと頼んだものですよ。

奥田——初めにまともな番號をいふても配給所の方が間違へてしまふのです。

奥田——それから郵便屋さんにもよく怒られましたね。こんな配達しにくいところはないとこぼ

すのです。

奥田——ところが慣れて來ますとまた分りが早いのです、幾筋目の東側の5號、西側の4號4.5.6.7と順を追つてゐますから、例へば63號の六筋目の西側のうち60號は東向きの家といふことがちやんと分ります、慣れるまでは相當苦勞しました

芦田——子供などよく間違へて「唯今」あとから閉めるんですよ。

小川——門口に何か變つた植木でも少し植えるとよいですね。

芦田——植木を植えてをるのです、晩遲く歸りますと、植木を見てやれやれと思ひます。

星——何か青い植木があつたやうですね。

芦田——どうも植木がつかないのですよ、私のところのも枯れましてね。

奥田——こゝは大變風が强いのでございまして風のために植木がゆすられますので根がつきにくいのだと思ひます。野菜などでもみんな植えると小さくなつてしまひます。そしてしまひにはなくなつてしまひます。うちで植えましても少ししか取れません。

增井——こゝの土は地下鐵の土を持つて來たのでしたね。

奥田——さうです。

大下——植木の問題で思ひ出しましたけれども植木のところに2尺ほどの目隱板をうつてありますがあの目隱しがなかつたらどうでせう。

小林——南側の方ですね。

澁谷——あれがなかつたら夏は丸見えです。

大下——かういふ家は全部あけるとずつと向ふ端まで見える譯ですね。

奥田——南北に向つてをる分ですね。

芦田——あれは部屋にをりましても夏は明けつ放しですからよく見えます。

中野——どの家も風通しは好いと思ひますが夏と冬とはどつちが住みよいですか。

芦田——私は冬ですね。

大下——夏は必ずしも涼しいとは思ひませんが。

大山——涼しいのは涼しいですけれども何しろ蚊が多いのです。

芦田——これは加賀屋町といふ名前でも變へたらどうかと思ひますね（笑聲）

奥田——ところがある脊髓カリエスの人がこちらに越して來られまして、比較的それがよくなられたといふ例があるのです、つまり肺癆質の方がこちらに來られて大分よくなつたといふ例があります、それは光線がよく入るのと空氣がよいからです。この附近に來た人はみな胃病が癒つてをるのです。

野口——日あたりのよいのと風通しの好いのは確かです。

前田——私の娘もこちらに參りましてから3日と寢たことはありません。

大下——敷地が廣いので家賃は安いといふことになりますね。

中野——物干など非常によく乾くでせうね。

奥田——乾き過ぎて困るくらゐです。

前田——態々物干に干さないでも、座敷の外側に吊しておけばいゝのです、冬なんかも非常によく乾きます。

榎本——それから臺所の土管をもう少し大きくして欲しいと思ひますね。

大下——さうでございますか。

吉田——これだけの大きい住宅の團となりますと共同施設、例へば幼稚園とか風呂場、あるひは娯樂場とか集合場、かういふものがあつた方が都合がよいと思はれるやうなことはありませんか。

芦田——それはいつも思つてをります、率直に申しますと、この住宅をお作りになる時の非常な手落ちではないかと思ひます。共同托兒所とか幼稚園といふやうなものは是非とも作つて頂きたいもので、實はその問題について私ども心配してをるのであります。これだけの勞務者住宅といふものを建てられますと。その教育といふ點などからいたしましても、中々手が屆かないのでありましてさういふ施設がありましたら大いに利用出來るのではないかと思ひます、それで市の方にも御盡力を願つてをりますし、われわれの方としても、どうしてもそれだけは欲しいと努力はしてをりますが、お建てになる時に初めから考へて頂いたら結構だつたと思ひます、勿論浴場、娯樂場などもこれだけありますと作つて頂いた方がよいと思ひます、集合場の方は唯今事務所を使はして頂いて

をりますが、托兒所の問題などはなかつたのですか。

增井——あつたのですけれどもね。

奥田——土地の値段の問題で交渉が進まなかつたのです。

小林　隣組の常會は各隣組でおやりですか、それともやはりこゝでおやりですか。

奥田——隣組は廻番でやつてをります、隣組の常會は8日町會の組長の常會は5日とかう決つてをるのです。

小川——隣組の常會が各々持廻りでありますと今の間取りで間に合ひますか、お子さんが澤山をられるところでは、常會のために子供を他の部屋へ入るとか、あるひはお預けになるとかいふことはありませんか。

芦田——それは家庭によつてはあると思ひますが、そんな贅澤なことはいつてをれないと思ひます。

奥田——殆どありませんね。

小川——すると一番大きい部屋を使つてをられる譯ですね。

奥田——一番大きい隣組で14軒ですから六疊の間でも無理すればいける譯です。

小川——私ども假定して考へることでありますけれども、10組ばかりの隣組でさういふ常會をする部屋、炊事場、それからお風呂、それにいろいろな倉庫類、それに防空資材を入れるところ、さういふ風な一つの纏めた施設といふものを持つて各組持廻りの當番で炊事とかあるひは風呂の炊きつけとかさういふものをやつて、みんなでお使ひになつたらどうかといふ案を考へてをりますけれども、かういふ風にみんな同じ立場にあるといふことはどんなものでせうか。

芦田——却つて中途半端な氣がすると思ひます。

小川——と仰しやいますと。

芦田——設備が小さいといふことは考へなければならぬと思ひます。

大山——こゝに23軒の組長とその他の役員が寄りますとちよつと狹いのです、こゝで集會をやらして頂いてはをりますけれども、何故住宅事務所としてはもつと大きい部屋をお作りにならなかつたかかういふ憾みを持つのであります。ほかに集會場といふものがありますと、そこを貸して頂くのですが、さういふところはないのであります、町會にしましても、婦人の常會にしましてもこゝを使つてをりますが、さうするとちよつと狹いといふ風に思ひます。（10帖）

小林——隣組は幾つありますか。

大山——23組です。

吉田——それよりもつと大きな集會場があれば利用され得ると思ひますね。

大山——さうです、それも托兒所でもありましたならば、そこで全町會の常會でもやるといふことが出來るのです、幸ひに近く私どもの會社の寄宿舍が出來ますので、さういふやうな常會の時にはこれでも貸して頂かうかといふこと考へてをりますが、やはり他所さんのを借りるより自分のところにあつた方がよいと思ひます。

大下——それでは次にかういふやうな住宅にお住ひになつて、從來町家にをられましたものがかういふ集團的なところにお移りになりまして、特に親しみを增したとか、何とかいふことに御氣附の點でもございますか。

吉田——同業者が集まつたために却つてまづいのではないか、さういふ意味ではないですが、餘り親しみ過ぎて困るといふやうなことはないですか。

大下——同じやうな方がずつとお並びになりまして、特に親しみが出てよいといふこともありますが、またその反面もありませうし、從來のやうにずつと遠方に離れておいでになるのと、かういふやうに近いのとどつちがよいものでせうか。

大山——それは考へ方でありますが、私ども實はこちらに御厄介になります前にある會社の青年學校の寄宿舍と社宅を見てをりました、いはばその社宅の一從業員ですが、さうするとしよつちゆう會社の地位の上にをるものがやつぱり上にをる町會長も上だ、どこに行つても頭が上らないといつたやうな、非常にまづい場合もありましたけれども、懷ろの錢勘定まで分つてをるのですからやりよいといふ點もあります、こゝはところが同じ會社の方ばかりでなしにあつてこつちの會社の方がお集りですから、さういふ關係のこともありま

せんし、比較的お互が同じ勤務者であるといふやうな氣持から、常會なんかやつてをりましても、和氣靄々としてやつてをるやうでありまして、私ども非常に感じのよい町會だと思つてをります。

大下——結構ですね。

大山——ところがどうかしますとある組に同じ會社のものが澤山をりますと、色々なことが分りてをりますので遂ひわがまゝが出ますけれども、これは奥田氏の說でありますが隣組に2人ぐらゐづゝばらまいた方がよいといふこともあります。

前田——私どもの意見としてもばらまいた方が結構なやうに存じます。

芦田——やはり多少の遠慮はあつた方がよいと思ひますね。

小川——こゝで見ますと約1,000人ぐらゐの方がお集りのやうでありますがこのくらゐの人數になりますと、何かその中心になる精神的な、例へばどこかのお宮をお分けして頂くとか、國旗の掲揚臺を作るとか8日にはそこに皆が集まつて遙拜をするとかいふやうな設備ですが、私ども常に考へてをりますけれども、こゝではどういふ風になつてをりませうか。

芦田——私どもも必要だとは思つてをりますけれども、まだ1年そこそこですから町内の經濟狀態も考へなければなりません、それでこゝには公園がありますのであれを利用しようと思ひますがあれも規則の上で何だか喧しいやうですし、あすこにも掲揚臺がありますので、あれを世話さしてもらふやうに考へてをりますが、それも難かしいやうでありまして、實は住宅の傍らにちよつと空いたところがありますのであすこを利用したいと考へてをるところです。

小川——道路の廣いところですし、道路にみんながおいでになつてそこをお使ひになつてはどうですか。

吉田——道路の眞中に作ることはいけませんよお集りになることは構ひませんが、いざといふ場合には大いに利用して頂きたいと思ひます。

奥田——心身鍛錬とか、敎化運動は敎化部長が出ておやりになつてをります。尙ほ且、最近は毎月紙芝居の臺本を一部づゝ新しいものを買ひまして、最近第3回目の紙芝居を敎化部長の大山さんが主となつておやりになつてをります。會長も自らやつて下さるのでありますが、また隣組では子供が集まりまして子供向きのものをやつてをります、それから國旗掲揚臺は金も要りますし、建てますのに道路が他所の土地になつてをりますのでこれはあと廻しにしてをります、それでまづ金の要らぬことからさきにやらうといふので、今紙芝居を實行してをる次第です。

大山——婦人部の方といたしましては、護國神社が近ふございますので、毎月8日全會員が揃つて朝お詣りをさして頂く、これが月の定例になつてをります、何にしましても、まだ成立してから1年足らずの今日でありまして、あれもしたい、これもしたいといふことばかり、今年が漸くその實行期に入つたばかりであります。

芦田——しかし何かポールを建てるとか、みんなの集まる目標になるところを作つて頂くといふことを初めから豫想出來たらやつて頂いた方がよいと思ひますね、また何か敷地を作るといふやうなことも豫想して頂きましたら、8日の朝などみんなそこに集まつて遙拜でもしますし、あるひは心身鍛錬運動でもそこを中心にしてやるといふことがきまつてをりますと非常にやりよいと思ひます、なければないでどこでもやりますけれども、やはり國旗掲揚臺でもあつて英靈などの歸つて來ます時にはそこで弔意を表した方がよいと思ひます。普通の場合は各自が國旗を出しますからそれほどにも思ひませんが、英靈などお迎ひに町會代表で行きます時にも、やはり弔旗が立つてをりますとそこが中心となると思ひますね。

吉田——全體の中心となるべき建物、さういふものも欲しいですね。

芦田——この中にさういふ風な集會的な建物が出來てをりますれば、それを利用してもよいと思ひますが。

小川——神社などと何か精神的な繋りを持つといふことも必要ですね、特に此頃國民學校では非常にそれが訓練されてをりまして、私ども驛通りに出ます際など、國民學校の生徒がお辭儀をするのを遂ひ見習つて、やはりそれが習慣になつてしまひましたが、さういふことも是非必要だと思ひますね。

小林——私からも市役所の方に頼みますよ。

奥田——それからちよつと今の問題とは違ひますれども、この町會では來月から主婦が夫の勤先きの工場に勤勞奉仕に行かうぢやないかといふので、先づ最初は○○電機、その次は○○精密といふやうに、各組から2名づゝ出て勤勞奉仕に行かう、そして國家に御奉公し且つ工場で夫が働いてをられるのを見て家庭の參考にもしよう、かういふことで、順次に25の工場を廻つて行かうといふ計畫のもとに今人員を決定してをるところであります。

錦田——また話が變りますけれども、前住地はどういふところにお住ひになつてをつたか知りませんが、こゝは普通町家のものより非常に空地が多いといふことが違つてをります、それでかういふところにお住ひになると、どうしても畑をやつたり、あるひは出入口に木を植えたりすることになるのでありますが、かういふことによつて何となく自分の住居に對する愛着と申しますか、今までとは氣持が違つたといふやうに思はれることはないでせうか、今まではそこに根を下したやうな生活をしてゐなかつた、けれどもこゝに來てから何かかう大地に根を下したやうな生活になつたといふやうな感じはございませんか。

芦田——これはありますね、特に自分の邸の中に菜園を作るとか、植木を植えるとかいふことは氣持の上でそこに根を下したといふことになると思ひます。さういふことの出來ない人は比較的まだ落着けない人だと思ふのであります、やはりこゝはいゝ住宅だ、長くこゝに居りたいといふことになりますと、自然さういふことをやりますね。

大下——それをもう一歩進めましてこの住宅が分讓されるものとすれば讓り受ける、さういふお氣持になりませうか。

大山——それはなりますね。

芦田——私ども會社にをりますから會社と一諸になつてしまひますが、やはりさういふ氣持になりますね。

大下——住宅への愛着心といふものが出て來る譯ですね。

中野——これがどの家も2戸建になつて2軒背中合せになつてをりますが、兩方の塀に出入口をつけて、共同して使ふ、さういふことについてお考へになつたお家はございませんでせうか。

芦田——家同志といふ連絡はどうかと思ひますが、防空上からいつて兩隣りの非常口の問題ですね、さつき申上げた目隱しがあつて柵がずつとあるところですが、あれは女の手では押倒しもどうにもなりませんね、あの目隱しの向ふ側に燒夷彈の落ちたといふ時にはこちらからはどうにもなりません、それで所々に非常口といふものを作つて置きたいのです、それでないと眞中のものはずつと向ふを廻らなければならないことになる、これは全部でなくても所々でよろしい、またそういふはたくともよろしうございますが、警戒警報でもあれば直ぐそこをあけて頂くやうにすると都合がいゝと思ひます。

大下——それでは時間も豫定以上に過ぎてをりますので、今晩はこれで打切りたいと思ひます。大變お忙しいところをありがたうございました。つきましては、皆さん方のお話を承り、私ども稗益するところ實に大きかつたのでありまして、けふこの住宅を見せて頂きまして皆さん方が非常に立派な住宅にお住ひになつてをる、ガスもある、水道もある、空地も廣い、工場の關係からも非常に便利だ、かういふやうによいところばかりを拜見したのでありますが、私どもかういふ産業戰士の方々の住宅に關係してをりますものとして、將來色々なことの制限が大きく加へられまして、中々かういふやうなよい住宅を作り、皆さんに御滿足して頂くといふことは少くなるのであります。非常に粗末な家でも作り兼ねてゐるやうな狀態でありまして、水道のないやうなところも澤山あるのでありますが、水は多少惡くても辛棒するとして、またこの戰爭に勝抜くためには電燈のない住宅まで作らなければならないのではないかと思つてをる次第であります。しかしながら私たちもこの職域を通じて、直接生産擴充に御活動下さつてゐる皆さん方に對しまして、住の憂ひだけはないやうにしたいと思ふのでありますが、その實際の方法には困つてをります。切角皆さんはかういふ立派なお住居にお住みになつてをりますので、時局柄十分御自重下さいまして、國家のために一層の御奮勵をお願ひいたしたいと思ひます。色々ありがたうございました。

家庭の待避所と工場の待避所に就て

岡田達彌

まへがき

大東亞戰爭緒戰に慘敗せる米英は、今年こそその生産力に物を言はして頽勢挽回せんものと必死の努力を重ね、帝國本土空襲を眞劍に企圖してゐる以上必ずや敵機來襲ある事は、屢々當局より警告せられ今更私が申すまでもない事である。從つて我々國民は空襲必須の覺悟を以て之が對策に萬全を期さなければならない。

民防空の主目標が燒夷彈對策である事は言ふまでもないが、唯燒夷彈對策にのみ專念して同時に爆彈も併用される事を忘れてはならない。燒夷彈對策が强調せらるる餘り爆彈に對して無關心過ぎる樣にさへ憂慮せられる。

爆彈の威力は燒夷彈の如く被害の擴大性は少いが局部的な被害、特に着彈瞬時に人畜に與へる殺傷力は一般の人達が考へて居る以上に大きいものである。直擊彈の被害は議論の餘地もないが、一般に爆風の被害は關心を持つて居ても、彈片による危害や工場等に命中した場合附近の工作物、原料、製品等の飛散による危害には割合に無關心ではないかと思ふ。

爆風の壓力は空氣中では距離の2乘に逆比例するので距離に比して急速に壓力を減じ、且地物に當れば反射又は吸收されるから、近距離でない限り人命に對してそれ程の脅威はない。寧ろ恐しいのは彈片である。

彈片の形狀は鋭く尖つた不正形で1瓦以下のものから數10瓦のものもあるが、大體 2～30瓦程度のものである。その初速は2000米毎秒或はそれ以上にも達し、數も中型彈で8500個以上にも達すると稱せられて居る。そしてその飛散する範圍も爆彈の種類、重量等により異るが1000米以上も飛ぶ事がある。人を殺傷する威力のある彈片の1平方米當り1個の密度の距離は大體50瓩彈で35米、100瓩彈で40米、250瓩彈で60米と言はれて居るから、この程度の距離內に居る無防護の人は必ず1發は命中し全員死亡に至らぬまでも負傷は免れない。私共はこの彈片によつて犬死せぬ樣充分な對策を持たなければならない。

待避所とは

爆彈が地上に達して炸裂する際は必ずその彈に應じた徑の漏斗孔を作り、地上に對し或る角度の死角を作る。從つて低い位置程死角に入る率が多くなり一層安全である。茫然直立して居るのと伏臥しただけでも危險率は半減する。まして身の廻りに多少なりとも掩護物があればその危險率は10分の1に或は100分の1にもなるわけである。銃砲彈雨飛する第一線に於てもあらゆる地形、地物を掩體として利用し無益の死傷せぬ樣敎へて居る。我々も銃後の防空戰士として自衞防空の責務遂行の爲には敢然として防空戰に從事することはもとより言ふまでもないが、その任務を果すためには先づ爆風、彈片の危害から一時身を護り犬死を避けなければならない。從つて敵機が見えたり、高射砲の音が聞えたりして爆擊の危險を感知した時や防空監視員から知らせのあつた時は、特に防空配置に在る者以外は速かに手近の適當な場所に一時危險を避けて居て、自分の家や職場に爆彈や燒夷彈が落ちた時こそ直ちにとび出して防護活動を始めなければならない。この一時危害を避けるために豫め適當な掩體で圍つた場所が即ち待避所である。もとより逃げ隱れる場所ではない。無駄な危險を避けて防火、救護、其の他の防空活動の時機を待つ所なのである。待機所と言つた方がよい位である。

待避所の作り方要領

從來待避施設と言ふとすぐ防護室、防空壕でなければならぬ樣に思はれて居るやうである。勿論それ等も待避所ではあるが、差當りさう大げさに考へる必要はない。既に屢々警戒警報も發せられ何時我々の頭上に敵機が現れるかも知れない今日、完全な施設を求めて荏苒日を送つて居る時ではない。既存の施設、家具、家財何でも利用し得るものは利用して、少しでも安全な場所を作ればよいのである。兎も角我々は早急にこの待避所を作り、その出入の動作、監視員との連絡等についても訓練を重ね憂なき態勢を整へおかなければならないのである。

さて待避所を設ける場合に第一に考へなければならないのは位置の問題である。前述の通り待避所は自衞防護活動するための待機場所であるから屋内の監視がきゝ、敏速な出場に便利な所でなければならない。そして又敵機が視界、聽音界に入つてから待避するのであるから、20秒か30秒間で待避出來なければならない。それには遠くては役に立たない。各家庭、各作業場毎に設けるのが原則である。從つて家の外に設けるがよいか中に設けるがよいかと言ふと、一般には家の中がよい。雨水の流れ込む心配もなく、夜間や嚴寒時の使用にも好都合であり、自家に落下する燒夷彈の監視によく、應急防火の出動にも容易である。

では屋内に設けるとして床上がよいか床下がよいかとなるが、床上よりは位置の低い床下が安全である。そして土は立派な掩護物であるから、床下に穴を掘つて疊や床板をはづせばすぐ待避所に使へる樣にするのが、最も安全で簡單な作り方の一つである。安全度は少し低くなるが床上では押入を利用するのが手輕な良い方法である。

何處がよいと言つてもその家の事情で一樣には出來ない。屋外に設ける方がよい場合もあり、床上に設ける方がよい場合もある。それぞれ實狀に即し、情況に應じて考へなければならない。どこに作るにせよいざと言ふ時はすぐ飛び出して防護活動に移れる樣、バケツ、砂、火叩き等の消防器材や用水の置場所をも豫め考慮する必要がある。消火用砂を入れた箱を待避所の掩體に使ふなどは最も適切なやり方である。

尙石造、煉瓦造の建物や塀、石垣等崩壞し易いものや、石油タンク、火藥庫等の危險物の附近は避ける樣注意を要する。已むを得ずその近くに設けなければならぬ時はその危險防止の方法をも併せ考へなければならない。

第二に問題になるのは資材のことである。現今物資難の折柄待避所を作るからとて貴重な資材を澤山使用し、また勞力を多分にかける樣な事は是非避けなければならぬ。床下を掘つても床束の1本や2本は取換えることにならう。床束1本か2本でも大都市の全戸が必要とすれば何萬石と言ふ莫大の木材が入用となる。幸ひ手持資材があれば是を使用してより完全なものを作る事は結構である。今後資材が入手出來たら順次より防護力のある施設に變更する心掛けは持ちたいと思ふが、差當つては木材、セメント、煉瓦は勿論のこと砂箱、土嚢でも出來るだけ購入使用せず、先づ既設の儘で利用出來るもの、例へば鐵筋コンクリート造、土藏造のやうな堅固な周壁のある室や地下室、地窖等に目をつけることである。工場や商店ではコンクリートや煉瓦の腰積とかピツト、地下道も利用出來る。唯是等土藏、倉庫、地下室、地下道等は安全性は第一であるが、屋内の監視と防護活動に迅速に出動する上に缺點があるから、一家全員、從業員全部がその樣な場所ばかりに待避せず、職場の責任者2人3人は監視のきく所に適宜待避して居て、必要に應じ他の安全な場所に待避して居る者へ適切な防護活動命令をなさなければならない。

又既設のものをその儘利用出來る場所がなくとも、家具、家材、商品等の配置換をする事によつて新しい資材を全々要せずに立派な待避所を作ることも出來る。この方法が最も應用範圍が廣く且なかなか適切な施設が出來る。この場合最も注意しなければならないのは、待避所を作つた爲に日常の生活能率に支障を來たさぬ樣考慮することである。

空襲は何時あるかわからないし、又警戒警報後何時間經つた時爆撃すると約束されてゐるものでもない。否突然警報の發令をもみずに敵機が侵入して來るかも知れない。從つて待避所は常に設備されてなければならない。20分か30分で出來るから計畫さへ完全にしておれば警戒警報が出たらすぐ

出來るなどと、自分の生命を護るのに呑氣であつてはいけない。敵機が現れてから慌てても間に合はないことも起るであらう。ぜひ常設しておくのを原則とすべきである。そこで日常の生活に、仕事に對して影響が絶無とはいくまいが、最小限度とするのに思案のいるところである。待避所が出來たが寢る所がなくなつたり、事務員の席がなくなつたりでは困る。又商品等を利用する時は常にストツクされる最少量で作ることがある。折角の妙案もあてにして居た商品に買手がついて、肝心の空爆時に生命までつけて賣つた結果となつてはたまらない。

次に構造の問題である。現狀下で而も應急施設では直擊彈は勿論のこと炸裂點から近距離の所では到底防護しきれないから、少し離れて爆壓も相當減じたところで彈片を抑へる樣に對策を考へるのがよい。市內の一般家屋を考へてみても爆彈の命中した家屋は諦める外なく、その隣家も規模によつて差はあるが倒壞するか大破するものと思はれる。それ以上離れた家屋なら先づ倒れないと思つてよいだらう。從つて待避所は自家に爆彈が命中した時を考慮に入れる必要なく、隣家若しくはそれ以上離れた場所へ投下された時、即ち炸裂點から10米內外のところの想定で設置すればよいわけである。その位の距離で彈片防止に役立つ周圍の掩體の構造は大略次表の程度である。

	壁體構造	壁厚
イ	土砂ヲ盛リ上ゲタルモノ	80cm以上
ロ	土嚢、砂箱等ヲ粗積トセルモノ	70 〃
ハ	樞板間ニ砂ヲ充塡セルモノ	50 〃
ニ	樞板間ニ煉瓦、石等ヲ充塡セルモノ	50 〃
ホ	角材ヲ積ミ上ゲタルモノ	50 〃
ヘ	疊ヲ重ネタルモノ	90 〃
ト	蒲團ヲ積ミ上ゲタルモノ	100 〃
チ	書籍及書類ヲ充塡セルモノ	40 〃

勿論彈片よけの材料は必ずしも是等に限つたわけではない。商店、工場等では商品、製品、原料、機械設備等利用し得るものは少くなく、概して目方の重いものが有効である。又厚さも已むを得ない時はこの表より薄くとも、彈片により距離によりその力にも差があるからそれ相應効果はあるわけである。

待避所に入つても矢張り蹲んで居る方が完全である。從つて掩體の高さは3尺もあればよい。それ以上高いと却て爆風で倒れ怪我のもとになる處がある。周圍の掩體は銃彈の樣な威力で飛來する彈片防止のため、成るべく頑丈にしなければならないが、掩蓋（天井）は是で直擊彈を喰止めるのでなく、硝子やスレートの破片、貫通力のなくなつて落下する彈片、高射砲彈の破片等を防止し得ればよいのだから、厚板又は疊1枚程度の簡易なものでもよい。

又炸裂點と待避所との間にある押入、家具、商品、製品、原料等も防彈片に役立つから、待避所周壁の强弱、入口位置等と適當に睨合せもよい。然しその際それ等のものが待避所と離れ過ぎると爆彈に近くなつて却て爆風のため飛んで來ることに注意を要する。

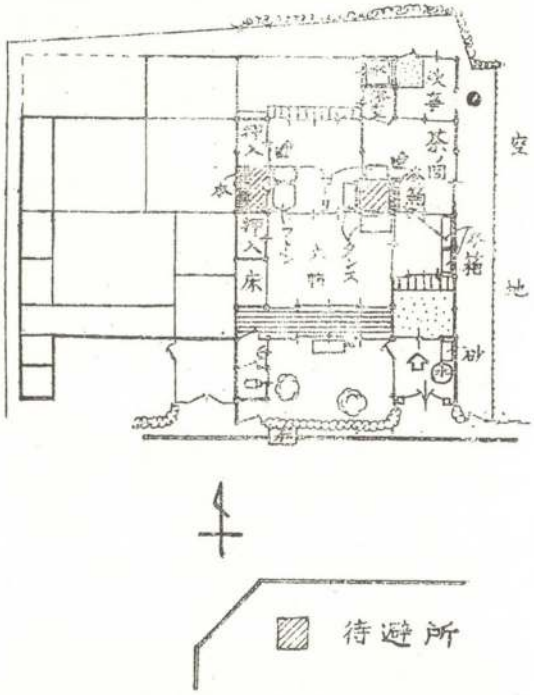
最後の問題は待避所の規模についてである。待避は短時間であるから窮屈でも差支へないが、全家族、全從業員を收容する廣さは必要である。普通疊1枚で4人（伏臥する時は2人）と言はれて居るが、一般家庭では半分は子供であるから6人位入れる。唯全員を收容し得る廣さと言つてもこの程度の構造では、1ケ所に多人數收容すると萬一直擊彈は勿論、極く近接して投下された場合も全員全滅の不幸を生ずるから、1ケ所5人程度の小規模ものを分散して設くることである。工場等で已むを得ず大規模のものとする場合も20人收容程度。即ち3坪位を限度として分散さすべきである。この程度の大きさの場合は入口の外に1ケ所非常口を設け、又入口も直接彈片、爆風の侵入せぬ樣通路を屈曲させるか前面に防護壁を設くる必要がある。

尙屋外に設くる場合には前述の要領以外に、雨水の入らぬ樣出入口を一段高くして周圍に溝をつけたり、內部にも排水溝や溜桝が必要である。掩蓋即ち屋根も屋內の場合と違つて、梁を渡し板をのせその上に土砂（厚50 程度）又は土嚢（厚80 程度）を積み、或はコンクリート（厚6 程度）打とし、且板には勾配をつけ防水紙布の類を敷き

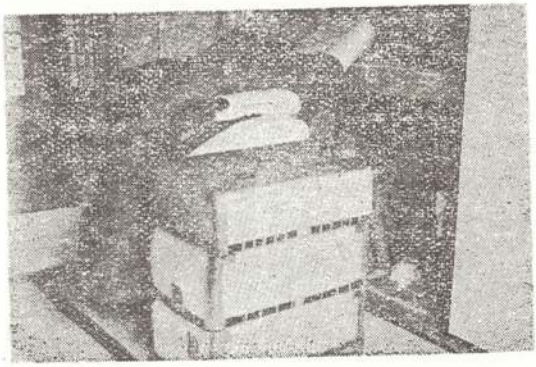
雨の漏るのを防ぐ等の注意を要する。

住宅、商店等の待避所

住宅の待避所に就いて具體的な話を進めるに當つて「先づ隗より始めよ」で筆者の住宅を擧げる事にする。別に優秀な實例と言ふ意味ではない。この原稿を書く豫定で作つたわけでもない。極く平凡な一例に過ぎない。



第1圖　筆者住宅の待避所



第2圖　押入を利用した待避所

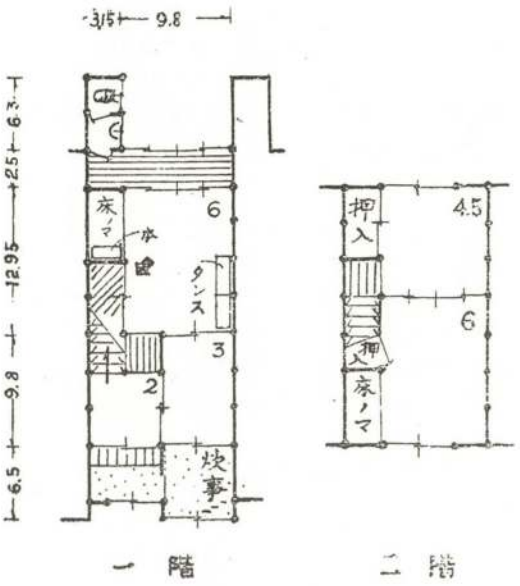
平家建2戸長屋で西側の家も同一間取である。防空建築規則の適用を受けた家であるから外壁はラスモルタル塗、茶の間、炊事場の窓、出入口は網入硝子戸である。こんな小さな家でも2ケ所作る事が出來た。押入を利用した方は下段の奥に書籍を積み並べてその前に蒲團や行李を入れておく。いざといふ時は蒲團と行李を引出してその跡へ待避するのである。入口とした隙間は行李を引寄せればよい。蒲團や行李はその儘東側の掩體となる。少し離れて居るが簞笥もある。南側も北側も約5尺の押入があり、北側の塀は内外ラスモルタルの防火牆塀であるから先づ充分と思ふ。西側は少々手薄だが約18尺離れて隣戸の押入があり、これも相當こちらの防護に役立つ積りで居る。掩蓋は押入上段がその儘利用される。

茶の間の方のは西側は簞笥と少し離れて押入、南側は壁と簞笥で何れも平素の通りで少しも手を加へず、唯玄關の書架を1つ移して東側の掩體とし、北側は行李3つを使用した。行李は平素は待避する場所へ置けば邪魔にもならない。浴室、炊事場の硝子戸は開けば待避所へ硝子の破片の飛散する處が少い。掩蓋として製圖板を用意しておき且各自の座蒲團を被ることにして居る。この程度の場所塞ぎは日常の食事其の他に些して不便を感じない。更に床下を掘る方法もあるわけである。こんな小さな家でも案外大して邪魔にならずに作る所が2ケ所も3ケ所もある一例として見ていただき度い。

一般に室に餘裕のない小住宅や第3圖の様な大阪型貸住宅（大阪の貸住宅の大部分はこの型4戸長屋と言つてもよい）では室内に特に待避所を作つたら日常生活に困る。是には押入を利用して蒲團と入替るのが最も簡易な適切な方法だと思ふ。この場合關西の押入の奥行3尺1寸5分も少し深いだけの事ながら助かる。

大體長屋は前面と背面の防護さへ氣をつけたら側面の隣戸の押入が掩體として相當防禦力があると考へてよい。

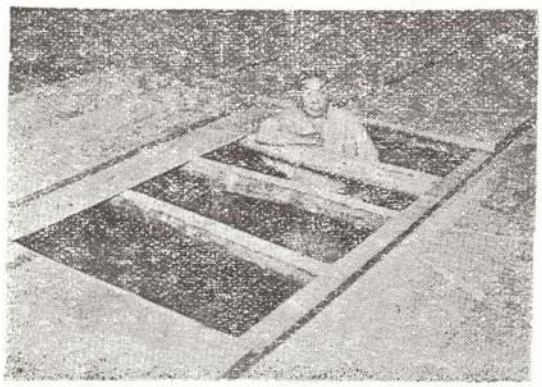
日常の生活の邪魔にならぬ點では地下水さへ深いなら床下を掘るのも安全性の多い方法である。穴は深さ2尺掘つて掘つた土を穴の周りに盛り上げれば立派な待避所である。掩蓋は疊や床板をその儘利用する。唯この場合建物にくるひが起るといけないから次の注意を要する。



第3圖　大阪型貸住宅とその待避所

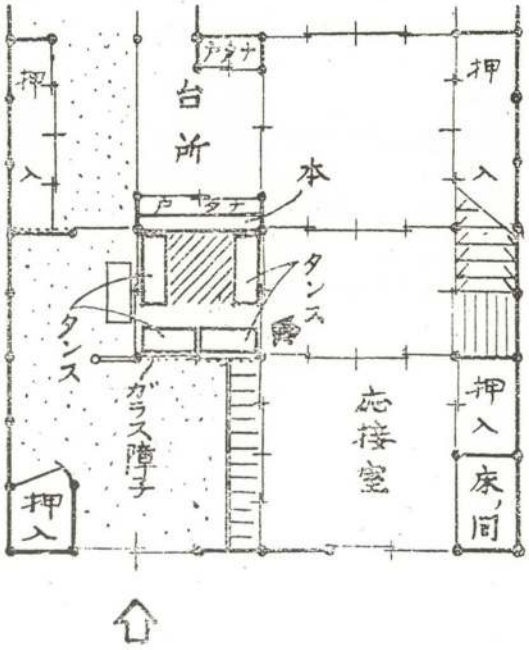
基礎から1尺位離して堀ること
深さは2尺位に止めること（盛土共3尺位）
出來るだけ勾配をつけること。

これなら素堀の儘でもよい。人によつては安全性の最も多い穴に入るのは、心理的に防空活動に飛び出す氣力を鈍らせるから賛成出來ぬと言ふがそれは完全な地下室を待避所とする場合で、この程度だつたらその心配はない積りである。

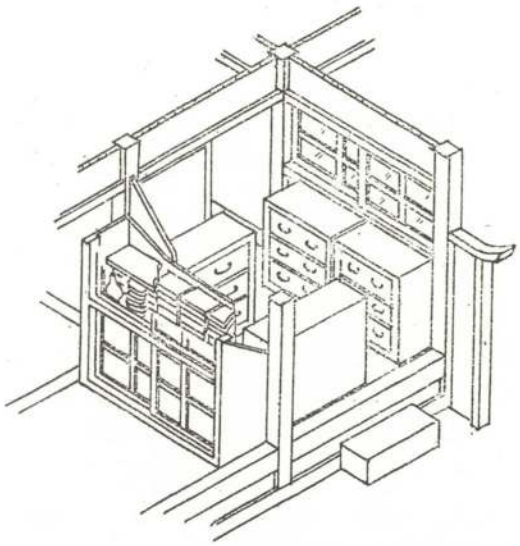


第4圖　床下を掘つた待避所

第4圖は深く堀つた様であるが、2尺堀り下げ周圍にその土を盛つたものである。大阪にはこの寫眞の様に根太を使用せず大鬼に厚板の床構造の家が多い。床下を堀るには好都合である。尙床下を堀る場合はその位置によつて、萬一家屋倒壊の際這ふてでも出られる非常口を考慮しておくとよい。



第5圖　2疊間を待避所とした平面圖



第6圖　2疊間を待避所とした詳細圖

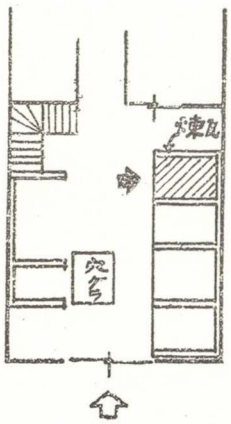
第5圖、6圖は室の餘裕のある家で2疊間1室をつぶして簞笥を利用して作つた例である。隣室の臺所の作り付戸棚に書籍、帳簿を入れて背面の

掩體として居る。掩蓋には衣桁を簞笥の上に渡しその上に蒲團をかけて居た。入口土間との間の硝子戸は紙障子に取換へるがよい。この家庭は多人數のため待避所を2ケ所に分け、老幼者は裏の土藏を利用する事とし、こゝは防空活動に從事する者の待避所である。

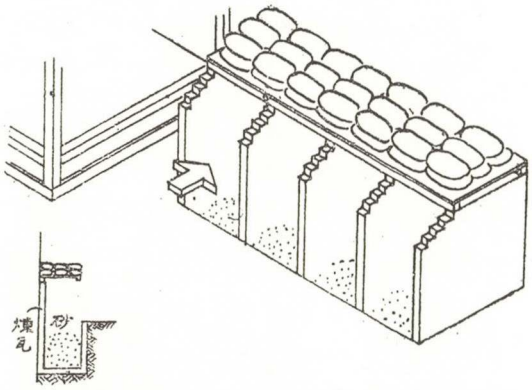
高3尺2寸、長3尺7寸、幅1尺3寸の在來の關西型簞笥は待避所を作るに申分のない好材料である。押入の寸法、床組構造、簞笥の規格に至るまで、關西型は待避所を作り易く出來てゐる樣に思はれる。

以上は既存の住宅へ設ける場合であるが、今後新築の場合は當初から設計に際して考慮していただき度い。一般に納戸を煉瓦造にして之に當てる事を思付く樣である。勿論それも宜しい。然しもつと簡易なのは浴室の利用である。即ち窓臺の高さまで周壁を煉瓦造とし、出入口の對側には押入を設けたり或は壁にして簞笥置場にする。この煉瓦造の腰積は場所的にも木造では腐朽し易く、當然煉瓦造とすべきで待避所にするためわざわざ費用をかけるのではない。更に窓の大さを浴槽の蓋に合しておけば、敵機來襲と共に窓の蓋に早替りして、硝子飛散の防止に役立つ。その上常時浴槽に水を張つておく事は近頃の常識であるし、バケツ2つ3つと浴室掃除用の柄の付いたブラシ1本を備へておけば用意周到である。

次に商店の例を擧げてみやう。商店の場合に限つた事ではないが、全々手を加へることなく從來の儘の施設で待避所に利用出來るものがないものかと探し當てたのが、第7圖、8圖である。

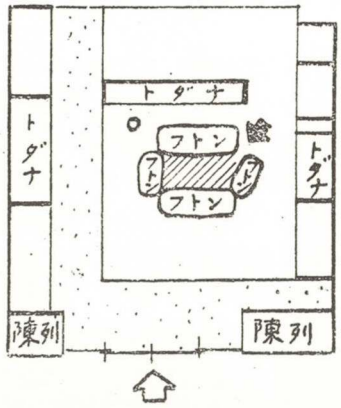


第7圖　某砂セメント商店舖平面圖

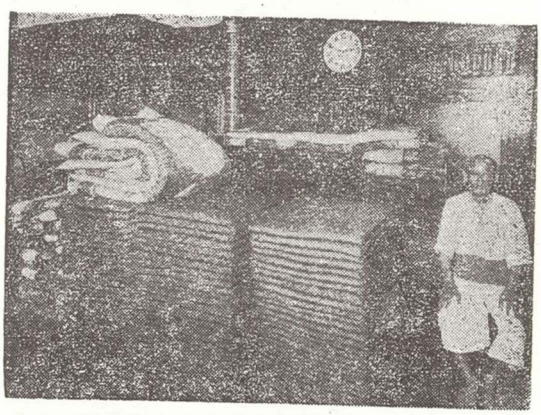


第8圖　砂置場を利用した待避所

セメント、砂等の建築材料商の砂置場である。煉瓦半枚積で區畫された4つの置場の中、奥の1ケ所を利用するのがよいと思ふ。掩蓋は商賣柄セメントでちやんと出來て居る。



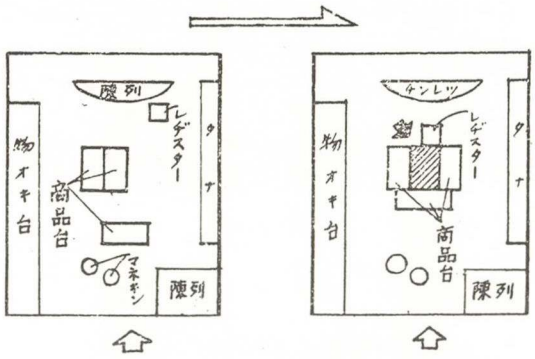
第9圖　某蒲團商店舖平面圖



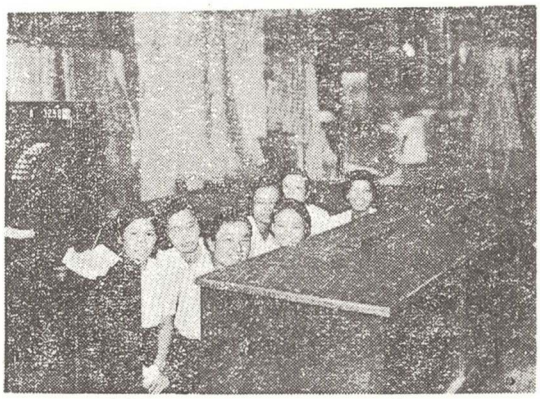
第10圖　商品の蒲團を利用した待避所

第9圖、10圖は蒲團商で商品のみで作つた例で

ある。在來から店に積んでおいた蒲團の間を3尺あけただけである。上の掛蒲團は爆風で座蒲團がばらばらに飛ばされぬ様上から垂らしたり、待避する人が硝子の破片除けに被るために用意したものである。大事な待避を買取られてしまはぬ様品物の補給を心掛けなければならない。



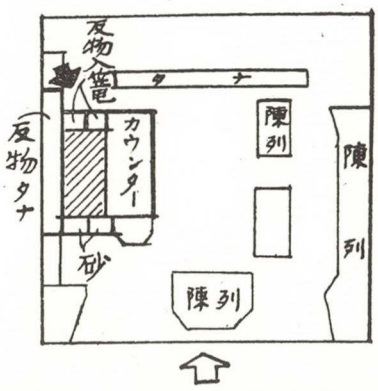
第11圖　某婦人服商店舗平面圖



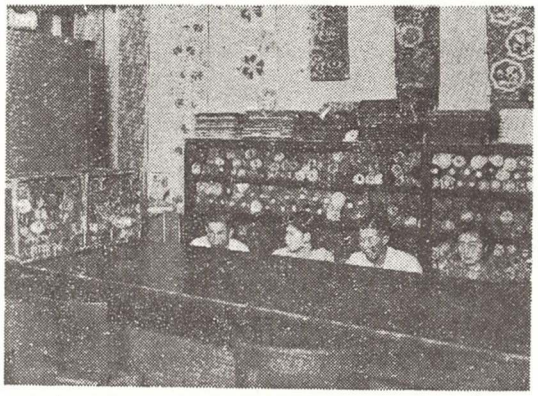
第12圖　商品陳列臺を利用した待避所

第11圖、12圖は婦人子供服地商で從來店内にばらばらに置いてあつた商品臺兼裁斷臺とレヂスターとを組合せて造つたものである。臺の中は商品で一杯、夏は冬物の殘品を、冬は夏物の殘品等で充分間に合ふさうである。レヂスターの下部にも帳薄や砂火用砂を入れておく。平常から待避所に入つて居てお客に三方から取りまかれて仕事をして居り、いざと言ふ時は蹲むだけのことである。掩蓋は商品の布地や布地板を利用する。

一般に布地、呉服商店は作り易い。商品を壁際に積んだり、カウンターの下に詰め込んだり、第13圖、14圖もその一例である。



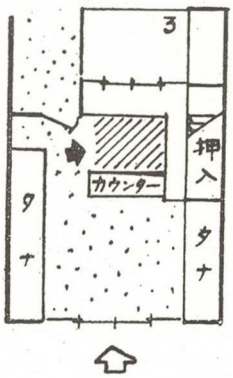
第13圖　某呉服商店舗平面圖



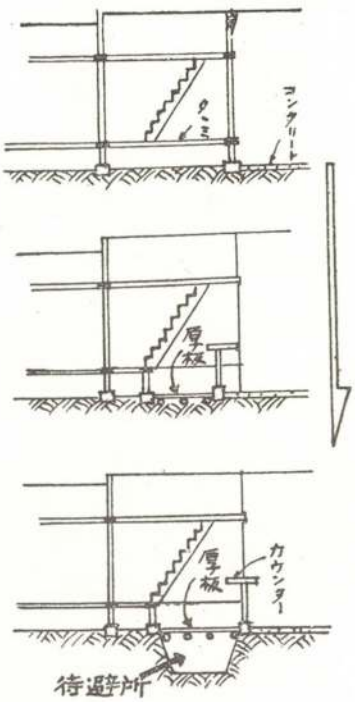
第14圖　商品の反物を利用した待避所

カウンターのところへ出入の口は消火用砂箱や第14圖カウンターの上に見える反物の入つた籠が數個あつたからそれを使つて塞ぐことにした。砂箱は常時置くと出入は出來難くなるが、その位の不便は我慢出來やう。

以上は商品を利用しての例であるが、次は少し勞力をかけて待避所を作る一例である。



第15圖　某荷造材料商店舗平面圖



第16圖　店舗内に地下待避所が出來るまで

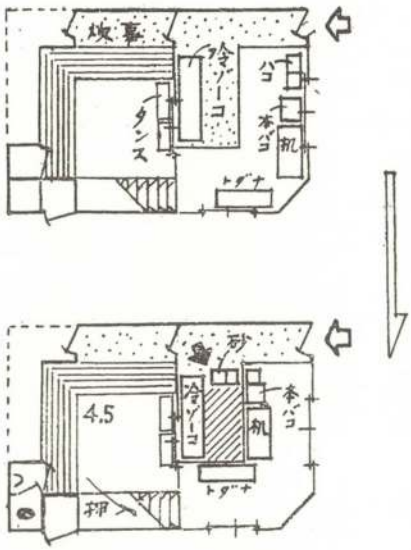
第15圖、16圖は從前の店の帳場3疊の床を落し、轉し根太に厚板張りとしカウンターを置き店土間の一部にして居つたのに目をつけ、この部分約1坪を3尺程掘り下げ平常は從來通り板張り床として使用し、中に潜れば床板がその儘掩蓋になるのである。出た土は箱詰とし周圍の床下やカウンターの蔭においてより安全にした。

一般の商店で既存施設や商品に賴り得ない時、今後新築する時など店舗内に深さ3尺で半坪乃至1坪の地窖を設けその部分だけ厚板床とするこの方法は使用の便、安全性からもよいと思ふ。この時は周壁が崩れない樣土留の工作が必要である。

尙商店では飾窓の下を少し掘り下げればなかなかよい待避所を作ることが出來る。

次の第17圖は市内に數ケ所店舗を持つ某飲食店の事務所である。

入つてすぐ目につくのは商賣柄大冷藏庫、時節柄中は空つぽかも知れないがガツチリして居て防彈片に役立ちさうである。まして背面に簞笥もある。早速これを利用し、事務所の戸棚、本箱、机を配置換して、今迄の通路部分に戸棚や机を置き



第17圖　某飲食店事務所平面圖

戸棚や机のあつた窓際を通路とした。少し手暗がりとなるが事務には差支へない。戸棚、本箱、机の下には帳簿類、用紙類等をぎつちり詰めた。砂箱や商賣柄食料品入りの箱が常に5つ6つあるとの事で是も利用した。

一般に事務所は金庫、書類戸棚、本箱、机等が相當あるから、配置さへ考へたら面白いものが出來ると思ふ。

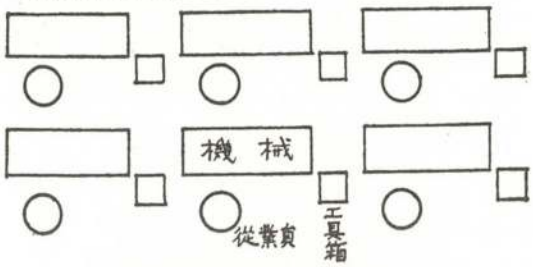
工場の待避所

工場と言つても小工場では商店や事務所と同じ要領で出來るが、規模の大きい工場では一寸むづかしくなる。

工場と云ふと誰でも先づ機械を利用して、機械を掩護物としてと考へるのは無理ならぬことである。然し機械は案外よい掩護物だとは申されない。大型の機械なら何とか利用も出來るが一般の工場に最も多い工作機械はあまり賴りにはならないと思ふ。

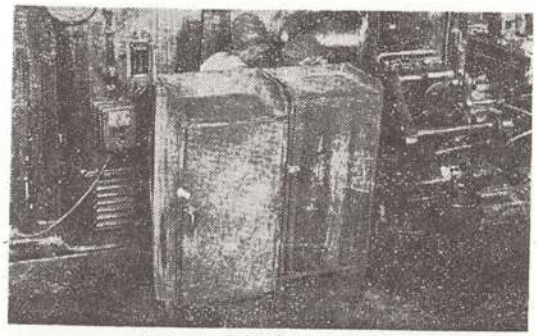
第18圖を見ていたゞいても大略見當がつくと思ふが、鑽孔機は掩體となすには無理である。旋盤も特殊型や電動機直結のものなら先づ利用出來やう。又成型機、削機も大體掩體に役立つとしても是等の機械で隙間なく四方から圍む配置に据えるわけにはいかぬ。せいぜい前後兩面に据え左右は

通路として閉鎖出來ぬから、大略一般には第19圖の様な配列とならう。

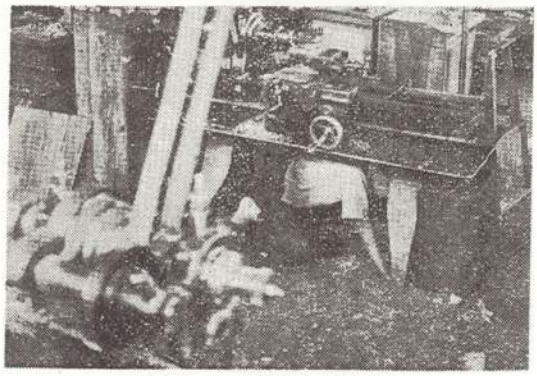


第19圖　一般機械配置圖

左右の防護には各機械毎に持つ工具箱位しか利用するものはない。その工具箱も中味は一杯に詰つてはゐないが、大工場では是が幾重にもなるから、合計されて多少の効果はあらう。と言つて機械を利用する事を否定するのではない。唯機械の蔭にさへ蹲めばよいとしつかりした計畫もなく安心してはならない。機械は思つたより安全性が少く從つて利用價値も少い場合が多いから、出來るだけより安全な計畫施設が欲しいのである。然し何をするにも資材の手廻り難い現在では、次善の對策として機械の利用も已むを得ない方法ではあるけれども。第20圖はその一例である。

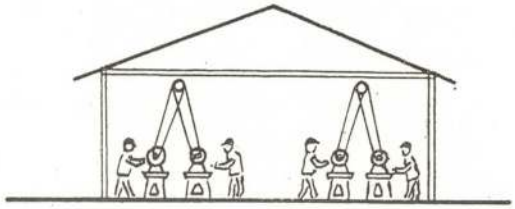


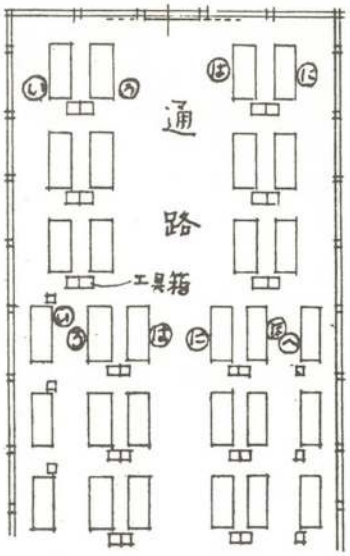
第20　圖機械の間に待避



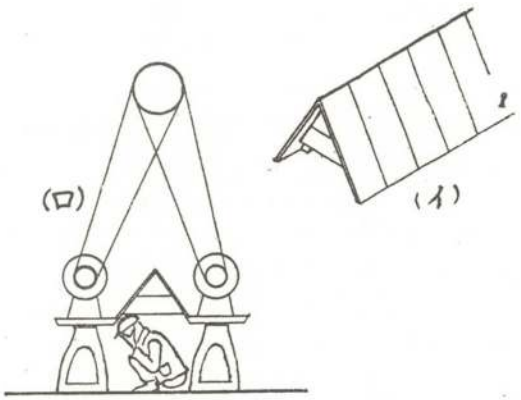
第21圖　機械の下に待避

又機械の圍りが材料箱、製品箱、工具箱等で圍まれて居る場合は割合に安全である。第21圖はその様な場合旋盤の削屑受の下に入つた一例である。





第22圖　工場内機械配置の一例



第23圖　旋盤を利用した待避所

第22圖の様な旋盤作業場では、第23圖「イ」に示す様な屋根型のものを作り、第23圖「ロ」に示

す様に2つの旋盤の削屑受にのせ、削屑飛散の防止をなすと共にいざ待避の場合の掩蓋とし、横からの彈片防止には各機械下に煉瓦1枚積位の防壁を作るなら、相當安全であると思ふ。この下に待避するのは横の同一列にある「い」「ろ」又は「い」「ろ」「は」の2人又は3人である。「に」「ほ」「へ」又同様に待避出來るわけである。各作業場の機械の種類、配置、人員數に應じて最も適當な方法を、各自考究する事が肝要である。

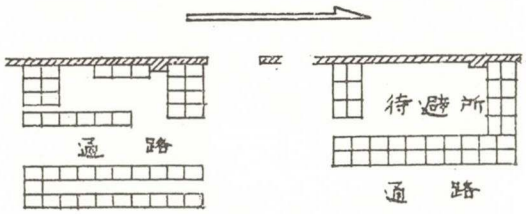
機械を利用することは安全性の少い場合が多いが、唯この考へ方には各自の職場を離れずその儘蹲むだけですみ待避に時間を要しないこと、人の分散がよく行はれること、防護活動に迅速に出動し得る等のよい點があるから、より安全性を附與する事を考へたら理想的な待避の方法である。

それには各從業員の足下に2尺5寸角深さ、3尺の地窖を掘り厚板の蓋をしておき、平時はその上に立つて作業をし、いざと言ふ時々その地窖に入つて蓋は掩蓋として硝子やスレート、其の他の破片除けにするが一番よい方法だと考へる。狹くて窮屈だが長時間待避するのでないからこの位の大さでよい將來の工場はこの位の施設はなすべきであると思ふ。

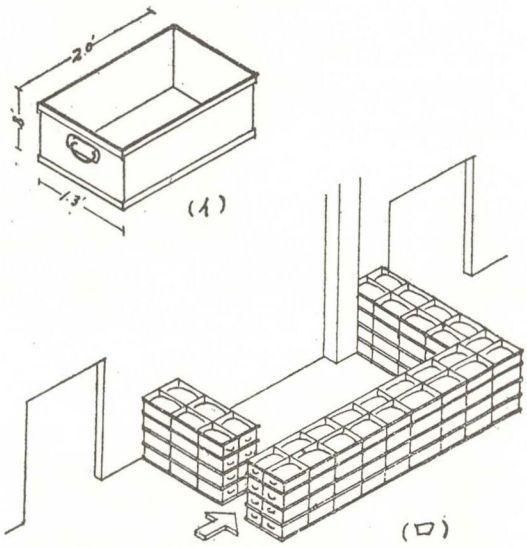
然し是は現存の作業場では殊に資材難の現狀下では困難であらう。各從業員毎にはむづかしいとしても、工場内の主要通路は大抵10尺近くある場合が多いから、その部分に幅3尺、長 6〜9 尺、深さ3尺の地窖を掘るのでもよい。そして矢張り厚板の蓋をする。この程度なら現存の工場にも作り得ると思ふ。勿論わざわざ掘らずとも自動車修繕工場等にある既存のピットは利用すべきことは言ふまでもない。シヤフト用ピットもシヤフトに覆をすれば案外利用し得るものもある樣である。

物資、勞力をなるべく使用しないのが待避所構築要領であるから、矢張り既存施設の利用、物品の配置換を探してみる。常に目につくのは材料や製品の置き方である。第24圖乃至第26圖は某ゴム精練工場に於けるその一例である。

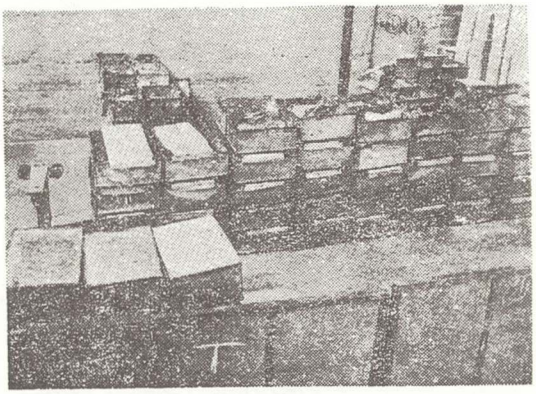
材料のゴムや練り上げたゴムは第25圖「イ」に示すブリキ箱に入れて作業場の片隅に無造作に積まれてあつたのを、第24圖に示す樣待避所の周壁として利用配置したのである。殆ど同一數量の品



第24圖　某ゴム工場の原料置場を待避所に



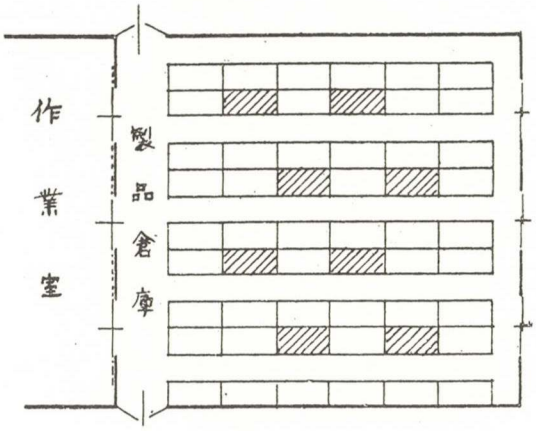
第25圖　某ゴム工場の原料を利用した待避所



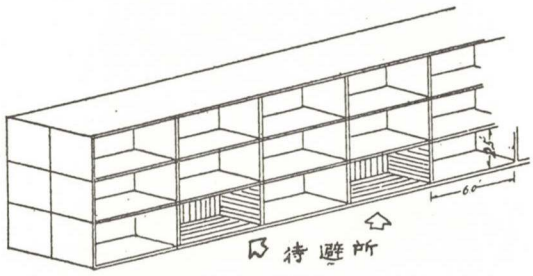
第26圖　某ゴム工場原料置場を待避所とした一例

と床面積で出來るのである。尙この工場は周壁鐵筋コンクリート造、小屋組鐵骨、スレート葺である。大抵の工場ではこの品物の置き方を考へるだけでよい待避所を作り得る場合が多い。

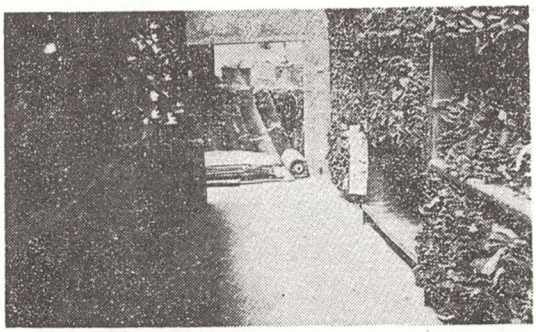
第27圖乃至第29圖は作業場内又は倉庫内の製品棚の所々適當な個所を空けておいて、その儘待避



第 2 7 圖
製品倉庫の棚を待避所とした時の待避所分布圖



第28圖　製品棚を待避所に

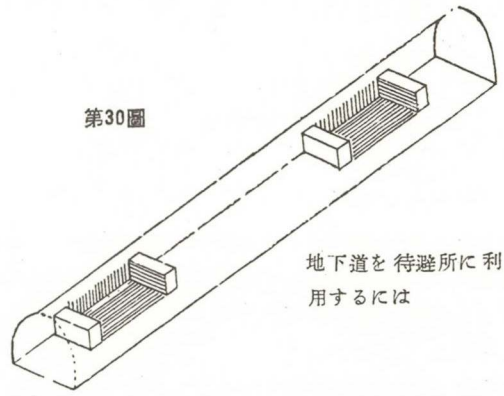


第29圖　待避所となつた製品棚

所に利用したものである。簡單で割合に安全な點よい方法であるが、倉庫内の場合は職場からの距離が問題となる。20秒以内で馳けつけられなければならない。

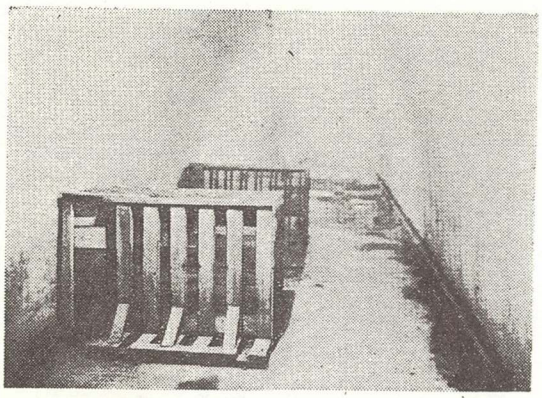
倉庫は原料、製品が收藏され居てその通路を利用したり、2坪位柵で圍つてその中に品物を入れなければ周りに積んだ品物が掩體となつて簡單に待避所になる等、作り易いが作業場からの距離や職場を護る點から推賞出來ない。

同樣な意味に於て地下道を利用する場合は考慮して欲しい。その儘利用し得る點、安全性の大なる點で地下道はよい待避所である。然し10人か20人しか入れない小さなものはそれでよろしいが、長い地下道内に 100人もそれ以上も待避するのは直擊は勿論のこと、出入口附近を爆擊された時でも全員死傷の處がある。爆風壓は廣濶な場所でこそ四方に擴がり、少し離れただけでもその壓力は非常に弱くなるが、隧道内ではその壓力は容易に減衰せずに隧道の方向に相當の距離まで威力が傳はる。然しその方向に面しない部分はぐつと壓力が低くなるから、主隧道に待避するのは危險であるが、是の所々に20人位收容出來る程度の枝室を設け入口に扉を付けるなら申分ない待避所となる。この際は作業場に殘つた防空責任者と密な聯絡、協調が絶對に必要である。日常の訓練が大事である。然し枝室のある地下道は現在では恐らくあるまい。將來への一案である。現存のものを利用となると第30圖に示す樣に高3尺の樞板間に砂利を塡めた防護壁で仕切つた待避所を、30尺間隔位に設置する程度でよいと思ふ。第31圖は某工場に於けるその實例である。



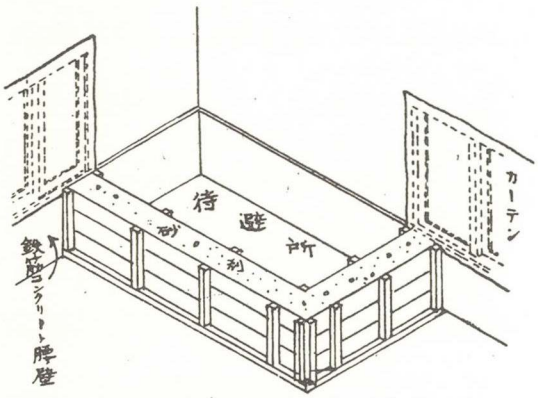
第30圖
地下道を待避所に利用するには

工場の建物で時折見掛ける腰壁を鐵筋コンクリート造としたものは、その腰壁を1方又は2方の掩體として利用し、他の3方又は2方を煉瓦や防腐劑塗りの堰板間に砂利を詰めた掩體で圍んで待避所とするのである。この場合掩體として土嚢を使つてるのが多いが、土嚢は耐久力がない。3ケ月乃至6ケ月位しか保ち得ない。戰爭が長期に亘



第31圖　地下道に作つた待避所

るために度々資材、勞力を要することは勿體ない。例へ屋內に積むにしても土囊はお薦め出來ない。ほんの一時の間に合せに限ると思ふ。



第32圖

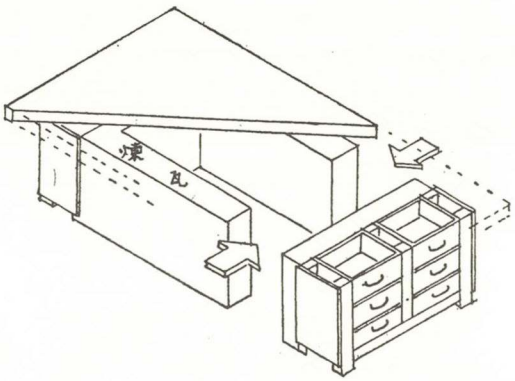
鐵筋コンクリート腰壁を利用した待避所

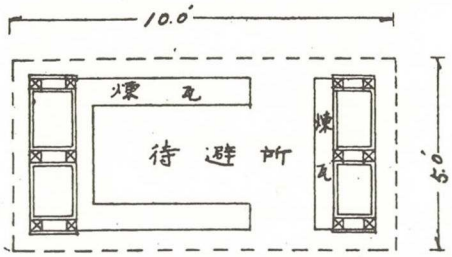
第32圖はその一例である。階下で且窓と離れて居て硝子やスレートの破片による危險の少い時は掩蓋はなくともよい。その時はわざわざ入口を設けなくとも元氣な產業戰士だ、高さ3尺の掩體はとび越えればよい。

第33圖は職場での待避の一案として、作業臺を利用したものである。脚部を煉瓦造とし作業臺の下に入るのである。是は作業臺に限らず事務所の机にも應用出來る積りである。

以上既設工場の待避所に就いて述べたのであるが、序に之に關聯ある防空建築規則第11條に就いて書き加へさしていただく。

第十一條　外壁木造又ハ鐵造ノ建物ニシテ床面積六百平方米ヲ超ユルモノニ在リテハ其ノ居





第33圖　作業臺を利用した待避所

室ノ床面積ノ十分ノ一以上ノ面積ヲ有シ且周壁鐵筋「コンクリート」造若ハ之ト同等以上ノ防彈効力ヲ有スル室、地窖其他防護ノ施設ヲ設クベシ

床面積とは延面積のことである。作業場は當然居室であり。防護とは人命防護の意味である。

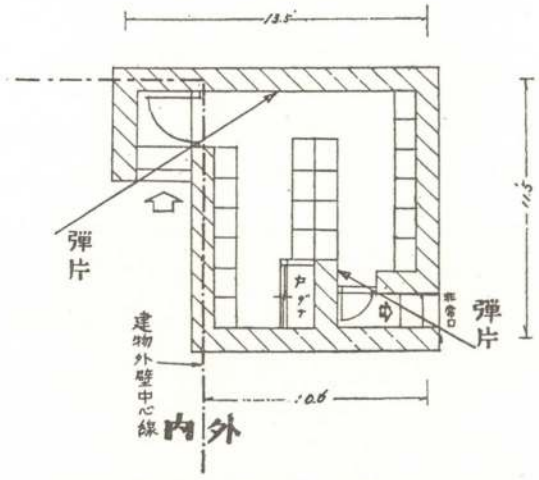
本條に關する當大阪府の取扱方針は

1. 位置はその建物內に又はその建物から直接出入出來る樣接續させるのを原則とする。
2. 作業場に附屬する防護施設の床面積はその作業場內の從業員1人當り8分の1坪を以て算出する。
3. 構造は資材の現況に鑑み煉瓦造にても支障なし、場合によつては前述待避所作り方の表に揭げた構造でもよい。煉瓦厚は2枚半が適當であるが1枚半積でも已むを得まい。唯臨時的なものでなくその建物に對し要求せられて居るものだから出來るだけ耐久力のある材料で耐久力ある施工方法で作るべきである。
4. 防護施設1ケ所の面積は10平方米以下、2ケ所以上を要する場合各相互間の間隔10米以上を保有分散させる事を原則とする。

5. 地窖其の他前述の待避所として作つたものでも適當なものは本條の防護施設と看做す。

以上の中1ヶ所の面積を小にして分散させるのはその配置に苦勞されると思ふが、危害防止上已むを得まい。その代り總床面積の算出方法は現在一般作業場に於ける從業員1人當り占有床面積4坪前後である事を思ふと、作業場床面積の30分の1位にしか當らないと思ふ。

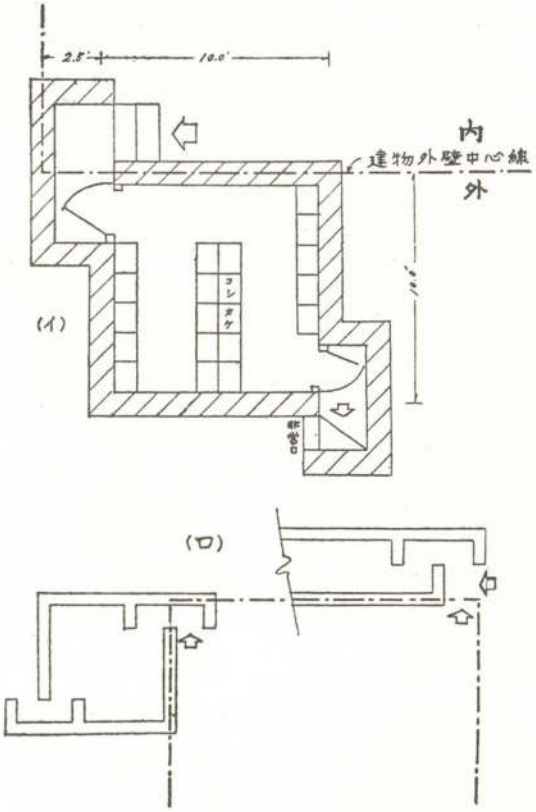
第34圖乃至第36圖は以上の方針によつて、紙上計畫をした3つの私案である。何れも煉瓦造、面積約10平方米、天井高 1.5米、屋根（天井）は適當に梁を渡し厚板を張りその上にコンクリート6糎打として勾配をつける。燒夷彈だけでも直擊彈に耐える程度にと思つたが、現在の狀態では資材がそれ程手廻るまい。勿論本條にも上からのものへの防護は規定してない。諦めて居ると思つてもよいと思ふ。防護の性質から言つて地下に設けるのがよいが、是も資材關係で困難と思はれるので床は地盤下2尺とする半地下室である。その程度なら大概の場所では水も出ないと思ふ。天井高5尺の中、地下2尺地上3尺なら所謂建築面積にも算入されない。この3つの案は當然防彈片を主眼として居る。



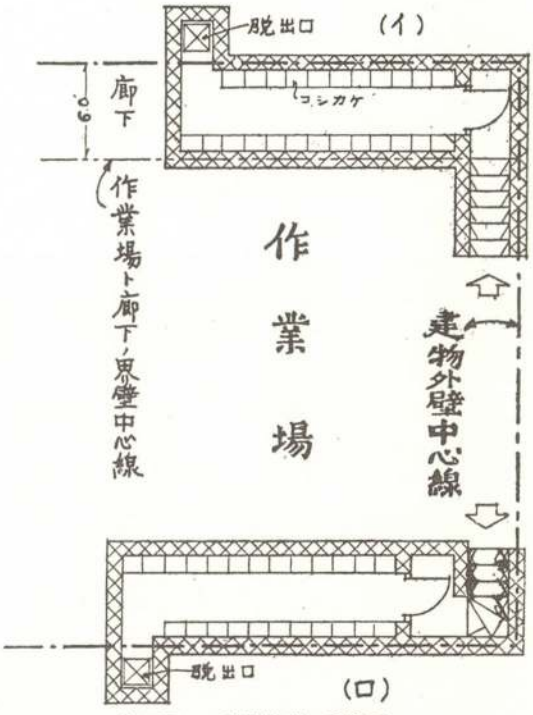
第34圖　待避施設　私案A

第34圖は大した特徴もない平面であるが、座席には彈片が直接當らぬ樣壁體を考慮して居る。

第35圖、この型は彈片が絶對に室内に飛び込まぬ型である。（ロ）はその應用例である。



第35圖　待避施設　私案B



第36圖　待避施設　私案C

第36圖は地下に設ける場合のものである。幅5尺以上の廊下を利用しその兩側の基礎を深くすれば出來る。入口のため作業場の隅約半坪をとられるが、その位は殆ど邪魔にもならず差支へもあるまい。非常口は垂直梯子によつて屋外に設けられたマンホールから出る。機械設備や重量物を置いてない床部分なら（ロ）の様に作業場内の外壁際に設けてもよいと思ふ。

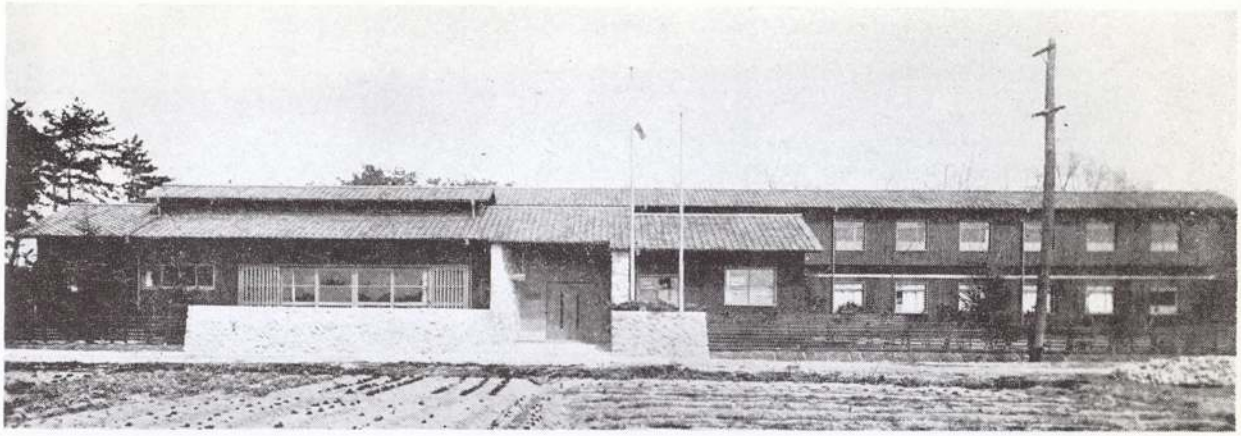
あ と が き

ルーズベルトは先般議會に新豫算教書を送り軍事費1000億ドルを要求し、對日反攻企圖として第一線の極度の消耗戰、南方との航路破壞、帝國本土爆撃を目標として戰備增强に大童である。我々の頭上に何時敵機が現れないとも限らない。今日の戰爭は生産力によつても決せられる。それには工場を護らなければならないが、より大切なのはそこに働く人達の生命である。1人の勞務者が傷ついてもすぐ生産力に影響する。更に我が日本は世界新秩序建設のため戰つて居る。明日の人類のために我々日本人の生命こそ世界一大切な生命である。政府が昨夏來重要都市に待避所設置を慫慂して居る所以でもある。一日も早く今日にでも出來るだけよい待避所を作らなければならない。出來るだけ——急速を要し資材と勞力の關係上已むを得ないが、一度作つてもよい材料の入手に氣を配り順次よりよいものへ改造して行く心掛けは欲しいものである。前述の待避所は決して代表的、見本的なよい例であり案であるわけではない。思付案の程度のものが多いのである。要はその建物の實狀に即應して考慮せらるべきで、畫一的になすべきものではない。

更に附言し度い事は近時街頭で見掛ける硝子戸への紙張りである。あの程度で爆風による破碎を防止出來ると思つて居るならとんでもない怪我のもとである。一昨年の逆瀨川の實驗報告にもある通りあれは効力皆無と言つてよい。あれに賴つて硝子片による危害防止の考慮を怠つてはならない。

本稿依賴された節は「待避施設」とのお話しであつた。待避施設は廣く解釋すれば簡單なものは伏して體のかくれる程度の溝から、爆彈の直擊にもビクともせぬ耐彈構造の防護室まで、各種各樣のものがあるわけである。それを應急措置として緊急を要する待避所のみとした事について協會並に讀者諸賢にお詫び申し上げ筆を擱く。

（筆者は大阪府警察部建築課技師）



正面全姿　左前方公室部　後方二階建　舍室部。

竹　友　寮　（甲子園）

設計　株式會社竹中工務店設計部
施工　同　社　直　營

本寮舍は株式會社竹中工務店が獨身社員宿舍と出張者の宿泊用及び厚生施設の一助として計畫され、本年2月末竣工せるものである。

東西に細長い敷地に配するE型平面を以て西寄りに建設され舍室部、公室部、作業部、及び厚生園を建物自體により明確に四分してゐる。

この寮舍の特色としては居住者に對する生活樣式及び環境を決定的に建物自體が支配して居る點である。

若き建築技術者への施設として同社の指導的英斷に注目すべきであらう。

主要構成材料は各工事場、廢材、殘材、を以てなされたる點を附記する。

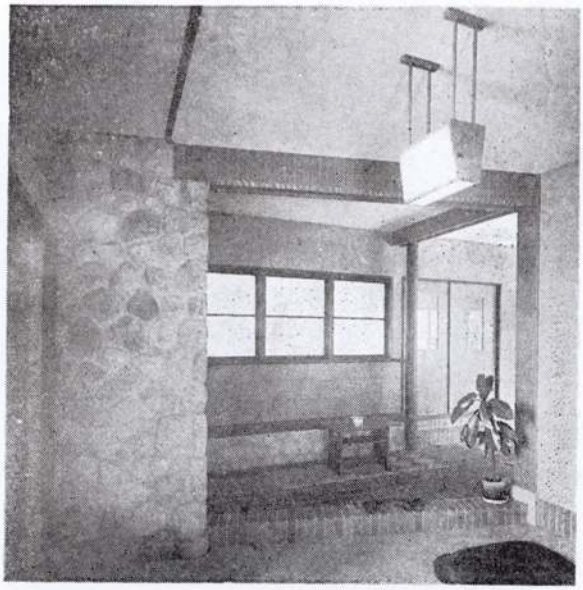
所在地……兵庫縣武庫郡甲子園5番丁
構　造……木造二階建、一部煉瓦造
敷地面積……768.85坪
建築面積……延　181.88坪
外　裝……日本瓦葺き、杉竪羽目塗り仕上、及び色モルタル仕上。一部野面花崗石積み。
內　裝……主要壁面、特製モルタル塗り粗面仕上、木部ペンキ又は塗り仕上

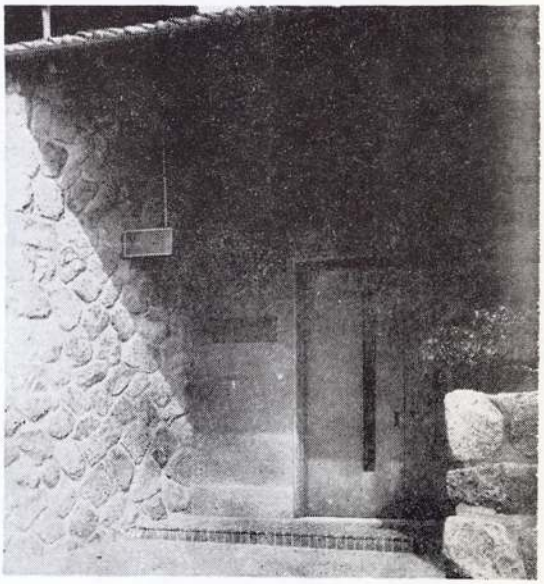
玄關詳細

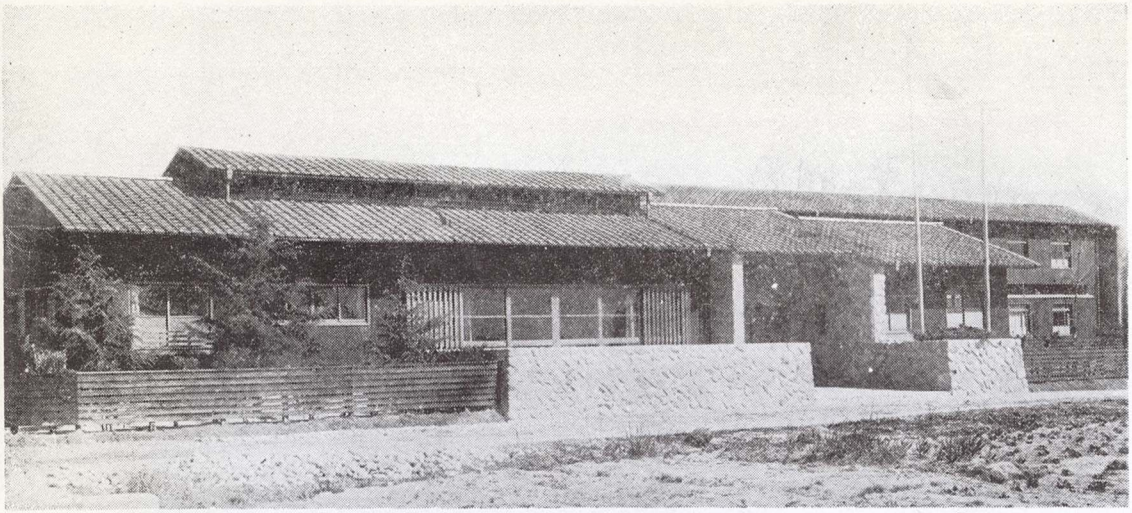
野面花崗石積みの大壁面は玄關內部に貫通して居る。右手植込內に國旗竿及防火用水池を持つ。

玄關內部

外部より中庭への通路と、內部より圖書室への通路との交叉を飛石を以て解決してゐる。

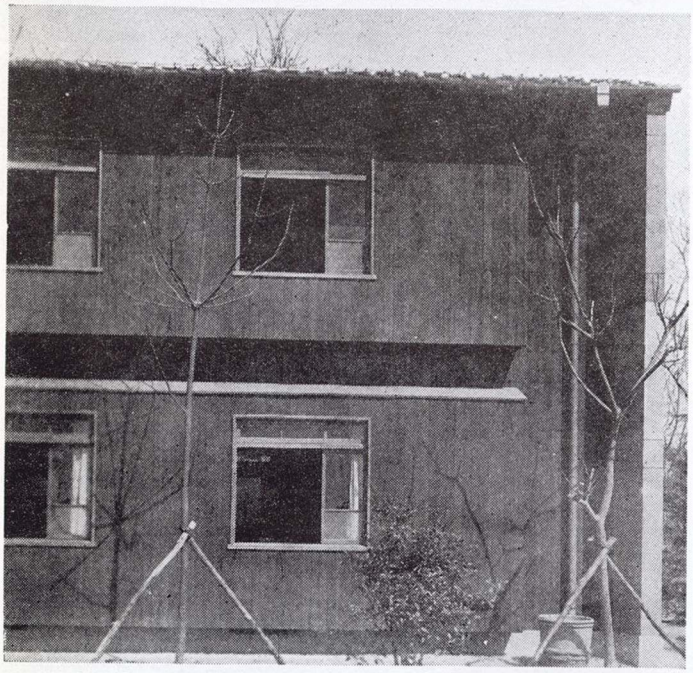






公室部南面

左右積内部は食堂南面のテラスとなる。

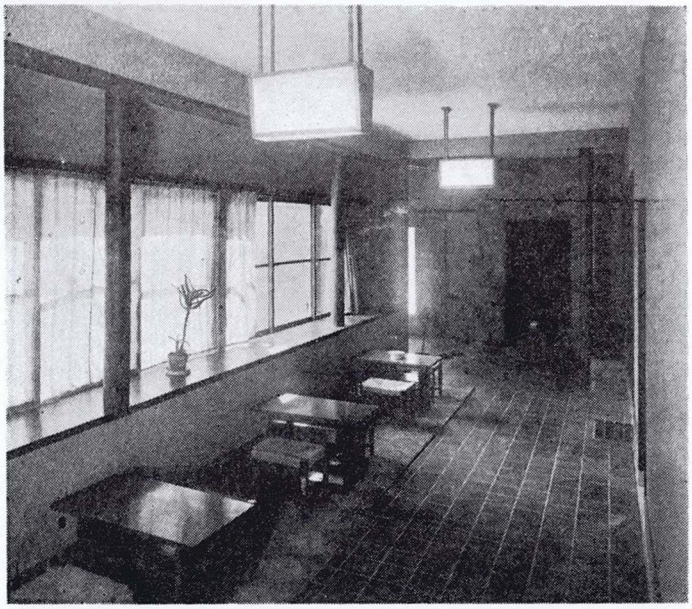


舍室部南面詳細

各舍室出窓は連續となり開口部は硝子戸（三分二開放可能）及び一枚建雨戸を引込み得る戸袋を設ける。（欄間同斷）

窓下部　出窓腰内側に各室床面へ通氣窓を持つ。

外裝　杉竪羽目潤塗り仕上。



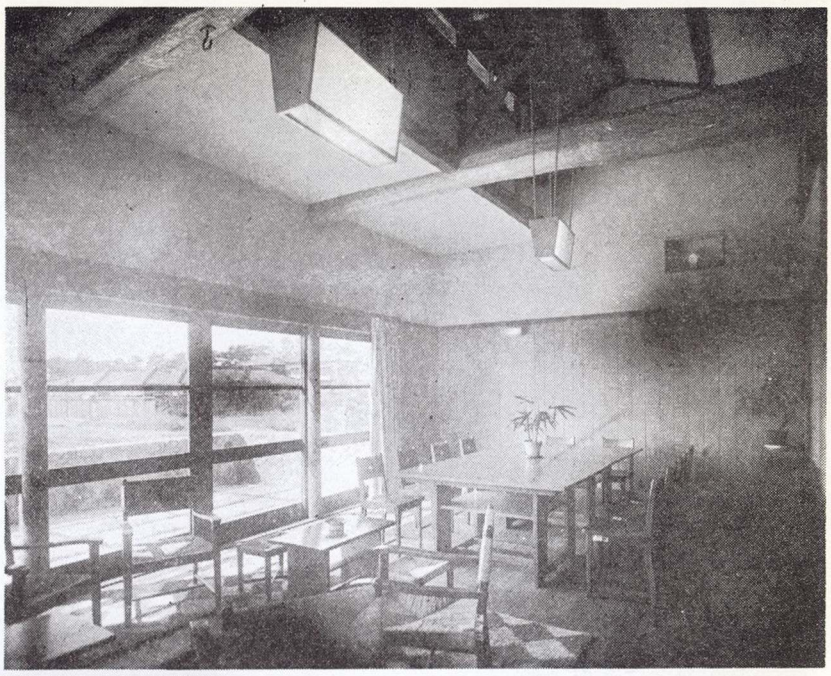
廣　間

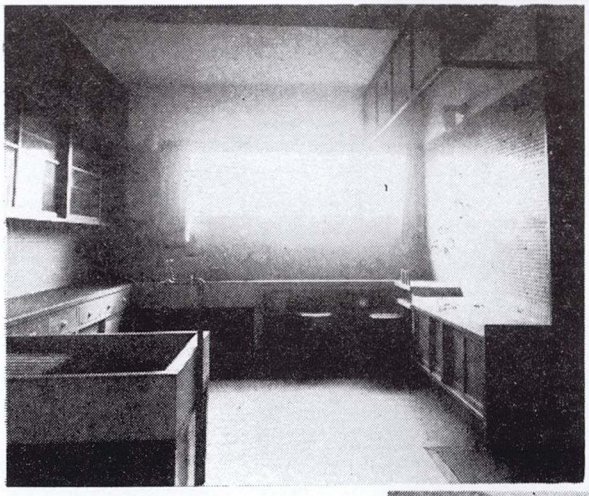
玄關廣間と公室部と舍室部の連絡通路を兼ねる。床は黑タイル貼り、藁マット敷き

左出窓は東面し中庭に面する。

食堂、談話室

腰屋根部分全部を取込み大飛梁を架ける梁、ペンキ拭取り仕上。
壁面、松挽肌ペンキ拭取仕上及モルタル粗面仕上。
左手中央に爐を設け冬期の採煖とする廣間、食堂用電灯器具竹製パイプ吊り。





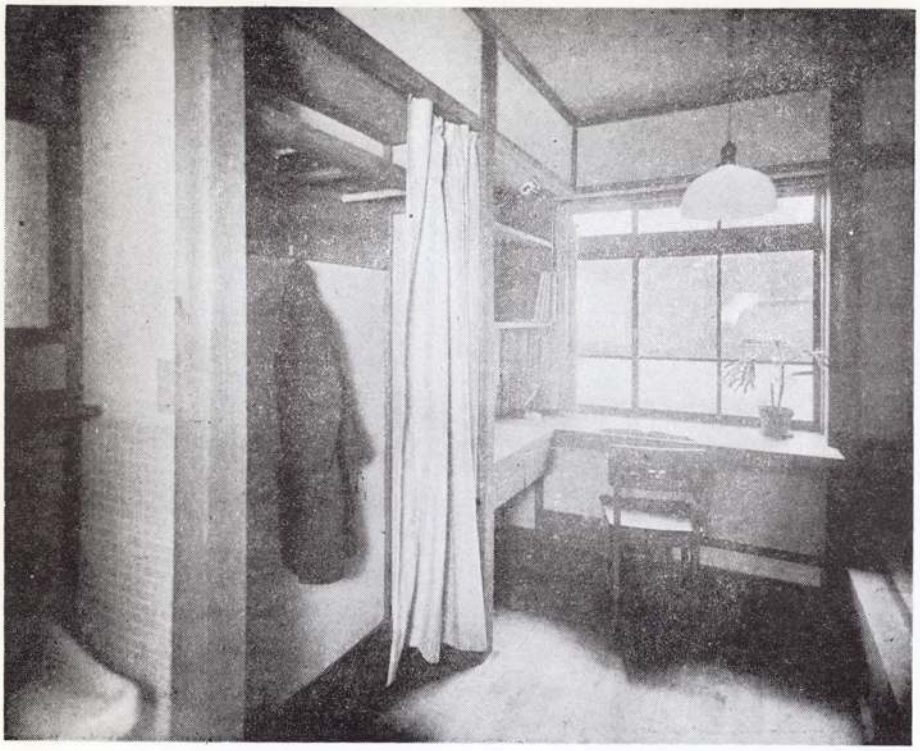
廚　房

食堂西側に隣接して南北を開口部とする床リノリウム敷き。
右手は備入室に通ずる。
右よりコンロ臺、調理臺調理流し。左へ作業臺、食器棚。
手前左は食器用流し、左手配膳室となる。
コンロ臺上部硝子製排氣孔を持つ。

圖書室

左手扉は玄關へ通ず
右手は硝子戸を經て濡椽となる。
入口左右書籍棚及び雑誌棚を取付ける。



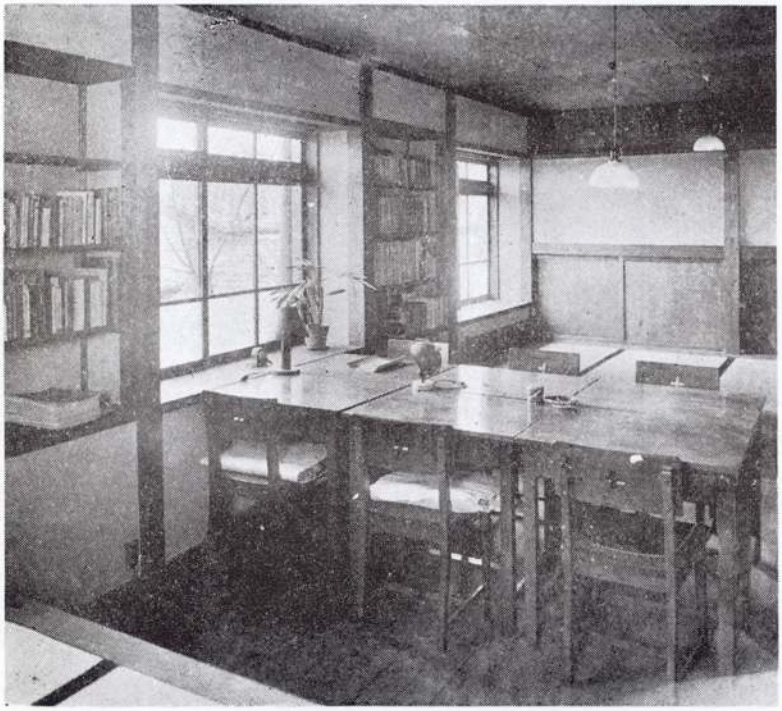


單獨舍室（階下）

主として出張者用のものとする。

出窓臺を延長して造付け机を「型に配す左より洗面器、コート掛、書棚

右側　1尺3寸上りの特殊寸法疊敷きの寢臺となる。後方に寢具入れをもつ。

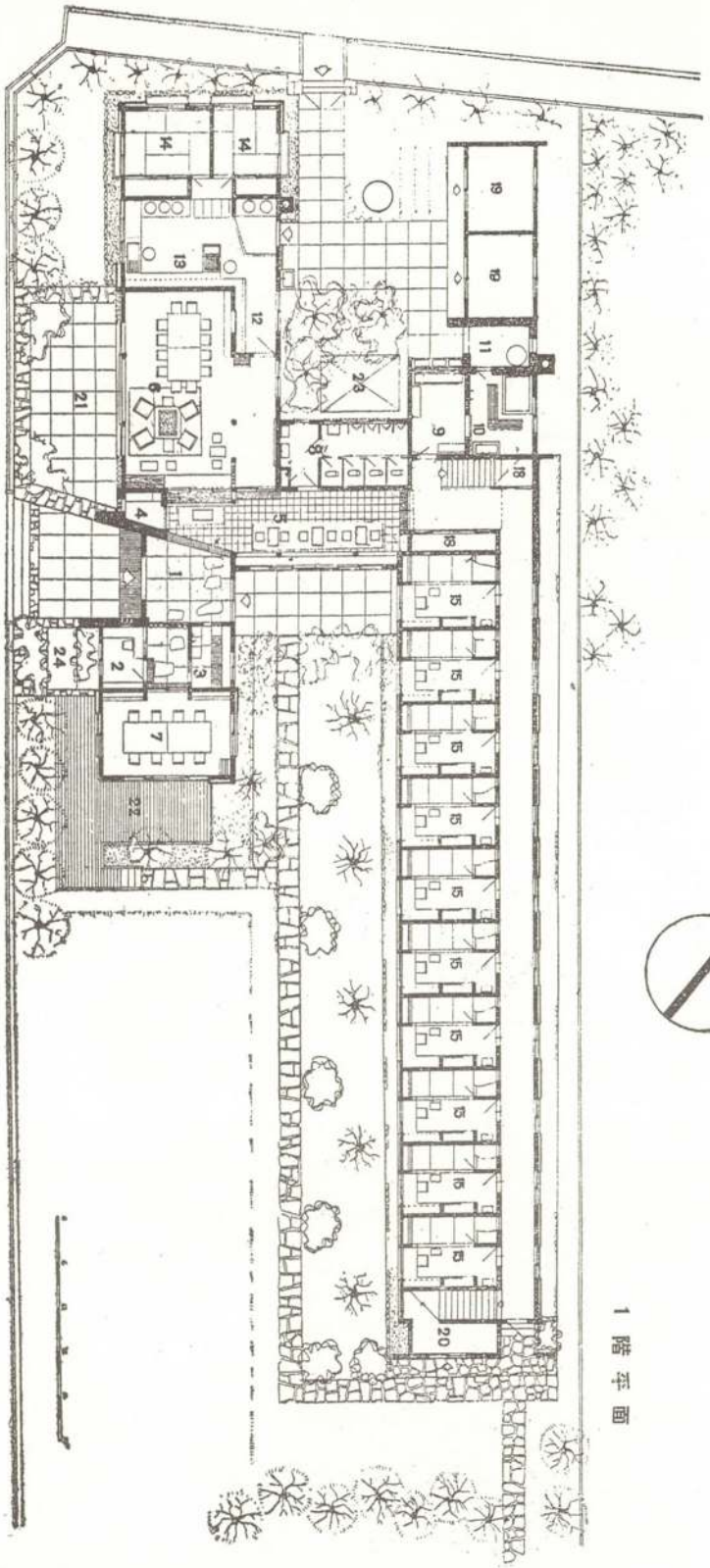


合宿舍室（階上）

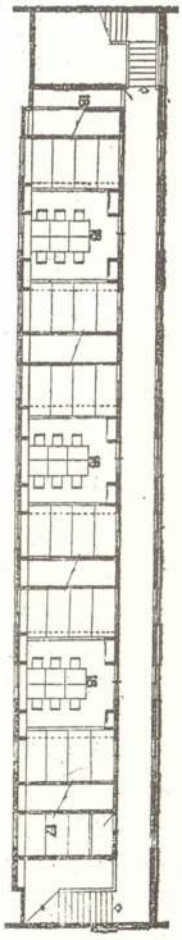
階下單獨舍室3個を以て單位とし中央板間に定員6名の机及び出入口、コート掛を持つ前後の疊敷は有効7尺を以て寢室となる、前面板戸は寢具入れ。

甲子園竹友寮平面圖

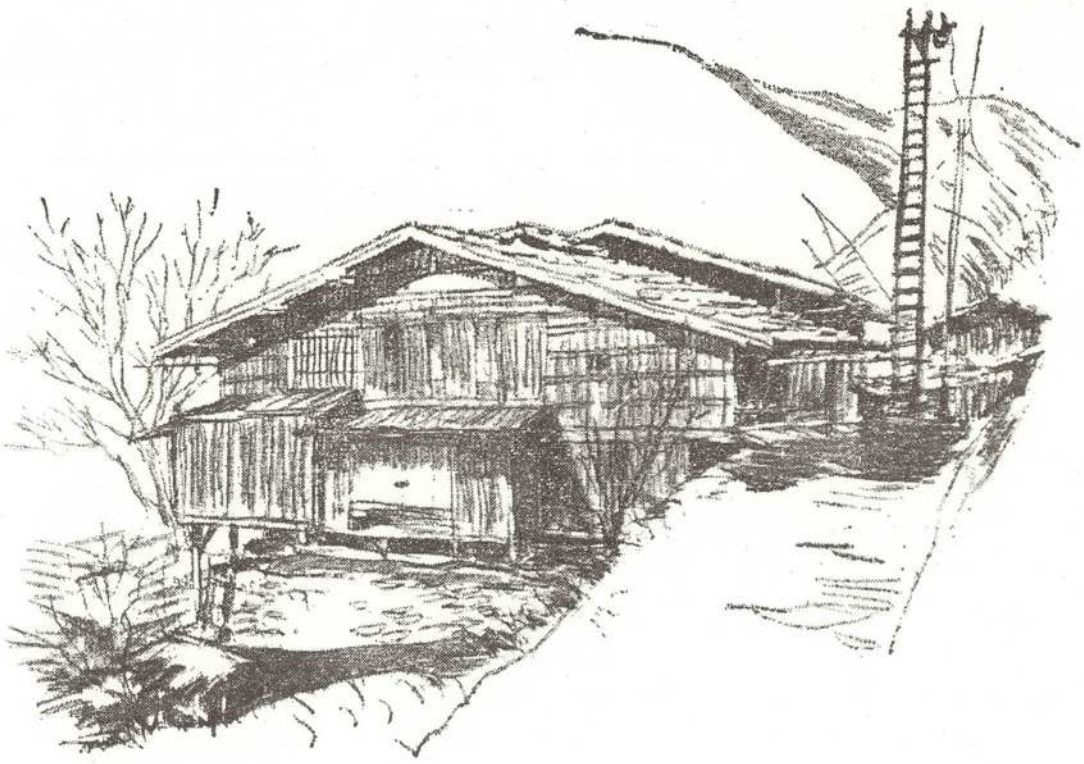
① 玄關	⑨ 脫衣、洗面室	⑰ 靜養室
② 事務室	⑩ 浴室	⑱ 物置
③ 寮生下足室	⑪ 汽罐室	⑲ 倉庫
④ 客用衣帽室	⑫ 配膳室	⑳ 農具運動具庫
⑤ 廣間	⑬ 厨房	㉑ テラス
⑥ 食堂、談話室	⑭ 傭人室	㉒ 滑條
⑦ 圖書室	⑮ 舍室（1人用）	㉓ 汚水淨化槽
⑧ 便所	⑯ 舍室（6人用）	㉔ 防火用水池



1階平面



2階平面



乘鞍の民家

寫眞と文　廣瀬初夫

見返れば山は只白皚々一面の雪につゝまれて、青天の下太陽に反映して燦と輝くに——麓の村には早や春が訪れて、大地からは雪解けのかげろふが盛んに立昇る。乘鞍山麓大野川の家々は、永い冬眠の生活から今起上らうとし、村童は嬉々として戸外を馳せ戯れる。前は清流、後は疎林、山を背にして百戸足らずの村落が、段型に切拓かれた僅かばかりの空地の中に生活してゐる。

屋根はあくまで勾配緩く、深い軒先が濃い陰翳を落す。板屋根に大きい石を乘せて押えても、しつかりした柱と梁の構へは、輕々と夫を支へる。壁は板張りで土壁はなく、ところどころに紅殻塗が混つて、風情まことに美しい。この邊り、信濃から木曾飛騨にかけて、中部日本の美し



い民家が散在して、我々にまたなき歡びを與へて呉れる。

去年の三月乘鞍からの戻り途、歸る日を急ぎつゝも、行過ぎるには餘りに惜しく、只數枚の走り描きに留めたが——その時期した又の機會の樂しみは、今に猶ほ果せずその儘續いてゐる。

元　伏　屋　邸

池田谷久吉
宮崎秀正

まへがき

國學の大先覺として「萬葉代匠記」の著者としての阿闍梨契沖の名は國史の上に暗夜の炬火の如く輝いて居る。然も彼が三十才頃から四十才迄その壯年時代にして習練時代である八九年間を和泉の山村に過した事は著名の事實であるが、その遺蹟に就ては案外世に知られて居ぬ樣である。

契沖のその前半の滯在地である久井の遺蹟は既に煙滅に歸して知るよしもないが後半を送つた伏屋氏の遺蹟は一部に過ぎぬとしても割合によく保存され而かも昭和13年5月11日附を以て大阪府から史蹟に指定せられて居る。此の由緒ある遺蹟に今猶德川初期の住宅の遺構を持つ事は一に歷史日本の誇りであり、之れを廣く一般に紹介する事は國體明徵の大先覺契沖の側面的顯彰とも謂ふべく烈士顯彰の時局の要請に對應する建築家の責務として敢て一文を草した次第である。

位　置

伏屋邸址は大阪府泉北郡南池田村大字萬町にある。南海鐵道で本線ならば濱寺驛、山ノ手線ならば鳳驛下車、乘合自動車で父鬼街道を南下陸軍の信太山演習場を右に見、伏見屋氏の拓いた伏屋新田を通つて南池田村に達する此の間約十五分。南池田村大字川中で槇尾川を南へ渡り浦田の街を北へ逆行すると間もなく萬町に達する。

伏屋邸址はその萬町東部の一廓を占め今猶堂々たる門長屋を持つて居り邸前が密柑畑で開けて居るだけに老松の並木越に見たその大觀から言つても附近の諸民家を壓する威容であると謂へる。

伏　屋　氏

伏屋氏はもと池田氏と稱し代々和泉に勢威を振つた豪族である。姓氏錄に見える「和泉國皇別池田首　景行天皇皇子大碓命後也」とあるを家系として傳承して居り。槇尾川に架つた萬町の入口に當る琴阪橋畔に且てあり今は門長屋に續く土塀の一廓にある元制札場阯に移された歌碑の側面に

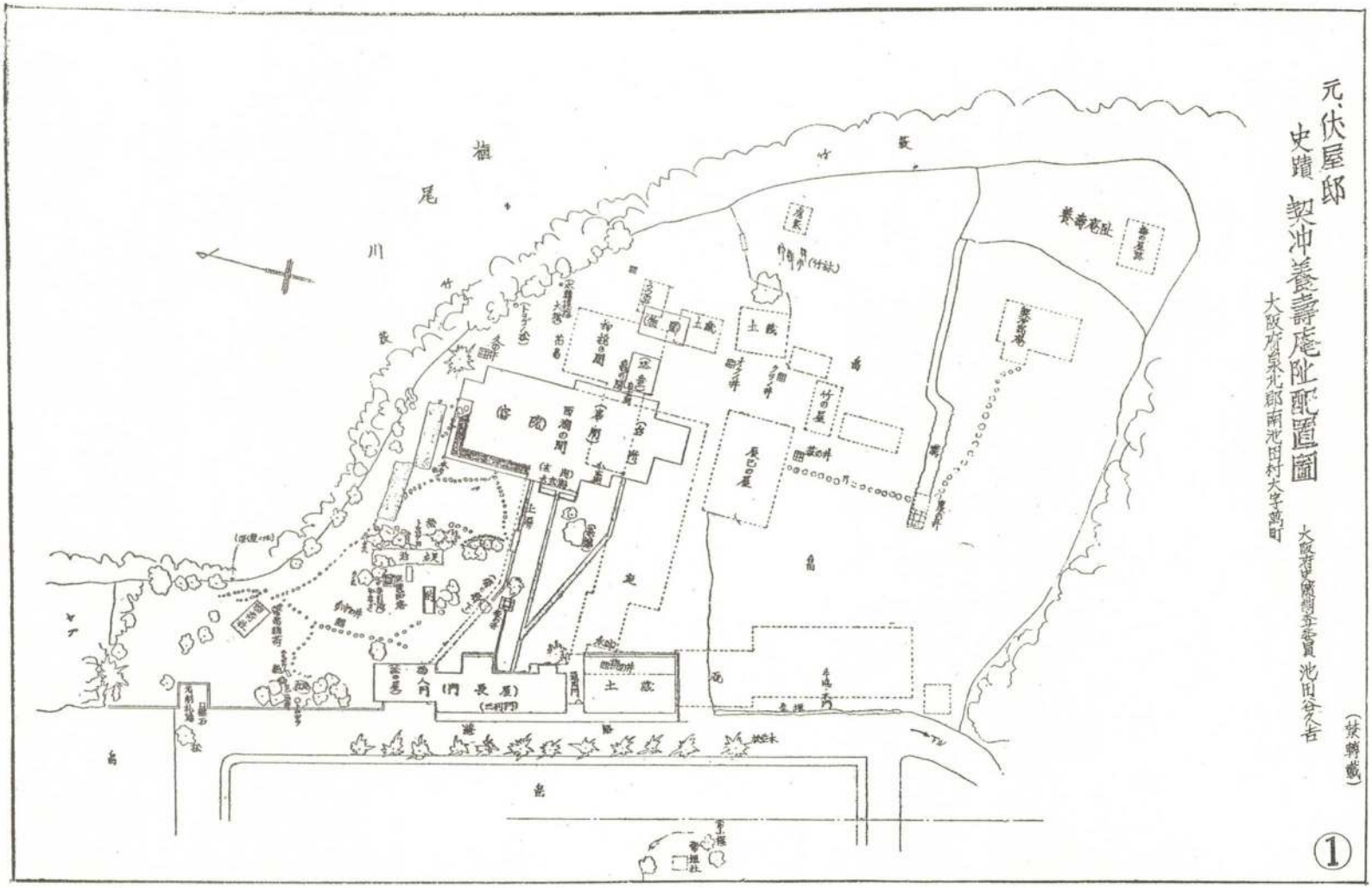
景行帝皇子大碓王三十五代裔
此建者　和泉國池田鄉先封主富重二十四世嗣
布施屋久春用志三十歲之貶也

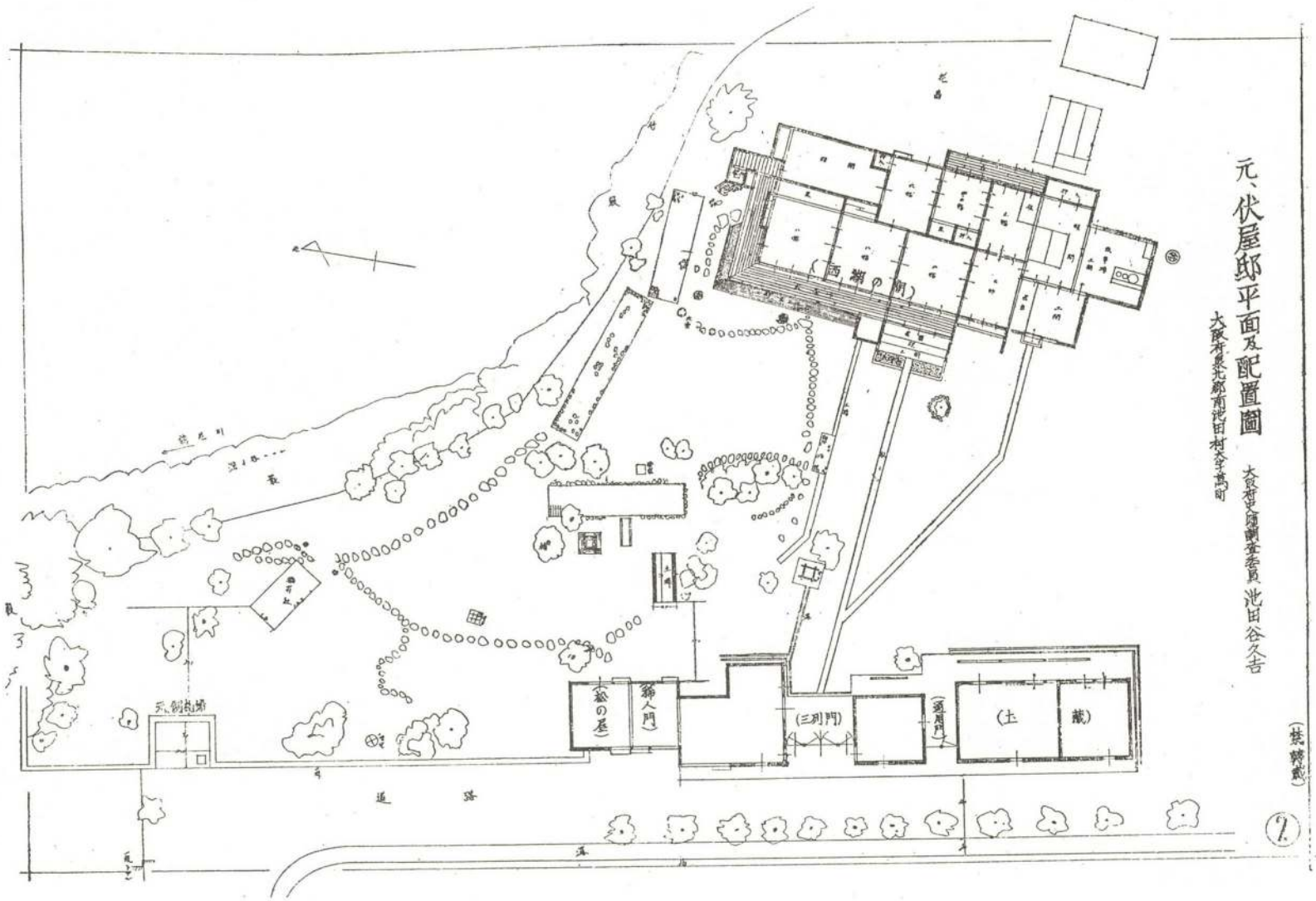
と刻んだ處を見てもその信念と誇りを見る事が出來る。

池田氏が伏屋氏を稱した理由と時期に就ては明らかでない。が明らかなのは伏屋は前記歌碑の文面に見る布施屋と同音であり布施屋は行基菩薩の開いた布施屋と同じである。行基が三ケ國九ケ所に開いた布施屋即ち無料宿泊所の內和泉には大鳥と量中に置かれたとあり、宇田川文海氏の〃伏屋〃にも見る如く有力者が池田氏布施屋を經營する事は當然考へられ布施屋が呼び習はされて姓となるも亦自然の樣にも思はれる。

然し案外布施屋氏は傍系であり宗家はあくまで池田氏であつたかも知れぬ事は下記に依つて考へさせられる點であり、建物の所在地〝池田〟と共に考究の餘地がある樣に思はれる。即ち大人名辭典に依れば伏屋飛驒守一安の長子重正高階舍重の養子となり後伏屋氏を稱するとあるも、契沖法師寓菴幣垣舍圖記載に依れば重正を竹麿とし泉州池田家を嗣ぎ後伏屋氏と改むとあるを見ても、此の伏屋氏以外に至極簡單な生家復歸の事情から見て恐らく緣邊と考へられる池田氏があつた事は分明である。然も竹麿の子重賢に至つて果然豪奢を極めた事情から見て或ひは竹麿の生家復歸が池田家を斷絕せしめ遺產は伏屋氏が繼承したのかも知れぬ。即ち後考を待つ所以である。

時代は延寶天和の頃當主を伏屋重賢と云ふ。彼は近鄉36ケ村觸頭を勤める身であつたが天性文學を愛し俳諧を能くした。契沖の祖父が加藤清正に仕へ彼重賢の祖父一安が豊臣秀吉に仕へた因緣に


元伏屋邸
史蹟 契沖養壽庵址配置圖
大阪府泉北郡南池田村大字萬町
大阪府史蹟調査委員 池田谷久吉
(縮尺一千分一)
①
瀬尾川
養壽庵
土蔵
竹の間
表門(長屋門)
土蔵


元、伏屋邸平面及配置圖
大阪府泉北郡南池田村大字高町
大阪府史蹟調査委員 池田谷久吉
(西棟の間)
(土蔵)
(三門)
(表門)
獅子門
(番の屋)
元、御茶屋
道路
(拡張敷地)
(7)

因るとは謂へ契沖を請じその莫大な藏書を閲覽せしめて後日の大成を基礎づけしめたのは全く重賢の功績を稱すべきであらう。

西山宗因は延寶二年重賢を訪ねて雅會をなし石川矩州は邸内松の屋で死歿して居り、現存西湖の間の壁畫を畫いた雲谷等をも、作庭家藤村庸軒も補作したその子蘭堂も彼と同時代の人であり、寶山、尊海、覺彦、陽阿、義剛、似雲、常明等みな遊泊入錫せりとあれば凡そ趣味を解する者彼を訪はざるはなかつたかと思はれる。從つてその藏書と共に數多の資料が山積された筈であり後年本居宣長が契沖の遺跡を尋ねて遊歷した事自身が又一つの資料と言ふべきであらう。

さはあれ伏屋氏も文雅の交遊は重賢を頂點とし以後は只遊覽の漂客を迎接するのみとなつたらしく地方の有力者としての位置に變りはなかつたかも知れぬが明治の御世に入つて維新の經濟恐慌に家運衰へたかあたかもその十八年の大洪水に家屋の大多數を流失して遂に復興する事なく家運益々衰へ近年に至り遂に長年の歷史ある墳墓の地を棄てゝ他鄉に流遇する事となつた、重賢の時代を距るのみにても正に三百年その末流の心底又涙なきを得ない。

然し當主高橋辰雄氏は良く史蹟を認識せられ建物にはいさゝかの變改も加へられてゐない頭記史蹟指定と共に後世史家の幸福之れに過ぎざるはなく誠に奇特の事と言はねばならぬ。

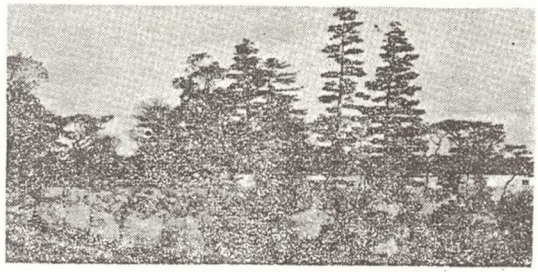
遺　　構

現在の遺構は延寶の昔から見てその規模の約三分之一に當り門長屋の約半分と書院とも云ふべき西湖の間が殘つて居るのみで由緒ある第二の養壽庵も梅ノ屋其の他多數の建物は流失してしまつて今では跡に一物も殘さぬ畑地と化して居る。然し松ノ屋、土藏を取り込んで一連の構成美を示す豪壯な門長屋は昔ながらの姿を殘し元制札場を取り廻らした土塀と共に三百年の星霜はこの一廓のみにても民家史上の貴重な記錄と言つて良い。加ふるに一部變改を受けたとしても何等外觀を損はぬ西湖の間がありこれと門長屋とを繋ぐ諸工作物は壞滅に頻しながらも猶容易に其の上の盛觀を復原せしめる。今少しく前二者に就て詳細に觀察して見たい。猶西湖の間背後には浴室と物置があるがこれは至極新らしく又言ふに足らぬものである。

門　長　屋

門長屋は正面を西方に向けて建ち前記の如く松ノ屋、土藏を含み稀人門、三列門及び通用門を開いた一連の構成を成してゐるが土藏のみは通用門を界に切妻屋根の別棟をなして居る。何れも腰は海鼠漆喰塗で壁は稀人門の一陪を除き白漆喰の土藏造りになつて居る、瓦は凡て本瓦葺である。

（第2圖參照）



第2圖　門　長　屋

門長屋を大觀して最も目立つのは「稀人門」であらう。稀人門は實用的には貴人門らしく松ノ屋と下男部屋と思はれる三列内脇の部屋との間に設けられ現在は閉鎖されて居る。これは松ノ屋と共に門長屋より正面壁面線を約四尺程後退させ、然も肘木を添へた長い腕木で門長屋の軒先通り迄出した深い軒の出は、門と言ふ概念的な觀念を破つた一際高い軒高と共と單調に陷り易い一般手法の弊を救つた非凡な構想である。入口は沓石を置いて敷居を高く嵌め踏越しに這入る樣になつて居るのも變つて居り敷居下の巾木部分は海鼠漆喰塗になつて居る。建具は格子戸を嵌込み脇に取付けを戸袋と繰込み入口を開放出來る樣となつて居る。つまり入口は稀人門内全體から見て片寄つてゐる譯である。軒は前記の樣に非常に高いので入口軒上桁との略中間に付長押を取付け、付長押の上に換氣孔然とした小窓を設けて居る。然も入口上の釣束は付長押で切捨て上部一廓を白漆喰で塗廻した邊り細心の手法と言へよう。

俳人石川矩州病歿の由緒を持つ「松ノ屋」は又更起堂とも言はれ、稀人門に北接し全建物の北端に位して居る。屋根は他の各部の切妻に對し寄棟とし、正面唯だ一ケ所の窓を稀人門戸袋脇に付けたあたり簡單な板庇の出格子ながら稀人門の格子

戸と後補らしいがそれに接した下男部屋の格子窓とは美事な階調を示し意匠正に萬點むしろ美學の心髄を把握したものと謂ふべきである。

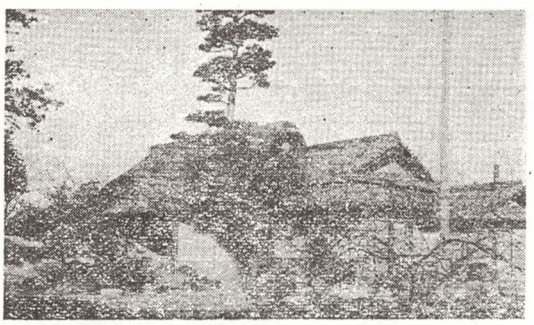
門長屋の主入口は「三列門」と呼ばれ扉は稀入門と同じ壁面線に設けられ兩開きの盲連子入り棧唐戸の昔ながらの豪奢なもの、片脇を棧唐戸釣込の潜門とし反對側は板張りとして居る。軒桁との間の天井は簡素な板張りとし、左右兩脇往昔の下男部屋？には悦窓を設けその腰を竪棧押への羽目板張りとした等、入口鴨居を楣下に添へ角柄様に左右に延ばし柱を之れに納めて一見社寺建築の幣軸の手法を想はせる特異な點などむしろ輕快な感じをさへ抱かせられる。

下男部屋？の正面窓は前記稀人門際の格子窓を除き各一ケ所あり太い二本の横格子を嵌込んで居る。窓は土藏も同様であり意匠上何等遺感の點はない。

以上一群の建築を見るに内部は現在物置然とし又見るべき點はないが、剛健な土塀を配したその外觀は階調を破つて猶平衡を失はず之れを總體的に大觀するも細部に渉つて觀察するも細心の技巧を廻らした民家史々上に於ける優作と推奨するに難くはない。

西　湖　の　間

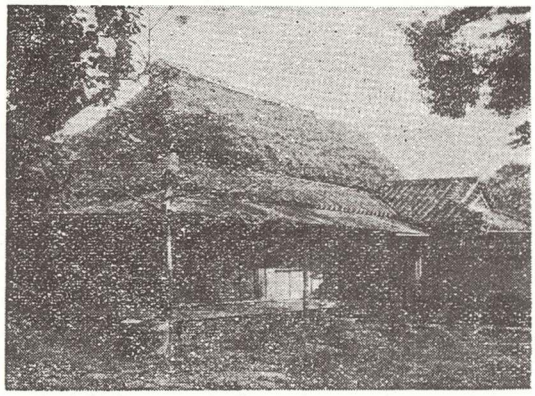
西湖の間は即ち現在の主家であるが以前は書院又は客殿に使用されたらしく大玄關が設けられて居り、建物は門長屋に對しいささか東北方に開いた配置を取つて居る。以前は小玄關を附けた渡廊下で連絡された主家が南方矩規の手に建てられて居たのであるが既記洪水で流失した後は西湖の間に臺所及内玄關を增築し純然たる主家となつた。（第3圖參照）



第 3 圖　西 湖 の 間

西湖の間と呼ばれるのは三間續きの居間の正面壁一面に畫かれた西湖の圖に依つてである。畫は雲谷等與の筆であるが大玄關を這入つた刀架を設けた一間のみは道信の補筆と言はれる。等與は雲谷流の鼻祖等顏の孫であり、父祖を恥しめずと言はれた等益の長子で法橋に任ぜられた雪谷流の名手である。であるから此の建物は細部の平凡な手法に比して奇拔な着想を示した此の西湖の圖に一見の價値がある。

然し此建物も前記門長屋の場合に於けると同様木連格子を嵌めた入母屋造本瓦葺の大玄關にしても正面に美事な持送りを付けた軒桁を出して屋根をせり出したあたり庇を省略した設計の非凡さが看取される。床脇を摸した刀架にしても西湖の背景にした華麗の手法に注意すべきであらう。



第 4 圖　西 湖 の 間

建物はもと本瓦葺の下家を下ろした寄棟造りの藁葺であつたが今は更に軒先に浪型の亞鉛鍍鐵板を葺下ろして居る。そして居間の外緣が切目緣であつたのを緣巡の廻緣に改造しその外に更に濡緣が設けられ室内は晝でも猶薄暗い感じがする様になつた。（第4圖參照）南側增築陪分は棧瓦葺の入母屋造りで矢張り本瓦葺の下家が設けられて居る。外觀上からは土塀を界に舊建物の風趣を妨げず大玄關との均齊もとれ技術上むしろ成功して居ると評してよからうと思ふ。

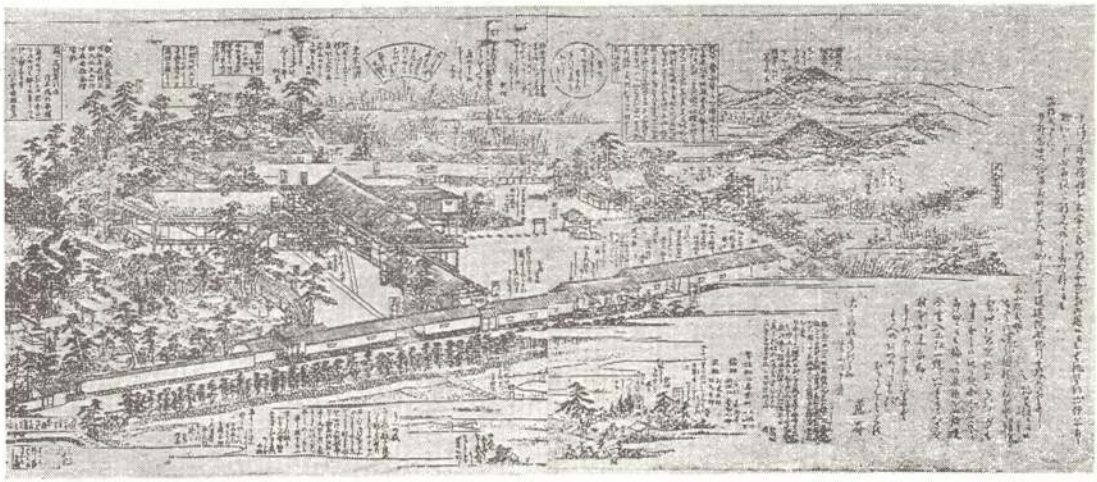
昔は此の西湖の間と稀人門を繋ぐ土間の傳廊下があり、廊下は梁間一間で南側を土塀に見せ北側庭園に面した方を開放して獨立柱を見せ、西湖の間とは大玄關脇の廻緣に連絡してゐたのであるが之れも今は壞滅し南側の壁を一部殘して土塀となし西湖の間の取合は塗壁で塞いでしまつてある。

何れにしても藤村庸軒の作庭を一筆に納めた此の華麗を秘めた建物も、今は室内の寂しさを反映して一見忘れ難い風韻を漂はして居る。

以上で遺構の大要を記した。正面道路に面した土塀は恐らく往時の儘の姿であらうが特記する程のものでもなく庭園はその一部をかなり完全に保存して居るが荒廃の甚だしいのが惜しまれる。

復原的考察

伏屋邸に就ての諸家の記述は皆無と云つて良い程少ない。然も從來發表された論說の內容も殆んど契沖との歷史的因果的な考證に限定された觀があり、建築物に就ての研究は寡聞ながら殆んど見ない處である。從つて文獻も「契沖法師寓菴幣垣舍圖」が筆者の目擊した唯一の例である。**



第 5 圖　幣　垣　舍　圖

** 幣垣舍圖は桃溪山人の筆になる伏屋邸の寫生圖である。桃溪は寶曆十年生れ文政五年六十三歲で歿して居るのであるから、元祿六年に伏屋重賢が歿してよりおそくとも約百年にして出來た譯である。蒂關月に畫道を學んだ彼が一面狂歌師として又文人として、その昔契沖、宗田、矩州を初め當代の文人墨客を日夜送迎した此の伏屋邸をむしろ追慕して、その數多くの名所圖會に示した手腕に精根を込めた作品と看られる。之れを前記遺構と對稱するも殆んど間然する處なく符合し、然も全機構は明治十八年の洪水迄嚴存した事が事實である以上右文獻は貴重なものと云へよう。今少しくその內容に付復原的考察を試みる事としたい。（第5圖參照）

伏屋邸は大觀して既記門長屋の一群の南に猶接續して既、牛鳴ノ木門、並に物置があつた事が明らかであり、住居用の建築群としては前記西湖の間を正面にその南方に主家があり、辰巳の屋、龜の間、柳桃の間の一群を配し、茶席或は數奇屋としての「うつの屋」及び養壽庵梅の屋を始め土藏物置、井戶屋形等諸々の建物があつた。

門　長　屋

既、牛鳴の木門及び物置は既記門長屋に接續され構造形式は北方の門長屋と同形式であつた。即ち通用門を界として上下二つの門長屋を持つた事になり、貴人或ひは客人は稀人門又は三列門より家人は通用門より、そして下男下婢の輩は牛鳴の木門より出入した事を示し、その近隣を壓した威容は正に36ケ村の觸頭を勤める身にふさわしいものであつたと云つて良い。構造は前記の如く海鼠漆喰塗の腰を持つた土藏造りの切妻造本瓦葺であつた。只既は棟下中央に界壁を持ち外壁は內庭及び道路に面して開放されたものらしい。

主　家

主家と覺しき建物は西湖の間とは鍵形に小玄關を持つた傳廊下で連絡されて居た。即ち棟は東西に通つて居た譯で道路側から見た正面を入母屋造りとし、反對の東妻を切妻造りとして居た。炊事場は建物の西半分にあつたらしく棟には煙出しを設け東方の居間との中間にミニワミの入口があつ

た。屋根は下家を葺下し壁は眞壁、腰板を竪張りとし內庭側の窓には總て格子が嵌められてあつた。

主家の西方炊事場に接して鍛葺の井戶を持つた流し場或ひは飼料場と思はれる棟があり、その妻の部分から廊下で通用門に連絡出來る樣になつて居た。即ち三列門を這入れば前記稀人門と西湖の間を繋ぐ傳廊下、西湖の間、小玄關及一群の住居用の建物で圍繞された完全な內庭に出る事になる譯である。そして三列門よりの敷石は眞直ぐに西湖の間の大玄關に續き主家の「ニワ」へはその途中から分れた敷石により連絡されて居た。現在臺所の內玄關への敷石の屈折點あたりが即ち主家の「ニワ」の入口に當つて居た樣である。

辰巳の屋

主家の東南寄りに辰巳の屋があつた。主家から巽に位した爲の名であらうか此の一棟のみが珍らしく二階建になつて居る。集會用の建物であつたか或ひは使用人部屋であつたかと考へられる。間中の下家を持ち瓦葺の入母屋造りで階上を大壁とし下家も眞壁としてゐた。

龜の間、柳桃の間

西湖の間と主家の略中間當りの西方に內玄關を持つた龜の間と柳桃の間があつた。柳桃の間からは次項の「うつのや」の前庭及び西湖の間背面の庭園を眺める樣になつて居り、北及び西の二面を廻緣とした恐らく離家でなかつたかと想像される建物である。屋根は瓦の鍛葺だつたらしい。

うつのや

うつのやとだけでは字義は判然しないが茶席である。入母屋造の藁葺で珍らしいのは棟の兩端に置千木を上げた事で餘り類例を見ない形式と言へる。織部眞傳の茶室と言はれ　うつのや今御定もん安ズ　古田氏より附ス飛州へ宛名傳書藏す

と圖に記入あり、北方の庭園に面して圓形の下地窓を開けて居る。玄關か水遣か又何等かの部屋を南方へ鍵家形に取つた樣であるが圖では判然しない。

養壽庵

當初の養壽庵は即ち現在有名な圓珠庵であるが伏屋重賢が契沖にその寓庵を贈つた跡に第二の養壽庵を建て之れを契沖寓菴と稱した、以て契沖に對する追慕と尊敬を知る事が出來る。

建物は辰巳の屋の更に東南方に位しその中間西方に位した裏の井と飛石傳ひと連絡して居た。周圍には鬱然たる植込を持ち、前記住宅群とは一際距つた仙境にも紛ふ閑靜な雰圍氣に包まれて居た。

第二の養壽庵は現在の圓珠庵とは少しく趣を異にし屋根は藁葺の切妻造で只後記菊の間と覺しき裏の井への出入口の部分即ち西方の屋根の南半分を缺き込んだ處を瓦葺にしてあり、それに隣して板葺の石置屋根の下家を設けた。此の下家は入口を開放して居り、主家北方の妻から葺下ろした部分、恐らく燒火の間或ひは窓の間ではなかつたかと思はれる部屋に接續して居るので內玄關又は「ニク」に相當する處になつてゐたのであらう。北側には前記の樣に瓦葺の下家を葺下ろし上方主家の妻の部分に煙出しを設けたあたり本家兩妻の流れに沿うて巾二三枚程瓦を葺上げて風切りにした等と共に野趣愛すべきものがある。

建物の間取は殘念ながら不明であるが左記に依り蓮の間、東坡の間、櫻の間、菊の間、燒火の間窓の間等のあつた事が明らかである。

菴を養壽菴といふ。佛檀本尊は大日如來脇士地藏卷尾田觀音宗祖弘法大師。蓮の間は佛檀に續く五色の蓮花翡翠を畫蓮に蜻蛉の一軸は明の延振畫。東坡の間は居士竹林に遊ぶ圖床の二行物東坡の墨跡。櫻間櫻古材の畫。菊の間は玄關也岩に七菊の畫。燒火の間窓の間などいふ出居の間也。

契沖の常住座臥の狀は察すべくもないが以てその風流は見るべきであらう。泉州志跋云余嘗壯歲寓泉南山村八九年所矣初居久井後應伏屋重賢之請移于池田鄉（村名万長）の此の寓菴も惜しむべし今は流亡して一木一草を止めず背景をなした樹林も畠地と化してその面影も見られない。

梅の屋

連俳檀林派の鼻祖西山宗因が延寶二年遊宿した梅の屋は養壽庵の東南一段低く當時は梅林の中にあつた。即ち伏屋邸の巽の隅にあり背後は槇尾川の竹林に望んでゐた。

建物は藁葺の入母屋造だつたらしいが之れも養壽庵同樣梅林と共に畠地に化し規模は知るよしも

ない。然し茶席か小さな離家程度のものだつたらしい事は左の記事に依つて窺ふ事が出來よう。

梅の屋西山梅翁遊宿す、歌仙三幅安ス、柿本畫像ハ信實朝臣、住吉のは豊太閤の畫詠、梅に鳥居の圖ハ豊臣俊長、天神經ふせやの歌あり

竹　の　屋

前記梅の屋そして松の屋に對して竹の屋もあつたが前二者に反し之れは純然たる竹置場であつてそれも周圍開放の假設的なものであつた。

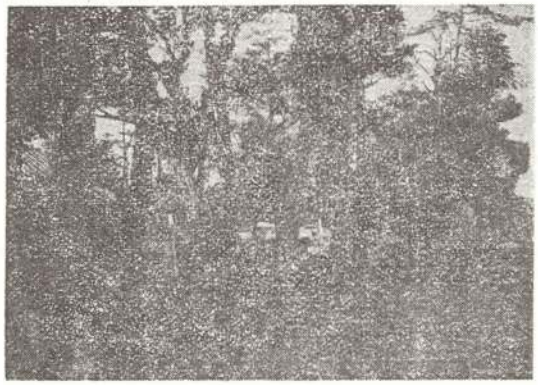
其　の　他

土藏、物置、井戸屋形等は猶數棟あつたが建築學的には特に記載する程のものではなかつたと思はれる。

以上各建物共その平面を紹介する事の出來ないのは殘念であるが既記の如く止むを得ない處である。何れにしても廣大な敷地と庭園そして數十の棟々は正に一連の繪卷物を構成してゐたとも云ひ得べく、然も住居用建物の規模に比し離家或ひは數寄屋の數多きは即ち伏屋重賢の趣味を語ると謂ふべく、閑靜を極めた周圍の風物と共に好古の文藝道場を形成して居たと見る事が出來る。

庭　　園

藤村庸軒作同名風外庵補作と言はれる庭園も今は荒廢して見る陰もないが猶その規模の一端は保存せられてゐる。建物を說けば當然その庭園の一班にでも言及するの必要があらう。「第6圖參照」



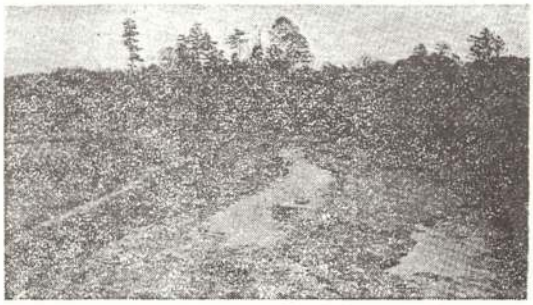
第6圖　庭　　園

庭園は前にも記した樣に稀人門と西湖の間を繋ぐ傳廊下より北の方と柳桃の間、うつのやの北方共に槇尾川岸迄に築かれ、敷地面積に比較し割合に小さかつた。此の內後者が全然荒廢して面影を止めぬに反し前者は比較的よく保存せられ五百九十餘石と稱せられた庭石も池を中心とした各種布石や的場と共に良く舊觀をしのばせるものがある。

庭の飛石は現土塀の中斷した處即ち往時傳廊下に設けられたと想像される中門のあたりから初まり、一旦西湖の間の廊下上り口沓石に至り、此處から北へ槇尾川岸に沿ふて東北隅稻荷社に至つて反轉し、南方傳廊下の稀人門をやゝ遠入つた邊りで終り、途中枝道を出し「チゴノ井」の傍にある無明の橋に至つて居る。池は右庭石に圍繞せられた部分の略中央に一ケ所「チゴノ井」の傍に一ケ所掘られ兩者共足跡形のもので名も前者を右足後者を左足と呼ばれた樣である。然し「チゴノ井」が弘法大師にからんだ稚兒蘇生の傳說を有した事も殆んど忘れられた如く、此の珍らしい足跡形の池も現實の都大阪の近郊にふさはしく別段巨人傳說發生の模樣もなく、後者はその跡を止めず前者は矩形の池に掘り變へられて今日に至つて居る。

池の周圍の松楠も今は相當の大木となり、其の間に點々燈籠、寶篋印塔を配して居る。そして寶篋印塔の當りには柳を植込んで布引の瀧に見立てた樣であるが此の景は現在見られない。

西湖の間と川岸との間の狹い地域には石疊が設けられ、此の石疊から出た飛石は西湖の間の便所から出た塀の潜門を抜けて裏庭園即ち柳桃の間及び「うつのや」の庭園に出る樣になつて居た。裏庭園には水精揚梅の大樹や「トラゴの松」があつたと言ふが今はどちらもない。たゞ往時名もなかつた二三の松や楠が川岸の可東竹の林から亭々と聳へてゐるのみである。（第7圖參照）



第7圖　元伏見邸背景　叢林は可東竹

右槇尾川岸の竹は可東竹と呼ばれて古來著名のもの延曆の昔から折にふれては褒賞の對稱となり現時もすなほなる子を產すと言はれる。當然契沖

にも印象深きものがあつたと見え

池田川のほとりふせ屋某が作りおける庵をかりて住けるに其邊大竹おほぞらに簇ゆるもの多きを見てよめる。

千尋なる岸根に生るむら竹を庵のまがき
すかしてぞ見る

と歌ひ更に又

竹の子は人の心ににるものか
このみて垣の外にいづるは

結　　語

以上で元伏屋邸に就ての概観を終つたが、之れを要するに古來の豪族池田氏の末流と稱する伏屋氏も、豊臣秀吉の臣伏屋飛驒守一安の孫重賢通稱長左衛門に至つて果然豪奢を極め、特に文雅の志厚かつた彼を上方の文人墨客にして訪はぬ者なき有様であつた。

現在の遺構は即ち當時のものにして西湖の間の壁畫は德川初期の畫家雲谷等與の作であり、作庭家藤村庸軒も重賢とは同時代の人である。即ち壞滅したその建物の由緒の凡てが同時代の文人にその上限を占められて居る事より考へてもその住居の整美完成は彼重賢によつてなされたと考へても差支へあるまい。然も重賢歿後百年畫家桃溪に依り殘された圖會に依り往時の盛觀を偲び得るはむしろ僥倖とも云ふべく、今に殘る門長屋及び西湖の間は之れを民家建築史上より見るも正に三百年の星霜を經た貴重な遺構と云ふべきであらう。

（昭18.3.15）

（筆者　池田谷氏は池田谷建築事務所主
宮崎　氏は池田谷建築事務所員）

65頁より續く

翌朝4時起床して、一行は皇居を遙拜、つづいて最後のコースへの注意等打ち合せ約半時間早朝錬成體操を行ふ。4時30分、激流の淀む瀧つぼに心身を清め、いたむやうな水深にみそぎの修養をとる。未だほの暗い5時10分思ひ出多い桃ノ木を去つて又知らぬ秘境の探勝の旅、行けば大杉溪流二つに別れて再び神秘境の中から瀧・々々の現出へ。——

× × ×

修錬道場を後に……

明るい近代的な風貌の臺高山脈——、悠久無邊の原生林と生ひ繁る所、4日間の修錬を終へてこゝに有意義な感懐の覺ゆるまゝに私達は無事大阪に歸着した。

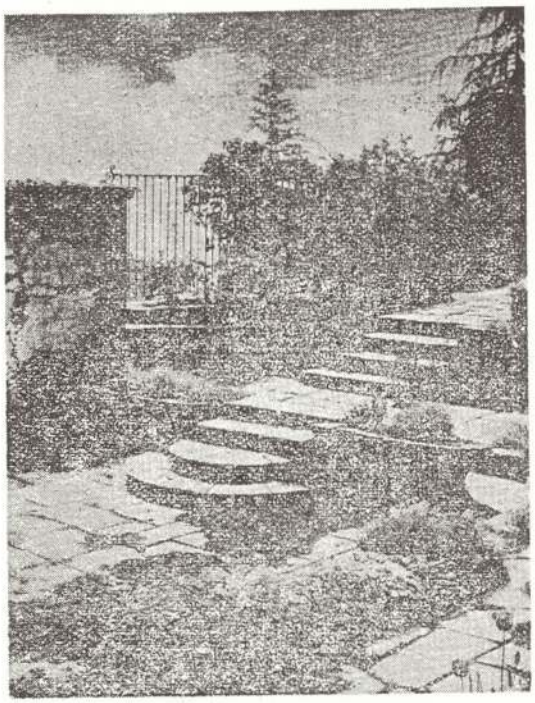
千古人跡未踏——このやうに自然的要素に惠まれたこの地に、又豊富な歴史と人生のあることを知らねばならない。古くは神武の御代から近世に到る迄吾國歴史を飾り、その人生は自然との完全な融合に依つて民俗土俗の貴重な資料として興味深い風俗習慣を遺してゐる。——自然と歴史と人生——この三融合を探り、しかも錬成の根本道場として大阪近郊に現存する崇高な山脈のあることを誇示すると共に更に我々が自然の中に益々心身の錬磨に務めることを約束したい。

（筆者は大阪鐵道局建築士）

建築と造園 (2)

—特に造園圖學に就て—

白川泰



—造園の形式・樣式及流派—

形式……繪畫に於ける風景畫と人物畫との場合にも似、古今東西の造園を見る場合、そこには色々のものが存在し、その構成形態は千差萬別なりとは雖も、此等をその成作の場所・年代・作者とは無關係に、一定の類型に纏め得るものであり、この類型を造園の形式 Form (英); Form (獨). と稱せられ、風景式と建築式とに二大別し得るものである。而して、此の二つの形式のものは、同一の國に於て、同じ時代に於てさへ並行して行はれるのは勿論のこと、同一作者の手によりても双方共に造られるものである。

i 風景式とは……**自然式・不整形式・不規則式** Landscape-form, Natural-form, Irregular-form Informal-form (英); Landschaftliche Garten. gestaltung, Gartengestaltung nach Naturgedanken (獨). とも稱せられ、自然の風景をそのまゝ模倣するとか、或はそれを理想化して實際の材料を以て再現するとか、象徴化したものを指し、スキス本來の造園は自然の風景を模倣したものであり、日本本來の造園はそれを理想化し、一つの藝術化されたものである。象徴化されたものは日本造園に於てのみ見られ得るものにして、岩石を瀧、白砂を海、と見立てたもの等それである。

ii 建築式とは……**幾何學式・整形式・規則式** Architectural-form, Geometrical-form, Regular-form, Formal-form (英); Architektonische Gartengestaltung, Gartengestaltung nach Baugedanken (獨). とも稱せられ、自然の風景とは無關係に建築的乃至は圖案の如く取扱はれたものを指し、19世紀より20世紀に亘り英・獨・佛・米其の他の國々を風靡せし近代式 Modern-style と云つたものはこれに屬するものである。

樣式……造園は、それを創造し、發達せしめたる國及時代により、それぞれの特長を形成するものにして、その特長を造園の樣式 Style (英); Stil (獨) と名付けられ、その創造・發達に關係ある國名・人名・主權者名を用ひ、更に、時代名・形式名を附加されることもある。

國名に依るもの…… French-style, Italian-style, English-style, Chinese-style, Japanese-style, Spanish-style 等

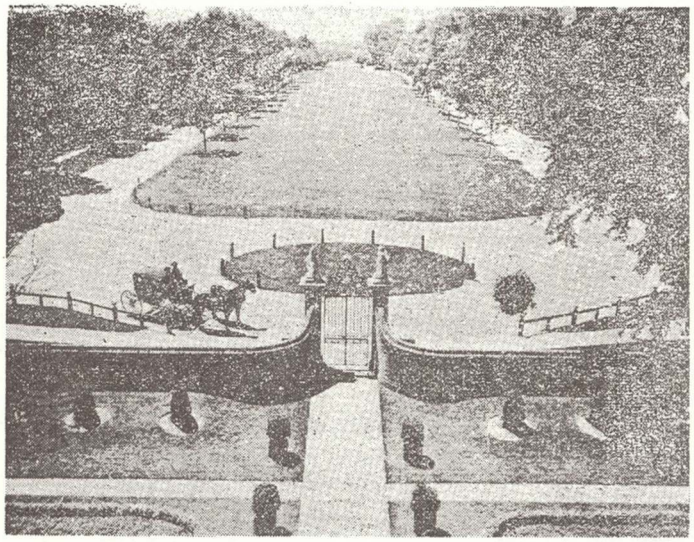
人名に依るもの…… Le Nôtre's style 等

主權者名に依るもの…… Louis XIV style 等

時代名に依るもの…… Italian Renaissance style 等

形式名に依るもの…… Modern German Formal style 等

流派……同一の造園樣式に屬するものも、特に天才が出現したりと云つたが如き場合、そこに一つの特色が發揮され來るものであり、かゝる場合これを流派 School (英); Schule (獨). と稱せられ、遠州流とか遠州派とか云つたが如きものがそれであり、それはその子孫又は門弟により縱に受け傳へられるものにして、これが横に廣がれる場合、一つの樣式に發展するものである。

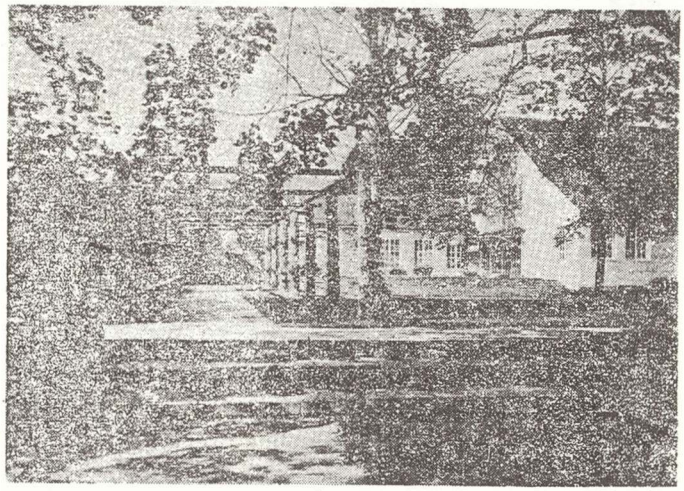


技巧(＝手法)……例へば、一つの風景式にてもその作り方により、同様な樹木と岩石と云つた材料を與へられたりと雖も、その取扱方は人によりそれを異にするものにして、これを手法Treatment (英); Kunstfertigkeit (獨). 又は技巧 Technic (英); Technik (獨). の異と稱されるものである。

一般に、造園の中には、全然人爲によるものと、その地貌風景が主として天然のまゝによるものとあることよりして前者を**人工造園**、後者を**自然造園**とも稱せられ、人工造園中には本來鑑賞以外の目的の爲に築造されるものもあり、その悉くが藝術品とはなり得ざるも、人間が美意識を以て造る以上、それには他の美

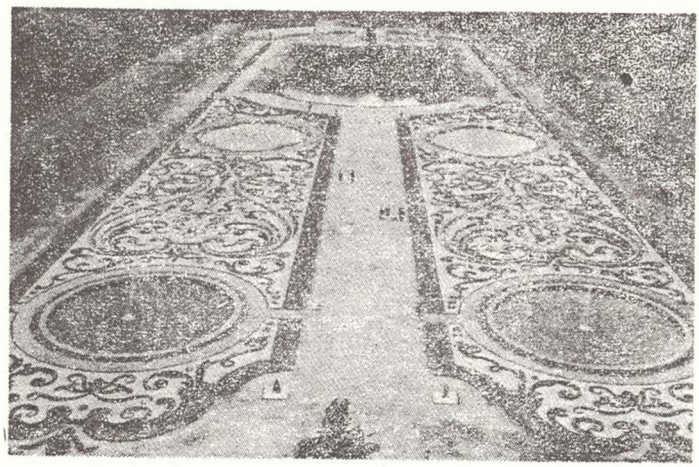
* 術・工藝品に見られ得る如き 様式の區別を考へ得るものにして、自然の觀相に準據するところの自然造園には様式なるものは考へ得られぬところなりとは雖も、自然風景に就いて、地學上・氣候學上等よりの觀察を綜合なし、風景形式にも區別を附與することは可能である。

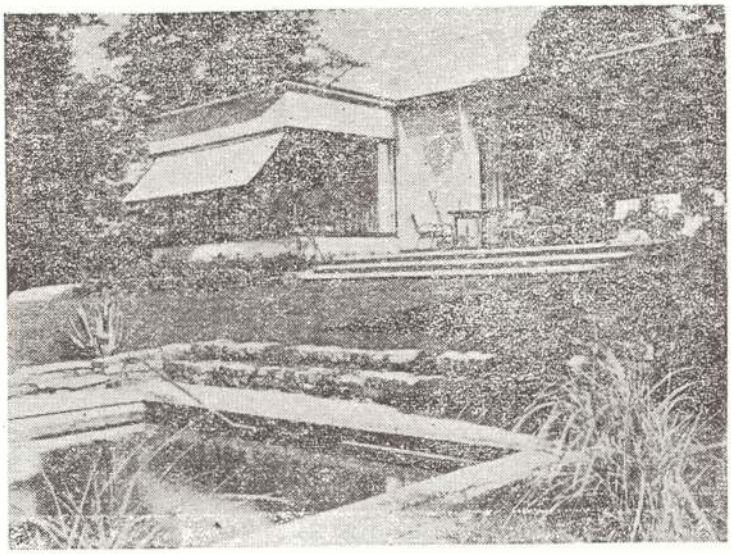
一造園家の理想がその作品に具體化されたる場合、その人の造園にその人の固有な仕上げが常に發見せられ、その作者の作品に共通な特徴が見られ、個性が發露せられるものである。この一造園家の個性に基く藝術的表現が即ち技巧又は手法と稱されるところのものにして、その勢力ある個人の技巧又は手法が、その周圍の人々を感化し、一園の造園家の



間に共通の様式が認められるに至りて流派に發展し、勢力ある流派が良く一地方一時代を感化なし、地方的又は時代的な様式を構成するに至るものにして、此種の一大様式が成立するためには、多くはその環境としての自然的條件乃至は社會的條件の共通なることを要し、その大成には可成りの年月を經過するものにしてその様式の完成せられし事實は歷史的な事實であることよりして、此種様式を**歷史的様式** Historic style とも稱せられるのである。

一國の様式は上下各時代を通じての脈絡を有するものにして、一國の様式を一括して一様式を樹立することも亦可能であり、その時代的の變





遷の跡を辿る時、一國の樣式にも消長盛衰の跡が窺はれ、一國の造園史は樣式の發展史なりと云ふことにもなるものである。從つて、例へば、一般にフランス式 French style と稱せられる所のものも、その創始者に因みル・ノートル式 Le Nôtre's style と稱せられ、それを擁護せし、主權者に從ふ場合 Louis XIV style となり、時代をとつて稱せられる時には17C French style ともなるものにして、更に、その外觀上よりの特徴に依る時には Grand style とも稱せられるものの如きである。

而して、各國の造園樣式を支配する因子として主要なるものは左下の表に示す如きものが擧げられ得る。*

各國の造園樣式を支配する因子

Ⅰ 自然的因子	Ⅱ 人文的因子
i 地理・地形・地質(水)	i 民族・宗教
ii 動 植 物	ii 政治・社會
iii 氣 候	iii 文學・美學・建築・工藝・科學 等
等	

* のである。次いで、各國に於ける造園の主要樣式に就て見る時、右表に示す如きものが擧げられ得るのである。

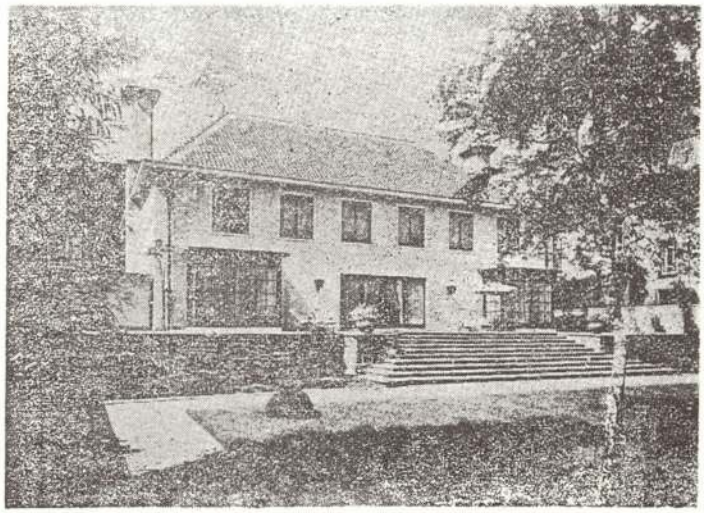
造園の各國に於ける主要樣式

一般の呼稱	各樣式の大成せられたる時代又は特徴を附しての呼稱	主として行はれたる地方	主として行はれたる時代
Italian-style イタリー式	Italian Renaissance style イタリー復興式	伊太利	15～17C
Spanish-style スペイン式	Patio style パチオ式	西班牙	14～17C
French-style フランス式	French 17 C style フランス17世紀式	佛蘭西其他歐洲各國	17C
English-style イギリス式	English landscape style イギリス風景式	英佛獨米其他歐洲各國	18～19C
Modern-style 近代式	Modern architectural style 近代建築式	英獨佛米其他	19～20C
Chinese-style 支那式	Chinese landscape style 支那風景式	支那	7～18C
Japanese-syle 日本式	Picturesque landscape style 繪畫的風景式	日本	9～12C

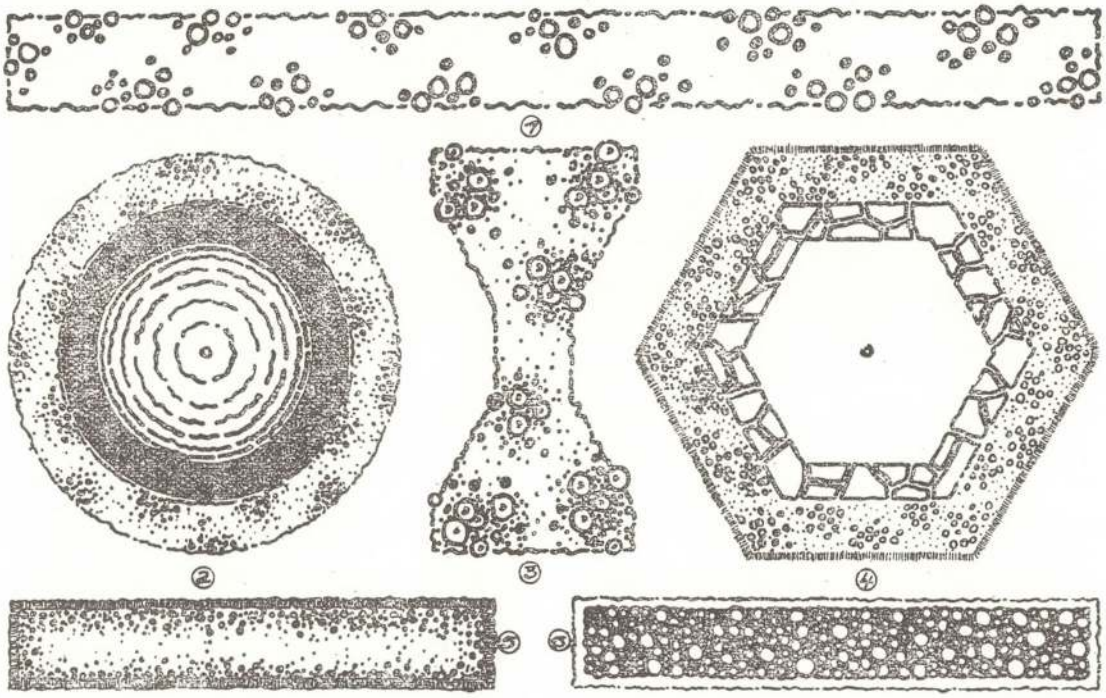
—造園圖學(2)—

Ⅷは**花壇と水溜との表示法**にして、—1乃至6—は灌木・花卉或は其の他の花壇用植物を配せる、花壇を表示するものにして、—2—は周圍に花壇を繞ぐらせる圓形の水溜にして、この場合水溜の壁體を白きまゝとなし、水面の波狀線を省略することも一つの方法である。—4—は水溜擁壁の天端の鐵平石又は丹波石等の類にて蔽はれたるものにして、その花壇の周圍は、ツゲの類により緣付けられたものであり、—5及び6—は共に小さな灌木其の他のものの密植により緣付けされたる花壇を表示せるものである。

Ⅸは**薔薇園と水溜との表示法**にして、—1—は芝生に於ける蔓性バラの柱狀に纏へるものを示し、—2—は蔓性バラの纏へるアーチにして、—3—は叢性バラを周圍に配せる角形水溜に



VII. Blumenbeete, Rasenbeete.



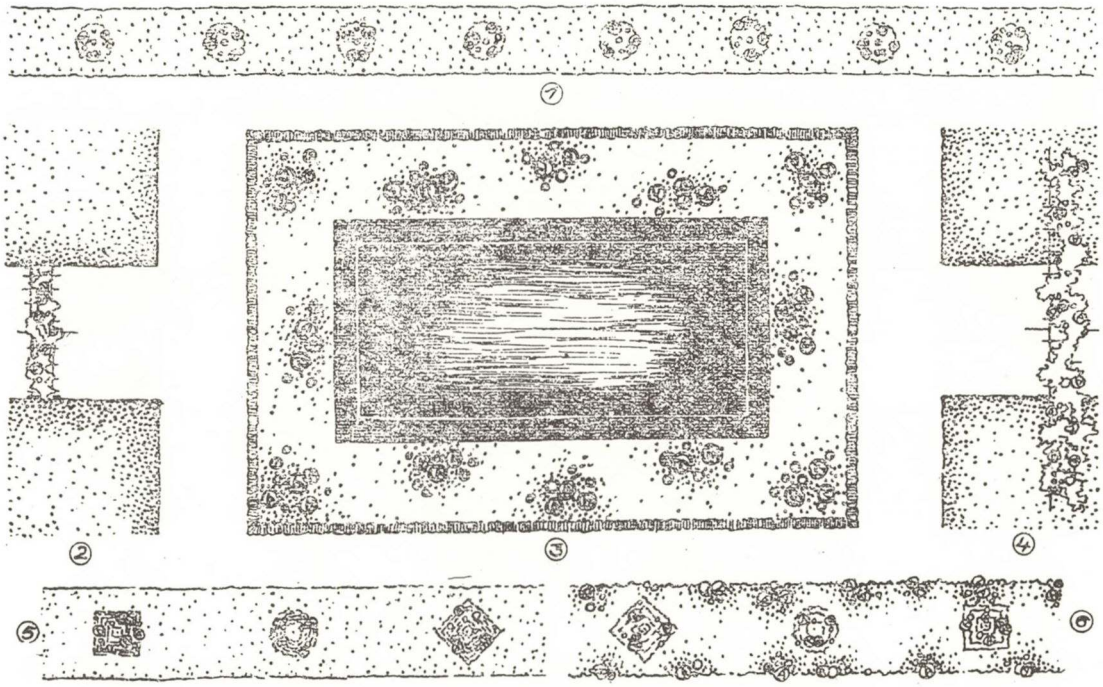
して、水面の表現には水平なる平行狀線群を用ひこの水面の表現法は鉢の形に拘泥することなく、常に線を平面形の基線に平行に引かれねばならぬ。—4—は一本の道を通ずるバラを纏へるアーチを有する綠壁を示し、—5—は芝生におけるバラを纏へる樹檣角錐及び樹檣圓錐を現はし、—6—は叢性バラを以て下草となせる同上のものを表示なすものである。

Xは**乾積石壁・敷石道と橋との表示法**にして、—1—は目地植栽を有せぬ亂石乾積壁にして—2—は目地植栽を有する亂石乾積壁を示し、この場合、凡ての目地を完全には記載され得ざるにより、部分的には外へ閉鎖する如く圖示の如き描出に注意されなければならぬ。—3—は亂石張敷石道を、—4—は整石亂張敷石道を示し、—5—は芝生における自然石飛石傳ひを、—6—は芝生における整石亂張傳ひを表はし、—7—は石又はコンクリート造橋を、—8—はアーチ形の木造橋を表示するものである。

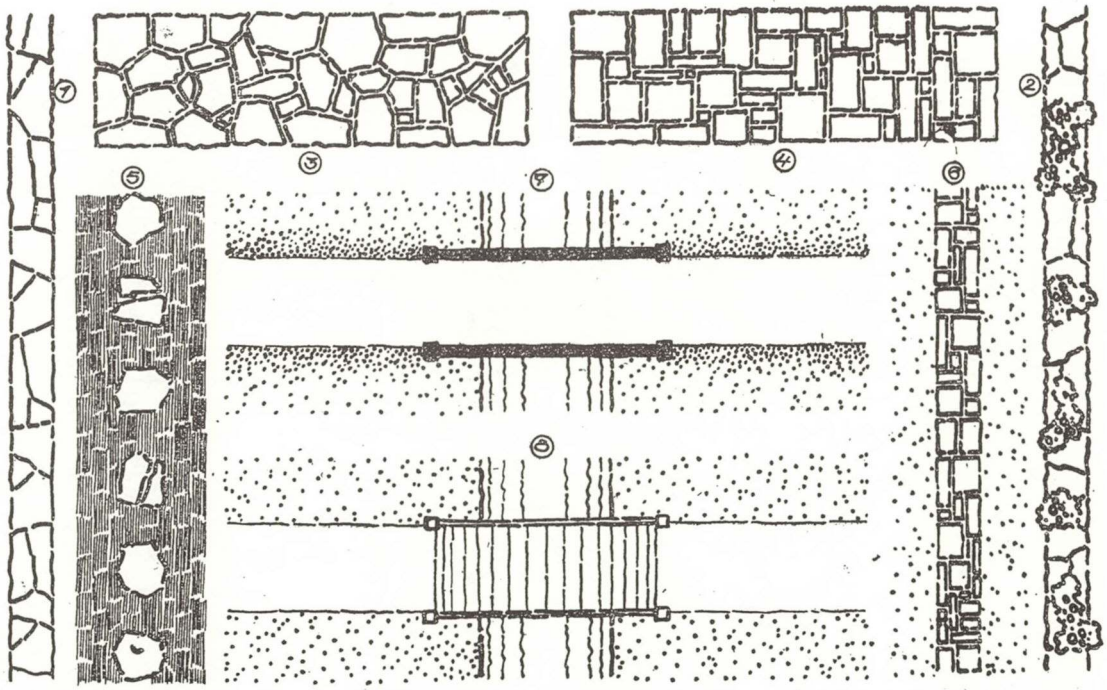
Xに於て、特に次の點に注意されなければならぬ。即ち、亂石乾積壁の目地表示は單純となし、亂石張敷石道の目地表示は、一見して別々に識別しうる樣圖示の如く表示されなければならぬことである。

XIは**擁壁・階段と傾斜面との表示法**にして、—1—は芝生から露壇へのよく手の入れられたる階段を示すものにして、階段及び擁壁は非常に手の入れられたる石又はコンクリート造のものを表示するものである。此處に注意を要することは、小さな階段の場合、平面圖に於て方向矢の向を誤ることであり、矢の尖頭は常に階上に向つて示指する樣なされなければならぬ。—2—は柱形を有する水平又は傾斜せる袖を備ふる階段を示し、段々の表現に當りては—1—及び—2—の場合の如く階段面を白きまゝとなす時、最上階の最終端邊は點線を以て表示なし、それに依り常に適確なる段數を了解し得られるものである。明確なる芝生の傾斜面の表示のためには、芝生面を白きまゝとなし置くか或は中度の點々法により描出されるべきであり、そうすることに依り、傾斜表示線は明確に保

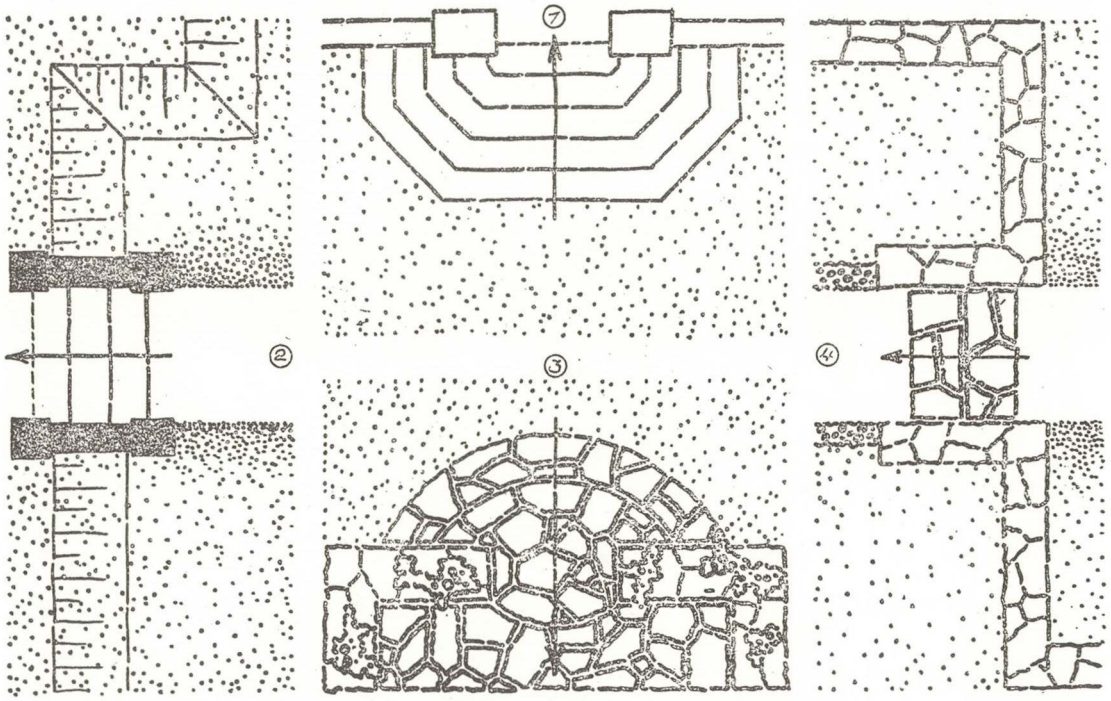
V. Rasen, Wasserbecken.



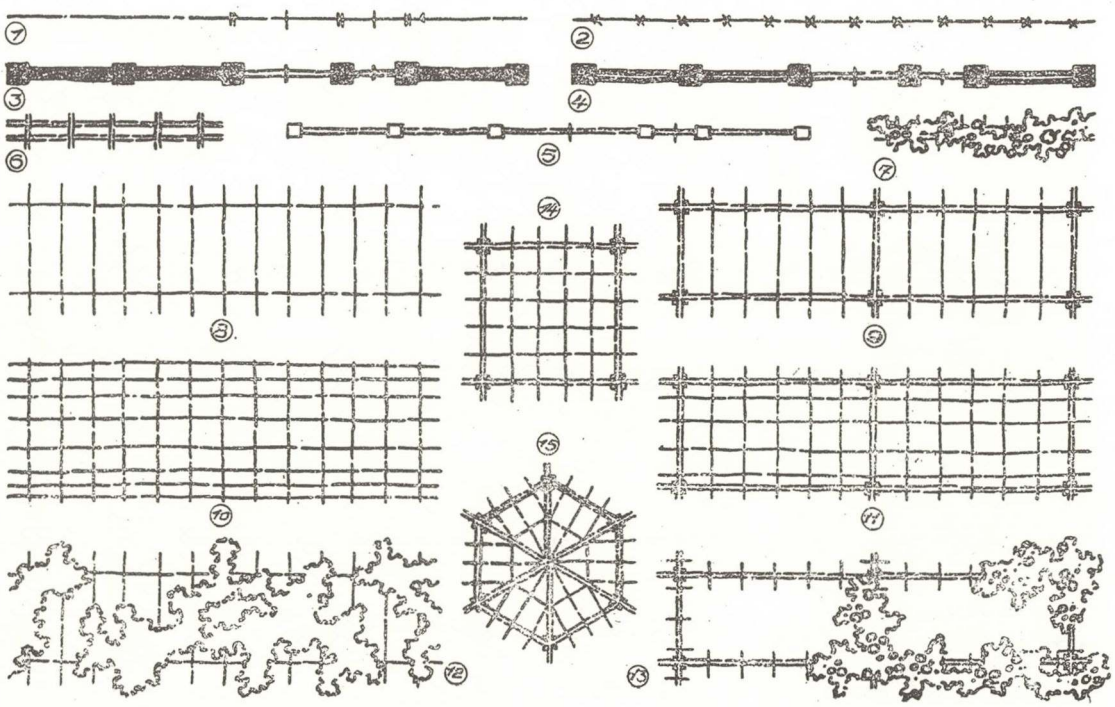
X. Trockenmauern, Plattenwege, Brücken.



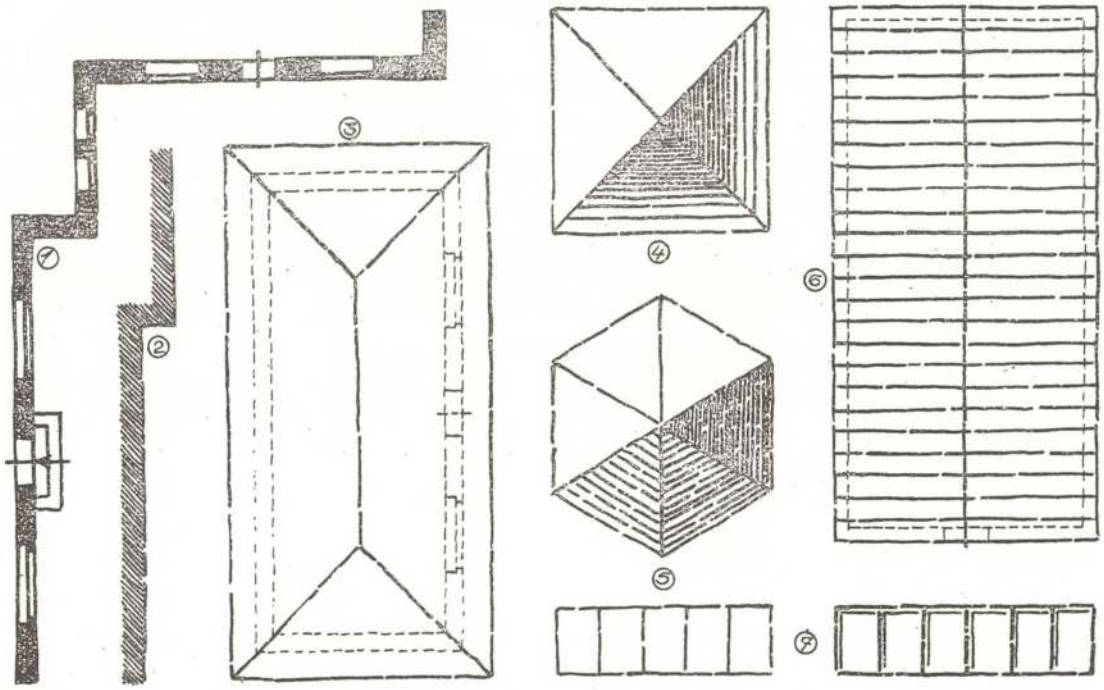
XI. Stützmauern, Treppen, Böschungen.



XII. Einfriedigungen, Pergolen, Laubengänge, Lauben.



XIII Baulichkeiten, Gartenhäuschen, Gewächshaus, Aquarienhäuser.

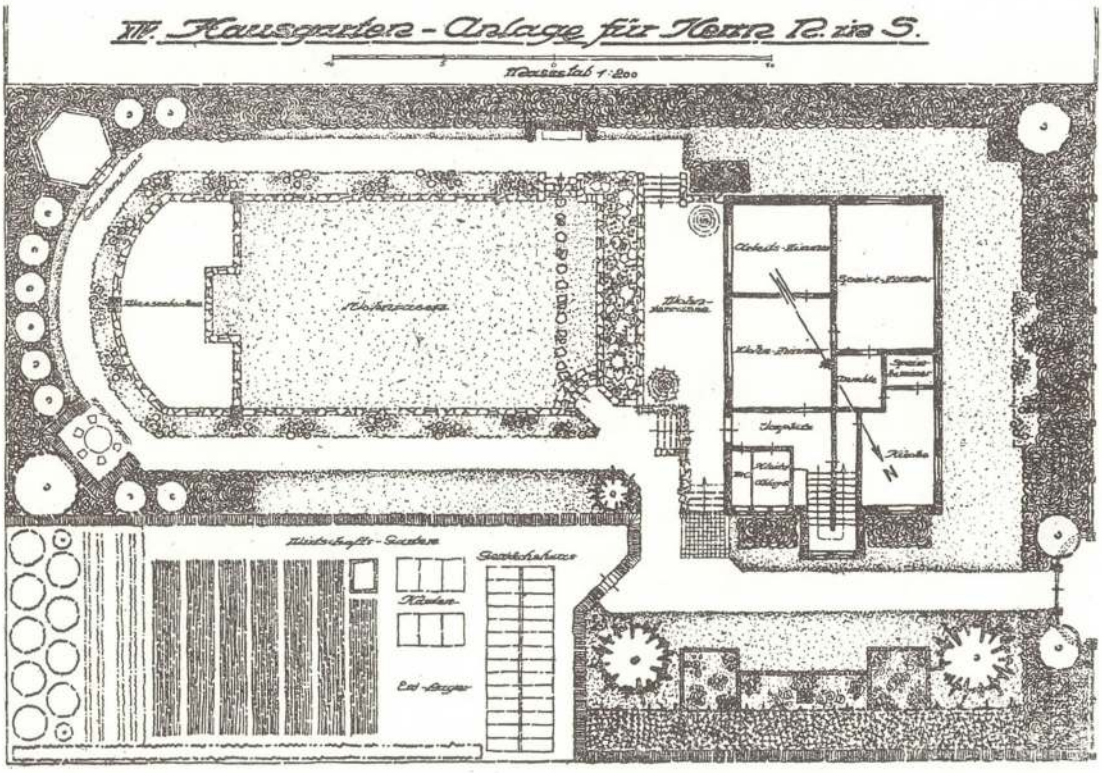


持され得るものであり、Iの—5—の如き條線法を採用する場合には不明確となることはまぬがれ難いものである。尙、傾斜表示線の長さは、傾斜巾の¼と¾或は⅓と⅔に達するものを以て圖示の如く記載されるべきであり、而かもそれは傾斜の上端邊より出されねばならぬものにして、傾斜表示線の長さが短かき場合又は傾斜の下端邊或は稜邊に迄發達せしめたる場合には、その一目瞭然たることを缺く恨なしとはせざるものである。—3—は亂石乾積の擁壁と亂石張りの階段とを表示なすものにして、露段の一部に存在するものであり、—4—は袖壁が露壇の手摺に續ける亂石張の階段を表示なすものである。

XIIは**柵・綠廊・綠壁と綠亭との表示法**にして、—1—は極く小さな縮尺に向く柵の一般表示法にして、—2—は網狀線の編物、或は有棘鐵線より成る柵を示し、—3—は入口と小門とを備ふる〻柱を有する石造の塀にして、—4—は石造の土臺と柱とを有する、鐵又は木造の矢來の類よりなる塀を表はし、—5—は木又はコンクリート造の角柱を有する木造の塀にして、—6及び7—は綠壁を表示なし、—7—は蔓性植物を纏へるものを示し、—8及び9—はパーゴラの類の綠廊を、—10及び11—はアーチ形の綠廊を表示なすものにして、—12及び13—は蔓性植物を纏へる變り型の綠廊を—14及び15—は綠亭を表示せるものである。

尙、—7—12—13—の場合、蔓性植物の纏へる樣を表はすものであるが、然し乍ら、木組が完全に了解され得る如く表示されなければならぬ點に注意されなければならぬ。

XIII は**建築物・温室と培養匣との表示法**にして—1—は縮尺の可成り大なる場合の住宅基礎平面の一部分を示し、—2—は簡單なる表現に於ける建築物基礎平面の一部分を表はすものにして、特に建築物の周廓の完全なる表現に適當なる表示法である。—3—は建築物の表現法にして、基礎と同時に屋根の形をも示し得るものである。—4及び5—は建築物特に園舍に類する各種物體の形狀の効果的な表示法である。同一平面圖に於ては建築物の表示には出來得る限り統一されたる描出法





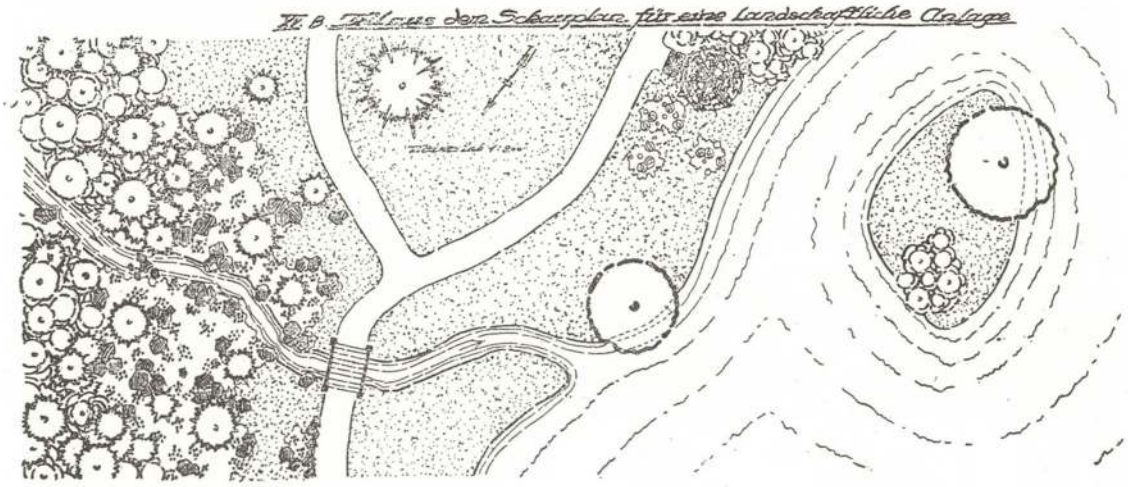
が採用されなければならぬものである。—6—は火室及び作業室を有せぬ溫室の基礎を、—7—は溫床等の培養匣に對する表示法を示すものである。

XIV は**庭園施設の平面表示法**にして、この表示には出來得る限り多くの物象の表現を必要とし、且、平面圖の完全なる詳細を示すに役立つ一線により切斷されたものでなければならぬ。從つて、本平面圖には、彫塑・庭園家具・石床・灌水池及び蔬菜床等に對する表示がもたらされ、特に樹冠の地上に投ずる限界線を表はし、樹冠の下の多くの施設に對する表面は點線にて表示されなければならぬ。

XV A は**庭園の縱斷面と立面圖との表示法**にして、この圖は XIV に示す庭園平面圖の縱斷面と

XIV 圖に於ける用語說明

Arbeits-Zimmer	書齋
Wohn-Zimmer	居間
Vorplatz	玄關
W. C.	便所
Kleider Ablage	衣服室
Speise-Zimmer	食堂
Anrichte	調膳室
Speise Kammer	食品庫
Küche	臺所
Wohn-Terrasse	露壇
Wohn-Rasen	芝生
Wasser-becken	水溜
Garten-haus	園舍
Sitz Platz	腰掛
Wirtschafts-Garten	菜園
Gewächs-Haus	溫室
Kästen	培養匣
Erd-Lager	土置場



立面圖とを示すものにして、此の種表示圖は、技術的斷面圖に對して、下繪の平面圖に從ひ、フリーハンドで以て完全に引出され得るものであり、平面圖に對し一層突き進んだ直觀的說明をなすに役立つものである。斷面の位置は平面圖上に薄墨色の破線を以て示されなければならぬものであるが、此處に於ては、薄墨色を以て印刷することの煩を避け、又、黑色を以てしては平面圖に目障りとなるおそれなしとはせざる故、故意に之を省略することとなしたのではあるが、一般に、平面圖上の斷面の位置に對しては、その相當する位置を破線の斷面線により示され、それには例へば斷面A—B，斷面 C—D 等の文字による記號が附されなければならぬものである。然し乍ら、高さに對する寸法の詳細は別に技術的斷面圖に依らなければならぬ。

XV Bは**風景園設計の平面圖の一部の表示**にして、本圖は地理的形態の設計の詳細に、多數の手法の應用をこなしたものであり、特に、水と石との表示法を自由な形に於て示された點に注目されなければならぬものである。

× × ×

以上述べたる所を以て、造園製圖に於ける一通りの庭園要素に就き、インキングをなす場合の平面圖に對する統一的表示法を網羅したのであるが、吾人はその操作を設計の表示に忠實ならしむることによつてのみ、常に各種物象の表示物を明確にもたらし得るものである。

併して、素人の爲には明確なる設計圖を畫いて說明されなければならぬのは勿論のこと、それがためには一目瞭然たることが必須條件であり、更に必要なる場合には、着色平面圖を作製することにより一層の了解が可能となるものである。ことをインキングに依る造園製圖法紹介の最後に申し添へ、尙ほ、繰り返して、造園製圖を建築平面圖に完備されれば計畫上・利用上、敷地と建築物との有機的一體としての完成を明瞭且つ可能ならしめ、建築平面圖をして一層完全・美化し得るものなることを强調して本項を終るものである。

（未完）（18. 2. 10）

（筆者は　大阪市役所公園課技師）



自然と鍛錬

辰巳孝雄

―私の日記から―

――都塵を離れてそうした自然鑑賞への跋渉は同時に鍛錬への目的をも兼ねることにもなる。我々の近郊には無數の鍛錬道場があり、厚生施設が點在してゐる。こゝに貴重な紙面を借用して、「吉野群山登攀記」の一節を昨年の日記より拾つて見た。――

五色温泉と筏場

――淀んだ水深、そして妖怪な色素。それは恐怖にも似た深刻な激流であり神秘的な奔流であつた。――

吉野川の上流本澤川の渓谷を見下し乍ら、たどりついてからもう何時間にならうか？。道を失ひ雨に打たれ乍ら、山小屋のある岐路迄もどつたのは15時頃であつた。我々は途方に暮れて時雨につゝまれ乍ら暮色深めく自然の中に、いつの間にか深い眠りに落入つてしまつた。――それから。

我々の消息をたづねてくれたのは晝食をした時挨拶してゐつた山の人であり、その人こそ我々が永遠に忘れることの出來ぬ恩人となつたことは云ふ迄もなかつた。

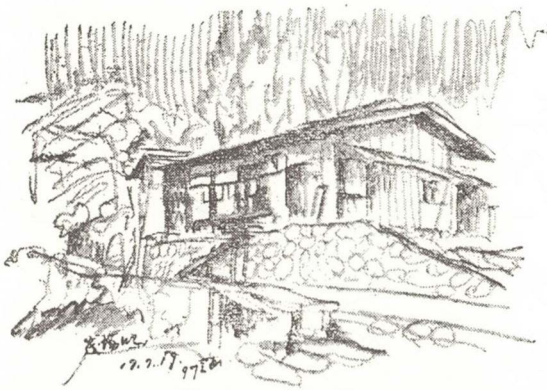
「そうですか、そりやひどい目に逢ひましたね、まあ今晩ゆつくり内で留つてお上りなさい。今晩は相當荒れませうから。」

筏場といふ所はその時から、あらゆる思出を殘した自然的な第二の故郷となつてしまつた。雨が少々晴れると我々は、そのまゝあの神秘峽のその水深に潜り込んだ。――「あッ冷たい！いたい様だ」眞白な激流のあとこうして淀んだ水面が恐怖と冷感に閉ざされ乍ら遊泳した事も、今から思へば不思議なものであつた。

うす暗い部屋にかへつて體を拭つてゐると間もなく、激しい「スコール」と共に天地をも轟かす雷公の訪がどつと迫つた。――ヒァーツ！我々はこの爆音をどうして聞き、そして眺め、又どうしてこの一瞬を過したかは氣付かなかつた。こんな山中に日本茶に混つて美味しい柏葉餅の御馳走に驚かされ乍ら夕食をとつたのは18時頃だつた。――(あの時あのまゝ登つてゐたらきつとこの「スコール」に逢つたにちがひない。そしてどうなつてゐたかもしれない。)――

雨は未だ止まない。古い紙張障子をあけると、深い軒の下に沓石であらう大きな自然石が二つ並んでゐる。深い軒先には洗濯物や野菜が吊してある。高に石垣をめぐらして建つてゐるこの家からは、あの激流も岩壁も見下すことが出來、下の道迄は丸太で作られた棧道である。新聞もない電燈もない。まして食事も不自由なこの山中に主人の云ふ山仕事一つが彼等の唯一の樂しみであり、自然への敢闘であるのであらう。

蒼然尙濃くなる頃、主人が「これも配給でね一月も持ちませんわ……」と云ひ乍ら「ランプ」に火を點じてくれた。部屋がボオーと明るくなつた。高い天井から吊された「ランプ」が狹い6疊の部屋の中央でゆらいでゐる。奥の4.5疊は茶ノ



筏場の民家

間であらうか、そこにはそうした設備もなく、晝は美しい自然の見へる窓一つがその部屋の光明でもある様に、今はピッタリと雨戸が閉ざせられてゐる。大きい納戸とその部屋に續く臺所が日あたりの良い南側に並んで、今我々が居る6疊は居間兼寢室であらう。

高い自然石の擁壁の上に床の高いこの民家が、自然のまゝに造られた素木には未だ光澤があり、美臭が鼻を突く。天井板もない小屋裏から雄大な梁が「ランプ」の火にゆれてゐる。

前の玄關であらう廣い土間には、山仕事の道具がきちんと並べてある。あの神秘峽の魚でも得やうといふのか釣道具が、天井から無數に吊してある。小さい女の子が我々が與へた「ドロップス」を樂しそうに押入脇にある佛檀に供へて行く姿も、常に決戰用意のある主人のいかめしい軍服や奉公袋が——それにかひがひしく日夜主人の助けを果す主婦のモンペ姿が、何一つ不足云はずこの生活に滿足し乍ら、自然とたゝかつてゐる人達と比べて、我々が豊富な都會の生活に何の不滿があるのであらう。こう思ふ瞬間、激しい反省が、汚感となつてひしひしと迫つて行つた。

一服のあと、主人をかこんで支那事變從軍記を聞く。約2時間餘、そうした夢にもない團樂の中に夜は深閑と迫つて行つた。

「靜かだ——」都塵をすてゝこの靜寂境への味覺と感激が益々深く刻みつけられて行くやうな憧憬と魅惑が胸を打つた。溫い床に入つてから主人は靜かに今日の戰果を傳へた。彼は毎朝早くから今日よじつて來た深山をぬけて街に出、配給物や用事をすませ、傳へた情報を讀みそしてこうした人里離れた山中にあらゆる時事の報道につとめてゐるのだ。

彼等は圓滿に幸福に、快樂な生活を送つてゐる。そして美しい人生へと正しく歩んで行くにちがひない事だらう。既に「ランプ」の火は消され皆な暗黑な沈默の中へとけ込んで行つた。

× × ×

單に雨露をしのぐに足るこの飾り氣もない生活の中からは、美しい自然の中に自然の住居が機能的に設備されてゐる。勾配のゆるやかな杉皮葺の屋根面には、小石が點在して敷かれてゐる。道路の下に共同便所が無格好に設けられて、三四戸しかないこの部落の人が共有するのであらうか、素材のまゝ架けられた小屋から浴場らしい煙突がぬつとつき出てゐる。主人はもうとつくに起きて魚をとつてゐた。快晴に惠まれ乍ら思ひ出多い筏場を去つたのは7時頃だつた。愈々大台ケ原を目ざして本澤川を沿つて五色に進む。既に太陽は頭上に輝やいてはゐたが、冷感が全身をおほふ。〃五色湯〃と立札のある所、彼の主人のいふ如く溫泉らしい溫泉もなく、家一軒すら見えない。只立札のそう示す名勝が、單に或一部分の岩の間から溫水が湧出してゐる丈だといふことであつた。地圖上には大きく溫泉の印もあり遠くからかけつけた人は、皆なこの偉大なしかも奇怪な溫泉旅館で一浴して行こう位は考へたことであらう。地圖の餘りに誇示したものに呵然とし乍ら、名勝の名勝をも見ずして再び激流のほとり杖をつく。

高原の露臺

筏場で入れた水もとつくに切れて、途中富士山にちなんだ「銀嶺水」に咽喉を潤ほす。既に1000米の深山には「ブナ」の立枯が無數に見え初め、厚生省が事業する「高山植物名稱札」の點在する所、よき登山者への指導であり、更に山への魅惑を加へる。「シダ」「トガ」……無數の大木が全山をおほひ汗ばんだ體を休めるに適當な設備のあることも、更に順調な登山への水呑場所である。先の銀嶺水や今又金明水が再び元氣を回復させてくれる。「サハラトガ」？〃あッあれは何だ？



大台ケ原青年寮

サラトガぢやないか！航空母艦「サラトガ」に似た大木がこんな珍談を興へてくれたりして、ぐんぐんとピッチを上げた。山又山のけはしい岩道も流れ落ちる汗の雫も拭ふ間もない早さには、附近の登山者を驚かせた事も無理もない話だ。ガラガラ道を上り切ると例の厚生省の立札が約5米毎に計畫されてゐる。もう一息！。やけつくやうな暑さは肌をさす。絶壁のやうな岩道のつくる所、おー〃大台〃だ！　時既に11時40分、我々は遂に目ざす大台を突破第1コースを終了したのである。

×　×　×

大台教會の神秘的な境内で晝食をとつてから、宿舍青年寮に休憩したのち、大台遊周コースをとつた。「一日に一度は必ず雨がありますよ」と注意されて先期知り合つた神戸だといふ老人ハイカーと出發。秀ケ嶽との別れ道を右にとつて笹籔のおひ繁る尾根を進んだ。枯れ果てた原始林が白く光つて見へる。時々あたりをくらますモヤが附近の視界を轉換させる。

大台の頂上にはこんな平原があらうかとも思はれるやうにお花畑が多く連なつて、時々唄ふウグヒスの聲も長閑にどこかこんな深山の頂上だと思へる位であつた。私達は大和川の堤でも歩いてゐる様な氣持で平坦な森林や笹籔の中を縫つて「牛石原」に出る。

昔神武天皇が御東征の砌、御通りになつたといふそこ牛石原の傳説から建立されたのであらう、天皇の銅像が聳立してゐる。〃撮影嚴禁〃とある今うらゝかにまひ廣がる小鳥の聲が幾千古傳へた歴史の上に、今日、尚この御姿を拜し當時の天皇御東征の模様がこゝ手石原の枯すゝきにも歴史的な幻想がひしひしと迫つて行く。平垣地を過ぎて大鳥居に出る。途上正に絶壁の聳立する所そこは大蛇嵓といふ。西側と南側凡そ七八百町歩といふ臺地の形成する所、中ノ瀧、千石嵓、大蛇嵓の絶壁を現出し、更に緩傾斜の臺地には多くの丘陵・溪流・平原があり、この天上樂園に憩つて駒鳥やうぐひす、時鳥はては名も知らぬ小鳥の合奏こそ忽ち羽化登仙の心境を思はしめる。

大蛇の岩頭、千石の岩壁、相對立して究る所、中・西・東の瀧の溪流長蛇をなす。千石嵓に佇むとモヤおほひ來て寸前をも見ることが出來ない。「左惡場・右へ……（石ヲ投下スレバ10秒ニシテ地下ニ達ス）とある。左惡場の危險をかへりみず、我々は壯觀に打たれて幾千米の岩底を望む、友が石を投げてから約8秒、「コツン」といふ音が聞へる。西か東か互に方向もわからない長蛇の流れが入道雲のやうな綠林から白い線をのこしてゐる。壯觀といはうか豪壯といはうか筆舌に盡せない迄の光景が幾年たつても忘れることの出來ないものが今尚この私の腦裡に深く刻みつけてゐる。

×　×　×

關急が設計したのであらう擴大な大臺高原に聳立する青年寮は我々登山者に開放された收容100人の厚生道場である。豊富な材料をそのまゝ流用したこの新しい〃山の家〃は、杉の香もほろ新しい美臭が迫る。簡素なランプの行列の下に、上下二段の寢臺が並んでゐる。玄關を入ると廣い土間に爐があり正面には事務室と小使室がある。右に炊事場洗面所つゞいて浴場へと並行してゐる。土間のすぐ左には談話兼食堂につゞいて二階への階段が露出してゐる。二階には各室の外に南面した廣い〃ベランダー〃があり休憩所がついてゐた。敷地周圍も最所切開いたのであらう廣い遊歩場に並んで國旗掲揚臺のある廣場が完備してあつた。

風呂に飛込んで疲を休める。水質が非常に惡く惡臭がいたゝまらない程に鼻をついた。

さゝやかに友とかこんで夕食をとつてから、夕暮の大臺を散歩して見たが深山の頂上にゐると思はれなかつた。暗いランプがだんだんと明るくなる頃、ほんのりとうかんだ月光。暮色の中に細い虫の音が冷感と伴に早や秋を思はしめる。ベラン

ーに出て眺める月光の世界こそ、一種靜寂な恐慌の中から新しい希望を呼起さすのであつた。そして遠い過去の追想が美しい月の世界から流れ來るのも何故か物寂しいものであつた。點々とうがぶホタルの群と輝く七星の青空が初夏の夜の思ひ出を一層深め、素朴な山の家のどこからかきこへる靜かな乙女の合奏が更に自然への魅惑を深めずにはゐられなかつた。

大杉谷の探勝

第3日の探勝コースは餘りにも神秘的であり壯觀であり、そして大膽な修錬道場であつた。

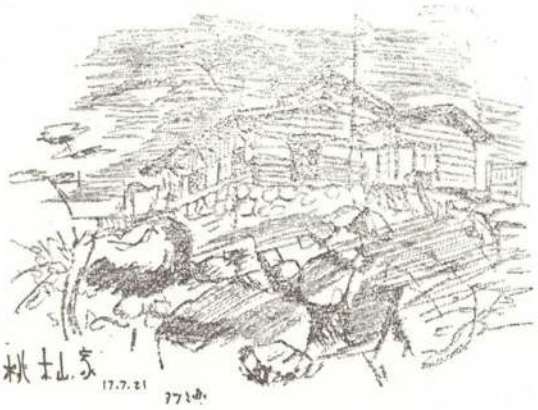
帝室林野局堂倉山の家に小憩してから、急激な勾配の岩道を降つた。何か耳のあたりに「ザアー」と云ふ音のするのを感じ乍ら、原始林の群がる國有林の大木を縫つて大瀧に出る。黒づんだ瀧つぼの脇にあやふい吊橋が架つてゐる。〃堂倉瀑〃この橋は一人づつ通つて下さいと書いてある。

その昔、大杉谷の峡谷には鹿の通ふ路もなく、附近の人でさへ魔境として恐れおののき、みだりに近づかうともしなかつたのである。しかし近時この祕境の全貌が明るみに出るに及んで、この偉大な景觀美に、ただただ驚嘆の聲を發せない者がないであらう。

大杉の本流そして支流、峡中は激流・碧潭・絕壁・瀑布の一大集積で、實に變幻極りない大溪谷美であり、かの黒部といへども決して追從を許すことの出來ぬものがある。

しかもこの大瀑布の連續は、この峡谷に足を踏み入れたものの、ひとしく嘆稱する所であらう。しかもその豪壯と奇觀は恐慌と神祕を思はしめ、正に百餘の瀑布は天下の偉觀他に比類ないものがある。

じめじめした棧道は絕壁に連續して、ぐッーとかみしめたピッケルに賴り乍ら一歩一歩あやふき難路をつく。妙を極めた岩壁の間を縫つて激する第二の與八郎瀧、絕壁から吊された奇怪な棧道からは溪谷幾千尺もあらう激流が眼下に目をくらませ、岩流の瀬に群つて極まる所、しかもなめらかな岩を奔流する第三番目の「光瀧」。午後の太陽に映つて光る幾千尺の瀑布の奔流と大音響こそ、天寶とも云ふべき祕景である。つづいて隱瀧、そして奇觀尙續く七つのつぼに激流する七ツ釜瀧！、棧道こけむす惡場の祕境こそ我々若者のよき鍛錬道場であり、大杉でなくして外に比類のない難コースであらう。



大杉谷桃の木山の家

瀧・瀧・瀧・そして又深林正に造化の妙を極めた大自然こそ天下の一大作品であり、豪壯でなければ、奇觀の妙正に天下の偉觀といつても過言ではない。又この地御料の原始林、峡谷一帶天地を埋め、天日もその爲に暗く、鬱蒼の大世界は昔より帝室林野局の監督下にあるといふ。

こゝ吉野群山の奥深き處、雲霧に鎖された大杉谷こそ、實に皇國祕藏ともいふべき大風景であり尊重清淨の極りない天寶であらう。

8年前迄は餘程の冒險家でない限り、この祕境を極むことが出來なかつたが、有力な登山家に依つて開拓、特に最近關急の一大建設事業の開拓に依つて、私達は今尙難路であるといへども目的達成せしめてくれたのである。彼等諸先輩が幾多困苦を嘗めつつ、或は幾多の犧牲者に對して、感謝の意を表さずにはゐられない。

豫定より、はるか4時間も早く14時定泊地桃ノ木山の家に到着することが出來た。南面して建つこゝ桃ノ木山の家も關急が經營らしく、いづれも新しいまゝに小じんまりと間取が行きとどいてゐる。收容人員は僅か40名に滿たないが、東西に長い寢室が二段になつて居り、玄關土間につづく炊事場、洗面所、浴室等大臺の青年寮に似たプランの形式であつた。四周は狹く岩石の間を縫ふ激流を目前に、有名な桃ノ木橋がゆつたりとその上にかゝつてゐる。

——52頁に續く



主　催
建築學會・日本建築協會
後　援
情報局・大阪翼贊會大阪府支部・朝日新聞大阪本社
會　期
昭和18年2月16日～21日 6日間
會　場
大阪難波　高島屋　6階

南方建築展覽會記

本展覽會は大東亞戰爭の赫々たる戰果に伴ひ、我國の南方への國家的大發展に鑑み、南方諸地域に於ける建築文化を通じて、その民族性を理解すると共に、建築的施設による米、英、蘭の利己的植民政策のありのまゝを紹介し、我大東亞共榮圈建設の鴻業に翼贊せんとする意圖を昂揚せんとする主旨の下に、建築學會が昨年來、東京、廣島、福岡の地に開催し各地共非常に好評を博したが本年に入り、上記の通り如月の中旬、本會と共同主催の下に、情報局、大政翼贊會大阪府支部並朝日新聞大阪本社、後援を以て、高島屋に於て6日間開催したのである。

當初の計畫は東京の次に、直に京阪神に於て開展の豫定なりしも、會場の都合にて本年に持越しとなつたが、近頃珍らしき展覽會とて高島屋に於ても非常に好意を寄せ、會場設備及宣傳等にも格別力を注がれたのは、誠に感謝に耐へない所であつた。

會場は6階エレベーター前に入口を設け、突當りに主旨を掲げ、統計、宗教、民家、現代、最後に競技設計圖の順序に展示された、尙各部を一室に收めたる如き配置で、一方より順次一巡する從來の展示方法と趣を異にし、觀衆に一部毎に纏めて觀覽させたのは、好い思ひ付であつた樣だ。
今此處に紙上で、各部の配列を一巡すると、

【南方展覽會の主旨】

前項と略同樣につき略し、順次展示を掲ぐれば

【統計の部】

一般統計　面積、人口密度、主要都市人口、木材、鐵鋼、セメント、石炭、石油、ゴム等、　9點
氣象統計　南方氣象一般　7點

【宗教建築の部】

說明、總說、支那系、印度系、各說、3點
（イ）佛印　安南、チヤムバ、カムボヂヤに於ける寺、王宮門、建築彫刻、アンコールワツト、廻廊、浮彫、バイヨン四面塔及全景、王宮等　11點
（ロ）タイ、ビルマ王宮、佛寺式宮殿、ワツトのフラケオ、ボー、シイサンペツトの露佛其他、王宮院、塔等、　9點
（ハ）ジヤワ、バリー　ジヨクヤのブロブドウル廻廊、浮彫、其他寺院等、　7點
（ニ）マライ、フヰリツピン寺院宗教分布圖等、3點

【民家の部】

說　明　2點
（イ）佛印、浮家、安南人の家
（ロ）タイ、ビルマ、バンコツク附近、純タイ式民家、水上家屋部落等、　5點
（ハ）マレー、スマトラ、ジヤワ、水上家屋、昭南附近海邊家屋、民家、集會所河の浮家、籾倉部落、農家、湖畔の家バンドンの家等、　13點
（ニ）バリー、セレベス、ボルネオ、部落、鐘塔

收穫、筏の浮家、高床家屋、酋長の家等　11點
（ホ）フヰリツピン、カリンガ族外各族の家、モバ水上の家等、　5點

【現代建築の部】

說　明　2點

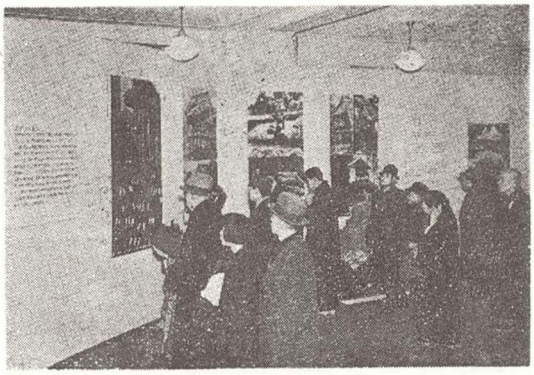
（イ）佛印、タイ、大市場、總督府廳、運動場、博物館、住宅、憲法發布記念廣場、工場、議事堂、公會堂等、　14點

（ロ）東インド、フヰリツピン舊市廳、オランダ風別莊、ホテル、記念碑、大學校舍、石油會社オランダ風住宅、映畫館、議事堂、病院、州廳等、　14點

最後に建築學會が懸賞募集せる「大東亞建設記念營造計畫當選圖案」一等より三等の入賞と佳作數點、以上を一瞥すると、なんだか南方に暫し居た様な氣がして急に一度は行つて見たい心地が湧き出した、但さすがに輕き疲れを覺えたがそれでも熱心にノートしてゐる人も數あつたのは賴しく感じられた。

更に1階陳列窓には人氣寫眞の一たる、ガンボチヤのアンコールワツト浮彫、スマトラの籾倉、バダク族の家、ニューギニヤ北部の集會場、バダヴヰア中心地帶、フヰリツピン西部市廳舍等、宗教、民家、現代の三部門の內より、割愛して簡潔なる紹介文字を圖案よく表現配列されたのは、誠に鮮かで朝夕の通勤者や途行く人の足を止め思はず會場へ誘導された様だつた。

尙高島屋獨特のグラビヤ、パンフレツトには本



展の概要を巧に寫眞と小記事で紹介され、擴く頒布された、又斬新な圖案になる、ポスターは南海鐵道沿線及、大阪市、地下鐵に、東風に吹かれて快よき色彩の閃きを見せ觀心をそゝのかした。

加ふるに、朝日本社の記事、協會誌上の會告等もありて、日々數萬の觀覽を算し、此種展覽會としては、近來稀に見るの盛況を呈した。

此結果は一面、時局に適した企てでもあつたが、又反面展示內容の勝れたる、貴重な寫眞其の他が、人の心を曳き寄せたのと、一般社會人が、南方事情の憧を吸收しようとする其の意旨と合致したからであらう？

さもあれ本催により將來吾等の双肩に荷負ふ處の、南方建築に關し、大東亞共榮圈の人情風俗の一端を建築を通じて認識を深めさせ、又よき資料に供し得た事は、初期の目的を達するに充分であつた事と思はれて、欣快に耐へない次第である。

18. 3. 20　委員記

會報

常務會（第5回）

時　3月1日午後5時40分—8時10分
所　集會室
出席者　理事　松本副會長
　　常務　堀井　主記
　　藪中　主記
　　松久保主計
　　伊藤　編輯
　　大下　編輯
　　小林　編輯

議事

1. 四會聯合請負規程改正の件
2. 「女性と住生活展覽會」建築工藝技術研究所と共同主催の件
3. 木材統制に關する委員委嘱の件
4. 學會、協會合併問題の件

常務會（第6回）

時　3月13日午後5時30分—9時30分
所　集會室
出席者　理事　竹腰副會長
　　監事　池田　監事
　　常務　中西　主記
　　藪中　主記
　　小林　主計
　　松久保主計
　　大下　編輯
　　小林　編輯

議事

1. 昭和十七年度剩餘金處分の件
2. 顧問辯護士委嘱の件
3. 會員詮衡

報告

1. 建築學會より會長就任通知
2. 一、二月分會計報告
3. 出征、入營、應徵、除隊報告

陳列場幹事會（第3回）

時　3月2日正午—午後2時
所　集會室
出席者　幹事長　松久保
　　常任幹事　榊、野中
　　幹事　矢田、藪中、吉崎
　　出品代表　三機工業城口研究所

協議事項

1. 講演會開催に關する件

陳列場講演會（第1回）

時　3月16日午後5時—8時20分
所　本みやけ（朝日ビル）
出席者　講師　商工省企業局工政課技師　伊藤憲太郎氏
　　出品者　愛國化學外18社
　　幹事　松久保幹事長外8名

講演

1. 伊藤講師は土木建築界現下の狀勢と今後の方針につき一時間餘に亘り講演あり
1. 講演後出席者よりの質疑に對し講師より懇切な應答あり午後8時30分盛會裡に意義ある本講演會を終了す

材料委員會（第3回）

時　3月4日午後6時20分—7時50分
所　集會室
出席者　委員長　楠瀬
　　幹事　後川、道田
　　委員　畔上、榊、竹中、長尾、前野、松久保、竹內、橋本、尼崎

協議事項

1. 木材寸法、品等規格再檢討の件

木材統制に關する委員會（第1回）

時　3月2日午後6時—7時
所　集會室
出席者　委員長　松本
　　幹事　松久保
　　委員　青山、池田、烏野、大下、鍵富、金子、川人、楠瀬、竹中、長尾、山本

協議事項

1. 木材の生產、配給機構、公價等に關し現行統制法中改正を要すべき點研究の上當路に建議するの件

木材統制に關する委員會（第2回）

時　3月9日午後5時30分—7時30分
所　集會室
出席者　委員長　松本
　　幹事　松久保
　　委員　青山、池田、烏野、大下、鍵富、金子、川人、竹中、增田、山本

協議事項

1. 各委員より提出の建議內容を檢討す
1. 建議案作成小委員として下記五氏決定
　松本委員長、松久保幹事、烏野、青山、山本各委員

編輯幹事會（第3回）

時　3月5日午後5時—7時半
所　集會室
出席者　常務　大下、伊藤
　　幹事　尾龜、星

議事

1. 五月號編輯方針に關する件

編輯幹事會（第4回）

時　4月2日午後5時半—7時
所　集會室
出席者　常　務　伊藤
　　幹　事　尾龜、山口、增井

議　事

1.六月號原稿依頼の件

建築必携刊行部會（第1回）

時　3月25日午後5時半—7時
所　みやけ（朝日ビル）
出席者　主　査　池田
　　幹　事　大下、小西、久良知、星、河合

議　事

1.執筆依頼及凡例協議の件

法規刊行幹事會（第1回）

時　4月1日午後5時半—7時半
所　みやけ（朝日ビル）
出席者　錦田、横見、景山、水本

議　事

1.昭和18年度「市街地建築物法令」刊行に關する打合せの件

會員動靜

入　會

會　員

谷川　敬一君　京都市下京區西九條寺ノ前町10（竹中工務店京都支店）
中井　實一君　南區瓦屋町4の12（安全索道株式會社技術部）
西田　哲郎君　東淀川區山口町472（住宅營團大阪支所建設部）
林　健三君　西區土佐堀通3の24（株式會社錢高組）
眞鍋　長美君　西成區粉濱中之町4の8（安全索道株式會社）
溝淵　肇三君　神戸市兵庫區湊町4の16笠井建築事務所內（笠井建築事務所）
小林　詳晃君　布施市足代3の26（柏原組設計部）

地方會員

田村　忠雄君　岐阜市長良東町（岐阜市役所）
寺本　清人君　廣島市外戸坂村（住宅營團廣島支所）

特別賛助員

楢崎　敬一君　尼崎市北難波町2の97（推名營業所）

普通賛助員

德田　昇平君　西淀川區傳法町北3の86（大久保組）

退　會

會　員

大倉一彦君、大橋健二君、大村市太郎君、關本辰藏君、武田政一君、宮橋正雄君、和田猪三郎君、有川慶三君、尾籠實取君、小林敏郎君

地方會員

飯田榮一君、加藤豊一君、中西一郎君、安藤龍太郎君、坪井善勝君、村谷定君

特別賛助員

寺井一勇君

普通賛助員

小澤誠君、辻强君、山崎三朗君、谷口維郎君、秋本義夫君、生島英夫君、岡本辰義君、山田茂男君

轉居・轉勤

會　員

森山　清治君　神戸市林田區片山町3の147
加藤　熊雄君　東區農人橋2の13大阪橋本組內
小笠原良次君　住吉區西長居町318
松見　智雄君　京都市右京區野里町桂西口
笹岡美代吉君　（勤務先）西區阿波座1の1大和工業株式會社
山口　正君　（勤務先）京都市施設局管財部營繕課
小林　健男君　住吉區天王寺町979
若山　旅人君　東京市豊島區雜司谷1の23
加藤　健吉君　北區東野田町148
村上　清一君　中華民國唐山市陡河東岸唐山製鋼株式會社
田中　文雄君　兵庫縣加古郡荒井村566の6（勤務先）田熊汽罐株式會社播磨工場）
神田源治郎君　熊本市健軍町大林組健軍出張所
上西　正敏君　東京市蒲田區桃谷町1の224
龜岡　二郎君　佐世保郵便局氣付海南海軍建築部黃流工事々務所
松永　巍君　德島市かちどき橋3の32
前田　善增君　青森縣三戸郡下長苗代村八戸局區內淺沼組出張所
菅　陸二君　靜岡土木部都市計畫課
本橋　常吉君　兵庫縣武庫郡鳴尾村鳴尾字西大山33の1竹友寮內
平松　太郎君　神戸市灘區篠原本町3の34（勤務先）神戸市役所防衛施設課
吉田　茂樹君　豊中市新免108の1
村島　彰君　池田市東市陽105（勤務先）大阪市役所理財局建築部防火改修課

三宅　精策君　兵庫縣武庫郡鳴尾村鳴尾字西大山33の1竹友寮內

鈴木　進君　兵庫縣武庫郡鳴尾村鳴尾字西大山33の1

坂場　正之君　山口縣防布市中關町吳海軍建築部中關建築工事々務所

地方會員

玉置豊次郎君　名古屋市東區西二葉町2の16

中家　貫君　住吉區阪南町西1の51

小林辰五郎君　新京特別市八嶋通42福昌公司工事課

有馬　正君　名古屋市港區熱田前新田中組桑山清三郎方

二宮　太平君　通化省通化市二道江東邊開發株式會社社宅502

綱永　庄八君　山口縣小野田市2145綱永周之助方

柴垣　貴雄君　住吉區山阪西之町1の27（勤務先）大阪市東區備後町2の21野村殖產貿易株式會社不動產部

太宰　二郎君　滿洲國東安市治政街官舍94

深川　勝美君　廣島市向洋東洋工業清水組作業所

久保　未雄君　東區上本町4の610株式會社木會社內

安井　芳治君　名古屋市昭和區姬宮町2の34

桑原　勇君　兵庫縣武庫郡本山村小路5の161

關谷信次郎君　府下北河內郡枚方町坂13

美住　一夫君　廣島市千田町1安部殿方

福島　增三君　北京市北長街114竹中工務店北京支店

宮坂　一世君　東京市淀橋區上落合2の785

賀本　一男君　山口縣熊毛郡光町光井野原清水組出張員詰所

田野岡　稔君　廣島市猿樂町58清水組出張所

中山　文夫君　廣島市翠町1781の1

松本　實君　西淀川區姬島町167

市田　隆治君　住吉區昭和町西1の29

辰住　重雄君　兵庫縣加古郡別府町別府50

中尾　茂君　福岡縣大村市大入町336の2大阪橋本組內

日高　輝雄君　東淀川區元今里北通1の16

山上　正吉君　東京市芝區二本榎西町2

橫山　一夫君　京都市左京區吉田手北宮町24閑家殿方

師田　庄次君　吳市上畑町100（吳海軍建築部）

柴田　八郎君　明石市大藏町2の3570

瀧石　一夫君　滿洲國遼陽市東町78

池永　恒男君　蒙疆宣化縣下花園驛前東亞電氣化學工業下花園工場內

小島　正三君　住吉區阪南町2の31

菅　實就君　東京市大森區新井宿2の1515大森ホテル端雲閣（勤務先）東京帝國大學第一工學部建築學科教室

富樫　正己君　三重縣一志郡久保町井戶山大阪橋本組出張所內

谷村　定雄君　奈良縣吉野郡吉野町字丹治谷村多一郎方

柴田　四郎君　東京市小石川區白山御殿町107伊丹殿方（勤務先）麹町區丸ノ內有樂町每日會館七階トヨタ自動車株式會社東京出張所內

東海航空工業株式會社內

永田庄右衛門君　三重縣度會郡二見町

西村　銀三君　山口縣熊毛郡光町下三井和田住宅17號

安田　臣君　東京市澁谷區代官山町代官山アパート26號館193（勤務先）住宅營團東京支所建設部

松井喜三郎君　咸北羅津府雪雀ケ丘大林組羅津出張所

中尾　越郎君　金澤市石坂角場3の2

遠藤　司君　福島縣石城郡錦町吳羽紡績工場東畑建築事務所

特別賛助員

高戶　紀綱君　東區高麗橋2の9野村ビル日本サツシユ統制株式會社大阪支店

奥津又一郎君　兵庫縣武庫郡良元村伊子志寶塚南口266

普通賛助員

岩田　唯夫君　廣島市翠町1784

白井　正三君　德山市德山曹達會社內清水組作業所內

國川　正君　岡山縣淺口郡連島町鼈島新田大林組連島出張所

橋　菅夫君　長崎縣東彼杵郡崎針尾村松嶽川島源太郎殿方

榊谷健治郎君　滿洲國新京特別市通化胡同官舍65

關　平八君　（勤務先）住宅營團大阪市所建設部工務第1課

善　高明君　大分縣下毛郡大幡村大字大員大林組中津出張所

回收で適當な代替品が見付からずお困りの方・破損して材料がなくて取替にお困りの方・新期取付けの方・キット皆樣の御滿足を得る

日本商工會議所選定
金屬回收用

三角雨樋

木製刳抜

木材を資材とするために豊富です。アングル狀刳抜製にて强靱です。特殊防腐、防水裝置の爲、耐久力大、切口は三角形で合せ目なく釘を用ひず取付は至極簡易にて日本趣味に調和します

大阪總發賣元
日光建材社
大阪市浪速區逢阪下之町20
電話 戎 ⑦⑥ 8 7 5 番

キャマライト



KHS
代用品協會員
木山標記商事合名會社
大阪市阿倍野區阿倍野筋四丁目四八
電話天王寺 ⑦⑦ 0651番・9313番

建築と社會
第26輯 第4號

毎月1回1日發行 定價㊍ 1册 50錢（郵稅2錢）
12册 6圓（〃 24錢）
昭和18年4月10日印刷 昭和18年4月15日發行

發行・編輯 戸川弘
印刷人
大阪市北區朝日ビル日本建築協會內
印刷所 新日本印刷有限會社
大阪市北區南錦町46番地
發行所 財團法人 日本建築協會
大阪市北區中之島3ノ3朝日ビル
電話曳北濱(23)4501番(9)
振替口座大阪 39975 番
日本出版文化協會會員番號222043
配給元 日本出版配給株式會社
東京市神田區淡路町二丁目九番地

禁轉載
本號に揭載せるものは一切これを無斷にて轉載し又は單行本に上梓その他の複製行爲をなすことを禁ず。

美素

古い住宅も新築同樣となる
新築住宅にお手入のいらぬ

★新築家屋美素加工
新築落成と同時に本所獨特のピソ液にて洗淨し木材變色の原因となる樹液を取り、其の上をピソにて仕上の加工をすると完全なる變色防止加工となり、優美な艶を有しフキコミの勞を省き頗る經濟的です。

★古家屋新裝美素加工
古家もピソ液で洗淨すると新築同樣となり、其の上を新築美素加工と同樣の加工をすると前者同樣の結果となる。

（特種技術を要しますから弊所の請負加工と致して居ります）

大阪市天王寺區東平野町四丁目二一
美素工業所
電話天王寺(77)四〇〇三番

●第二六集 第四号 掲載広告一覧（掲載順）

盛工務店
日本竹筋工業所
米本栄商店
ライトラバー商会
日本陶織
織本建築設計計算事務所
矢橋大理石商店
南満建材工業所
建築金物商会
平松釣戸車製造所
協和製作所
大阪窯業セメント
萩工業
大西商店
前田白蟻研究所
大阪伊丹商店
東洋リノリューム
東亜化工
マルケイ建築材料
椎名営業所